

富士市文化財調査報告書 第六集

# 鈴川の富士塚



富士市教育委員会

# 鈴川の富士塚

2018年3月

富士市教育委員会





1. 富士山と富士塚（南から）



2. 田子の浦港を望む（東から）



1. 伊豆半島を望む（北西から）



2. 鈴川の富士塚（上空から）



1. 調査前の富士塚（南から）



2. 東海名所 天之香久山の富士 絵葉書（右に富士塚が見える・個人蔵）



1. 富士曼荼羅図 (富士山本宮浅間大社蔵・富士宮市教育委員会写真提供)

# 例 言

- 1 本書は静岡県富士市鈴川西町 628 - 496 外において実施した富士塚遺跡の発掘調査及び、考古学、地質学、文献史学、民俗学調査による富士塚遺跡の文化財調査報告書である。
- 2 発掘調査は平成 27 年度周辺整備工事及び平成 29 年度範囲確認事業に伴い実施した。また、その他の調査については平成 29 年度に実施した。
- 3 本報告書刊行のための整理作業は平成 27 年（2015）に開始した。石川 武男（文化振興課主幹）が担当し、平成 30 年（2018）3 月 31 日、本書の刊行をもって終了した。
- 4 本書の編集は石川が担当し、伊藤 愛（文化振興課主事補）が補佐した。  
執筆は第 1 章、第 2 章第 1、3 節、第 3 章、第 5 章を石川が、第 2 章第 2 節は山本 玄珠（静岡県立富士宮東高等学校教諭）が担当した。  
第 4 章では山本 玄珠（第 1 節）、池谷 初恵（伊豆の国市文化財調査員：第 2 節）、大高 康正（静岡県世界遺産センター准教授：第 3 節）、井上 卓哉（富士山かぐや姫ミュージアム学芸員：第 4 節）、松田 香代子（愛知大学総合郷土研究所研究員：第 5 節）の各氏に玉稿を賜った。
- 5 現地調査における記録写真は石川、佐藤 祐樹（文化振興課主査）が撮影した。  
また、現地の航空写真、富士塚遺跡の現況図、塚周りの礫の分布図については株式会社フジヤマ富士営業所と委託契約し、同社が作成した。
- 6 出土した陶磁器は堀内 秀樹氏（東京大学埋蔵文化財調査室准教授）に年代的位置付を御教示いただいた。
- 7 調査の記録、出土遺物は富士市教育委員会（市民部文化振興課）が保管している。
- 8 発掘調査及び現地聞き取り調査、また、本書の作成にあたり次の方々や関係各機関に御協力と御指導を賜りました。厚くお礼申し上げます。  
池谷 初恵、伊藤 真央、海野 朱美、大高 康正、加藤 昭夫、陣野原 力、鈴木 英次、高野 夏姫、建部 恭宣、服部 正純、堀内 秀樹、藤澤 良祐、中野 晴久、松田 香代子、持田 秋男、森 まどか、安池 智江子、山本 玄珠、山本 智子、神奈川県立金沢文庫、静岡県立中央図書館、静岡県歴史文化情報センター、宗教法人称名寺、鈴川区管理委員会、名古屋市博物館、日本食品化工株式会社、富士山本宮浅間大社、富士宮市教育委員会文化課、霊泉寺、山口県文書館（五十音順、敬称略）



# 凡 例

- 1 座標は平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、世界測地系（平成 14 年 4 月施行）を使用している。
- 2 本報告書では呼称として「富士塚」・「鈴川の富士塚」を用いるが、長谷川角行を開祖とする富士講が、江戸とその周辺に築いた「富士塚」とは異なるものである。その理由は以下のとおりである。
  - ・本文中で示した江戸時代の文献において富士講の富士塚成立以前に富士塚の呼称が用いられている。
  - ・富士講の「富士塚」は富士山登拝の代わりとすることを目的とし、富士山を模して精巧に作られているのに対して富士講以前の「富士塚」はそれを目的としていないことが、先学の研究でも明らかとなっている。
- 3 第 2 章、第 3 章では埋蔵文化財包蔵地名「富士塚遺跡」を名称として用いる。
- 4 土層・遺物の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。

# 目次

巻頭図版

例言

凡例

目次

## 第1章 富士塚の概要

- 第1節 現在の状況 ..... 1
- 第2節 富士塚の工事 ..... 2

## 第2章 立地と環境

- 第1節 地理的環境 ..... 5
- 第2節 地質学的背景 ..... 6
- 第3節 歴史的環境 ..... 7

## 第3章 発掘調査

- 第1節 調査経過 ..... 11
- 第2節 調査成果 ..... 15

## 第4章 考察

- 第1節 富士塚周辺の礫群について（山本 玄珠） ..... 27
- 第2節 吉原湊をめぐる中世遺跡の概要（池谷 初恵） ..... 31
- 第3節 歴史資料にみる富士塚（大高 康正） ..... 43
- 第4節 地誌とビジュアルメディアから鈴川の富士塚の実像を探る（井上 卓哉） ..... 55
- 第5節 富士塚と民俗（松田 香代子） ..... 69

## 第5章 総括 ..... 85

写真図版

報告書抄録

# 挿図目次

## 第1章 富士塚の概要

### 第1節 現在の状況

第1図 現在の富士塚の様子	1
第2図 富士市の位置図	1
第2節 富士塚の工事	
第3図 「浅間山復元奉納御芳名」碑	2
第4図 昭和30年代の富士塚	2
第5図 富士塚遺跡位置図	3
第6図 富士塚及び敷地内現況図	4

## 第2章 立地と環境

### 第1節 地理的環境

第7図 富士市域内の地質分類図	5
-----------------	---

### 第2節 地質学的背景

第8図 富士市南部の地質分類図	6
-----------------	---

### 第3節 歴史的環境

第9図 富士市遺跡分布図	8
第10図 吉原湊と吉原宿変遷	9

## 第3章 発掘調査

### 第1節 調査経過

第11図 平成20年度調査風景	11
第12図 平成21年度調査トレンチ	11
第13図 平成27年度調査前神事	12
第14図 平成27年度中間報告会	12
第15図 富士塚遺跡検討会風景	13
第16図 富士塚調査全体図	14

### 第2節 調査成果

第17図 平成27年度出土遺物	15
第18図 富士塚外周の礫	15
第19図 トレンチ配置図・エレベーション図	16
第20図 トレンチ平面図・断面図	17
第21図 富士塚周辺礫の測量調査	18
第22図 石燈籠	18
第23図 塚周辺礫分布状況図	19
第24図 塚周辺礫詳細図①	20
第25図 塚周辺礫詳細図②	21
第26図 塚周辺礫詳細図③	22
第27図 塚周辺礫詳細図④	23
第28図 石燈籠配置図・立面図	24
第29図 石燈籠	25
第30図 富士山の登山道	26

## 第4章 考察

### 第1節 富士塚周辺の礫群について

第31図 富士塚礫種大分類	28
第32図 富士塚の礫種の割合	28
第33図 富士塚礫偏平率	28
第34図 浜礫種大分類	29
第35図 浜礫の礫種の割合	29
第36図 浜礫偏平率	29

### 第2節 吉原湊をめぐる中世遺跡の概要

第37図 今井中世五輪塔群出土資料	32
第38図 鎌研古墳出土資料	33
第39図 出口遺跡出土資料	35
第40図 沢上遺跡出土資料	36
第41図 遺跡の位置と中世の街道	38

### 第3節 歴史資料にみる富士塚

第42図 「高田富士」『絵本江戸土産』	43
第43図 穴山信君判物写	45
第44図 重文 称名寺絵図	46
第45図 「元吉原」『東街便覧図略絵巻五』	50

### 第4節 地誌とビジュアルメディアから鈴川の富士塚の実像を探る

第46図 「郡誌編纂資料副本」浅間塚項目1	57
第47図 「郡誌編纂資料副本」浅間塚項目2	57
第48図 富士山禪定図 部分	58
第49図 駿州吉原宿絵図 部分	59
第50図 駿河国富士山絵図 部分	59
第51図 富士山表口真面之図(江戸時代) 部分	60
第52図 富士山表口真面之図(明治10年) 部分	60
第53図 富士山表口真面之図(明治11年) 部分	60
第54図 鈴川の富士	62
第55図 (富士勝景) 天の香久山の富士(部分)	63
第56図 東海名所 天の香久山の富士	63
第57図 (富士勝景) 鈴川附近ヨリ見タル富士(部分)	63
第58図 (富士新八景) 天の香久山の富士(部分)	63
第59図 東海道香具山富士(部分)	63
第60図 静岡 鈴川付近之富士	63
第61図 砂丘を越えて 国立公園富士・香久山より	64
第62図 鈴川の富士塚付近の空中写真①	65
第63図 鈴川の富士塚付近の空中写真②	65
第64図 鈴川の富士塚付近の空中写真③	65
第65図 鈴川の富士塚付近の空中写真④	66
第66図 鈴川の富士塚付近の空中写真⑤	66
第67図 鈴川の富士塚付近の空中写真⑥	66
第68図 鈴川の富士塚付近の空中写真⑦	66
第69図 鈴川の富士塚付近の空中写真⑧	67

### 第5節 富士塚と民俗

第70図 下田富士(下田市本郷)	70
第71図 大原のオノット(磐田市)	71
第72図 富里の日参での浜垢離(磐田市)	71
第73図 鈴川の富士塚例大祭	73
第74図 日向の七草祭舞台の結界石(静岡市)	74
第75図 伊東市新井の神輿の浜降り	75
第76図 吉原祇園祭の浜降り(富士市)	75
第77図 大淵の清明塚(掛川市)	77
第78図 大瀬神社のアゲイン(沼津市)	77
第79図 砂丘にある石造物群(富士市大野町)	78
第80図 高塚の熊野神社(浜松市)	79
第81図 阿字神社里宮(富士市鈴川)	80
第82図 保寿寺の施食会(三俣淵)	81

## 第5章 総括

第83図 吉原湊口と街道・宿場の変遷	85
第84図 今泉邑宝鑑	86
第85図 富士塚に至る鳥居	87
第86図 富士塚の浅間宮社	87

## 挿表目次

### 第3章 発掘調査

#### 第2節 調査成果

第1表 石燈籠計測 .....	24
-----------------	----

### 第4章 考察

#### 第1節 富士塚周辺の礫群について

第2表 礫調査表 .....	30
----------------	----

#### 第2節 吉原湊をめぐる中世遺跡の概要

第3表 時期区分と陶磁器分類 .....	34
----------------------	----

第4表 貿易陶磁出土状況 .....	41
--------------------	----

第5表 瀬戸美濃出土状況（志戸呂・初山含む） .....	41
------------------------------	----

第6表 東海系陶器出土状況（常滑・渥美他） .....	42
-----------------------------	----

第7表 まとめ .....	42
---------------	----

#### 第5節 富士塚と民俗

第8表 富士市域の浅間神社 .....	69
---------------------	----

## 巻頭図版目次

### 巻頭図版 1

1. 富士山と富士塚（南から）
2. 田子の浦港を望む（東から）

### 巻頭図版 2

1. 伊豆半島を望む（北西から）
2. 鈴川の富士塚（上空から）

### 巻頭図版 3

1. 調査前の富士塚（南から）
2. 鈴川天の香久山の富士 絵葉書

### 巻頭図版 4

1. 富士曼荼羅図

## 巻末写真図版目次

### PL.1

1. 駿河湾から望む富士市
2. 富士塚から望む富士山

### PL.2

1. 平成27年度調査 浅間宮社撤去後（南東から）
2. 平成27年度調査 表面コンクリート撤去作業（南東から）
3. 平成27年度調査 表面コンクリート撤去後（南東から）
4. 平成27年度調査 頂上部半裁（南から）
5. 平成27年度調査 1トレンチ完掘（南東から）
6. 平成27年度調査 1トレンチ北壁土層断面（東から）

### PL.3

1. 平成27年度調査 2・3トレンチ完掘（北東から）
2. 平成27年度調査 2トレンチ西壁土層断面（北東から）
3. 平成27年度調査 近世遺物出土状況（北から）

### PL.4

1. 平成27年度調査 裾部礫検出（南東から）
2. 平成27年度調査 3トレンチ完掘（南東から）

### PL.5

1. 小田原ノ陣之時海道筋諸城守衛図①
2. 小田原ノ陣之時海道筋諸城守衛図②
3. 小田原ノ陣之時海道筋諸城守衛図③



# 第1章 富士塚の概要

## 第1節 現在の状況

静岡県富士市鈴川西町に所在する塚を地元では「富士塚」と呼んでいる。閑静な住宅地に位置し、塚から南に200 m程向かうと駿河湾が広がる。現在、高さ14 mの防波堤によって海浜と仕切られている。

塚は地元で「浅間山」、「浅間さん」、「<sup>せんげん</sup>天之香具山<sup>あまのかぐやま</sup>」とも呼ばれている。塚は径16 m、高さ2 mの円錐形で、表面がコンクリートで覆われ、その上に川原石が石積風に貼り付けられている。頂上部には「浅間宮」と刻んだ石祠が鎮座し、塚の南面は石祠に至る階段と手すりが設けられている。第2節にて詳細に触れるが、平成28年3月に塚を管理している鈴川区管理委員会によって、塚頂部を2 m程度下げる工事が行われた。それ以前は、地上からの高さが4 mほどあった。塚の周囲には拳大から人頭大の礫が帯状に巡っている。その幅は東側から北側にかけては2 mほどだが、西側から南東側にかけて5 mと拡がりを見せる。礫は1～3mm程の海砂の上のみられ、石のみられない場所は海砂のみで構成されている。

現在、塚の周辺は整備され、地域住民が地区の祭りを行うなど、交流の場として利用されている。富士塚の南に通る市道から塚の南面まで舗装された参道が続く。この参道は塚の西側を通り、北側にある市道に接続してい



第1図 現在の富士塚の様子

るため、参道を散歩する光景がよく見受けられる。

富士市は平成27年7月から観光振興として富士山に赴くウォーキングコース「ルート3776」を設定した。塚がそのコースのスタート地点となったため、現在、市内外から多くの観光客が訪れている。

このように現在の富士塚は文化財としてだけでなく、地域住民の憩いの場として、さらに富士市の観光拠点のひとつとして多くの人々が集う場所となっている。



第2図 富士市の位置図

## 第2節 富士塚の工事

前節でも若干触れたが、現在の富士塚の形状は、過去2回の整備工事によって形成されている。ここではその工事内容を記載するとともに、塚の形状変化の歴史について触れたい。

### 1. 昭和51年整備工事

第1回目の整備工事は昭和51年に行われた。当時の施行方法と経過については工事から40年を経過していることもあり、施工した建設会社にも記録は残されていなかった。また、工事に携わった関係者も鬼籍に入られた方、所在の分からない方が多く、その内容について聞き取りを行うことができなかった。このため、塚にいたる参道に設置された芳名碑と塚の南面、向かって右側に設置されている塚の由来の書かれた説明碑、周辺住民への聞き取り調査、平成27年埋蔵文化財確認調査の結果を元に当時の工事について推測する。

参道に建立された「浅間山復元奉納御芳名」碑(第3図)によると「昭和五拾叁年壹月拾八日、施主鈴川区管理委員会」の記載があることから、鈴川区管理委員会によって工事が実施されたことがわかる。碑には地元企業、周辺町内会、商店会、寺社、個人等多岐にわたる寄付者名がみられ、地域全体で工事費をまかなったことが窺われる。

工事の内容は平成27年度確認調査の結果からおおよそ、次のことが明らかとなった。詳細は後述するが、自然堆積で形成された低丘に客土を盛り、直径16m、高さ4mほどの円錐状の基盤を整形後、その上に長さ40～50cmの川原石を全面に配置したと考えられる。また石の固定と基盤保護のため、石の隙間にコンクリートを手作業で塗り固めたことが確認できた。コンクリートの厚さは5～8cmほどであった。この姿は、当時、土地の古老から本来の高さを聞き取りし、再現したものといわれている。昭和51年以前の姿は昭和30年代に撮影された写真が僅かに残るのみである。写真には松林の中に低い丘がみられ、拳大の石が散在している(第4図)。これを裏付けるように、周辺住民からの聞き取りでは「周辺は桃畑があるのは覚えているが、松が茂り、塚があると認識できなかった」、「松が茂った中に2mほどの高台があり、周辺に浜石が落ちていた」といった証言が得られた。

では、本工事を行う前の富士塚の姿はどのようなものであったのか。江戸中期に成立したいくつかの地誌にその記述がみられるので、ここで紹介したい。

享保18年(1733)に成立したとされる地誌『田子の古道』には、「この山は自然の砂山にあらず。この辺りの砂にてわぎとつき上げたる、はなれ山なれば いただきに宮居、鳥居ありて 古木のはいゆがみたる、そぎ、松四方へはびこる・・・<中略>・・・いずれの頃より富士参りの輩、浜下りして、石壺つつ荷い上げ、この山へ登りて、富士禅定の軽からん事を頼み、これにより富士塚とはいふなり。」とある。また、文政3年(1820)



第3図 「浅間山復元奉納御芳名」碑



第4図 昭和30年代の富士塚

成立の地誌『駿河記』には「富士塚（略）砂にて築上たる塚にて、上に富士浅間の小祠あり。富士禪定する者浜に下りて垢離をとり、石一づゝかつぎ上、此塚の上にて禪定の祓をするに依て其名あり」とする記載がみられる。両地誌ともに砂山に石積された塚の姿が想定される。

また、明治40～44年の間に駿河富士郡吉原町（現在の富士市吉原本町）に居住していた民俗学者山中共古（1850～1920）が著した手記『吉居雑話』には塚の当時の姿が紹介されている。手記によると「砂山海岸ニ石塚ノ高キ處アリ、目立テ高シ登リ見ニ石造リノ小社アリ、波除土手ノ上ニ石灯籠一基アリ・・・」と記され、下には塚のスケッチが詳細に描かれ、前記地誌を実際に証明するかのごとき姿が記されている。明治時代に撮影された古写真や絵葉書にもスケッチと同様な姿が写されていることから、明治時代以前の富士塚はおよそ巻頭図版3-2掲載の絵葉書のとおりであったことが想定される。このため、昭和51年工事は古老の聞き取りからこの姿を再現したものであり、前述の絵葉書から想定される高さとはほぼ同様の高さと考えられる。

## 2. 平成28年整備工事

本工事は塚北部に見える富士山が、塚と重なって見える景色を確保することと石を積み上げる行為を再現することを目的としていた。

当初工事は南面に既設してある階段の上段と高さを揃えるため、頂上に鎮座した浅間宮が刻まれた石祠を撤去後、塚上部を2.2m程下げた後、再度50cmの盛土を行う計画であった。しかし、後述する平成27年確認調査で塚の基盤となる砂丘が残存することが確認されたことから、工事は砂丘を保護するため、当初計画掘削深度より20cm浅くした。工事は平成28年3月1日に開始し、同月26日に浅間宮祠を再度設置し、工事を終了した。

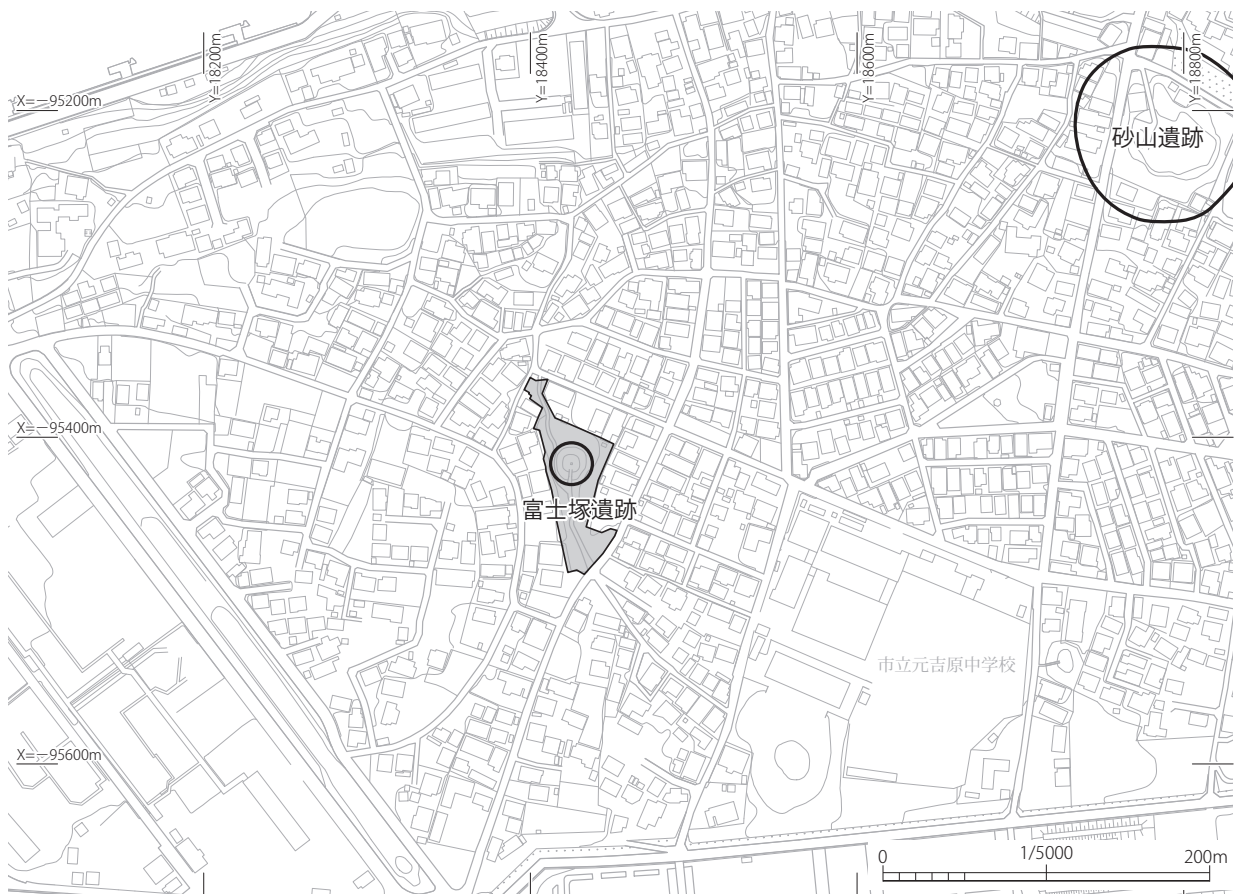
なお、調査から工事の工程については下記のとおりである。

### H27.12.3 浅間宮撤去工事、祭り

12.8 確認調査用頂上部、北側コンクリート撤去

12.9～17 埋蔵文化財確認調査

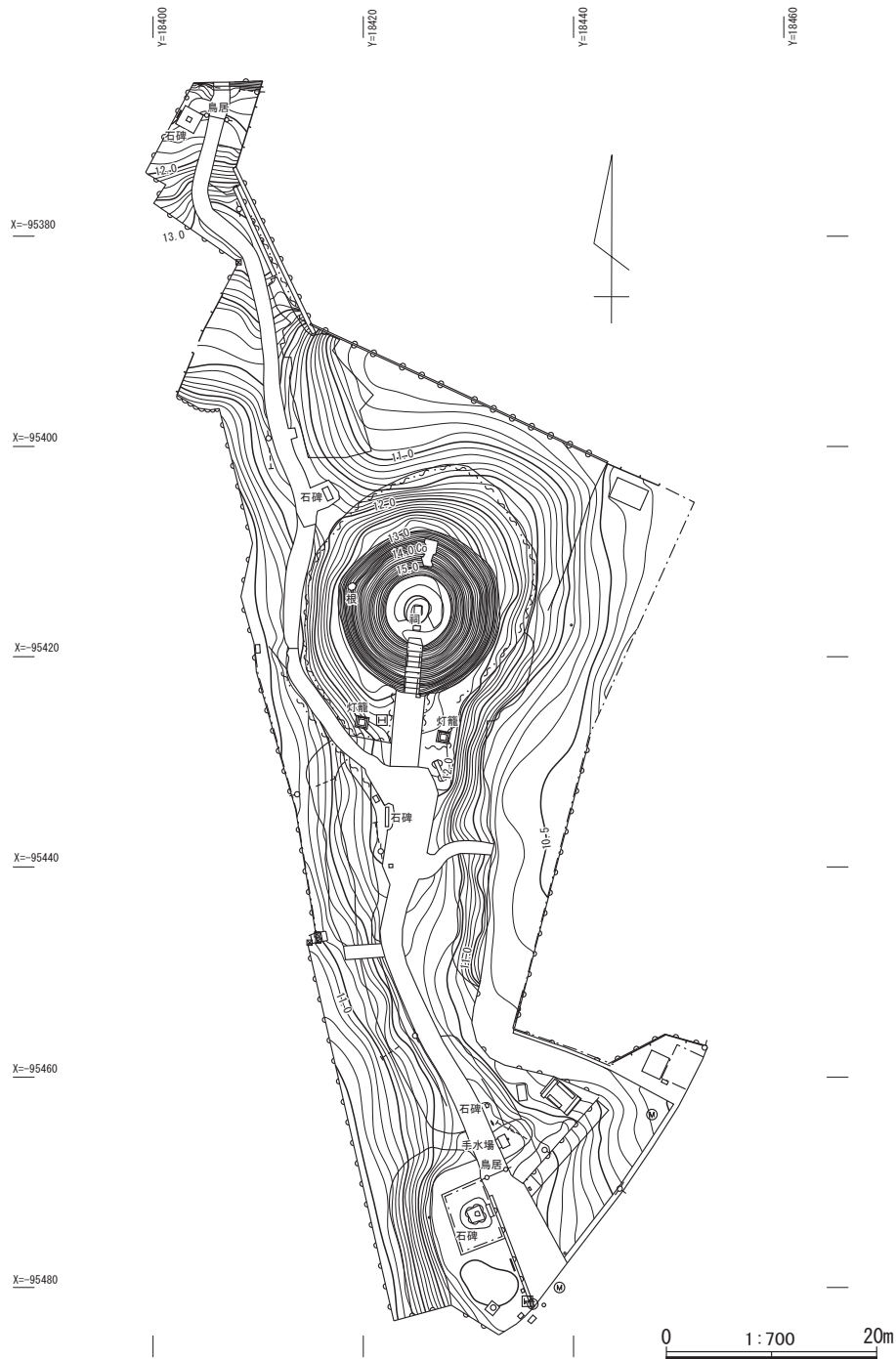
12.15 平成27年度第2回文化財保護審議会にて



第5図 富士塚遺跡位置図



- |                             |                          |
|-----------------------------|--------------------------|
| 現地視察                        | 2.17 富士市教育委員会より鈴川区管理委員会へ |
| 12.22 現地にて鈴川区管理委員会並びに報道機関   | 県指示書を通知                  |
| に確認調査中間報告会を開催               | 2.19 富士市役所文化振興課と鈴川区管理委員会 |
| 12.28 鈴川区管理委員会より文化財保護法 93 条 | で現地にて工事内容の確認、打合せ         |
| の届出が提出される。                  | 3.1 工事着手                 |
| H28. 1.14 コンクリート復旧工         | 3.26 工事完成及び頂上部へ浅間宮祠設置    |
| 2.4 静岡県教育委員会から文化財保護法第 93    | 4.17 現地にて工事完成祝を開催        |
| 条の届出に伴う工事立会い指示              |                          |



第 6 図 富士塚及び敷地内現況図

## 第2章 立地と環境

### 第1節 地理的環境

富士塚遺跡の所在する富士市は静岡県東部に位置する。富士市は南に駿河湾を望み、北には富士山が位置し、その山裾が市域に延びる。西には岩本山に代表される星山丘陵が、更にその西には富士山造山活動以前に形成された岩淵火山群が控える。また、北東には火山活動を停止した愛鷹火山地が位置する。

また、市には多くの河川が流れる。西には日本三大急流のひとつである富士川と富士山南麓に端を発する潤井川が流下し、駿河湾に注ぐ。中央には和田川、滝川が、東には愛鷹山麓を源流とする赤淵川、須津川が南下する。それらの河川は市域の南東にひろがる浮島ヶ原低湿地帯を横断する沼川へと合流し、駿河湾へと至る。

これらのことから、富士市の地形は南北の標高差が大きく、起伏に富んでいることが特徴といえる。

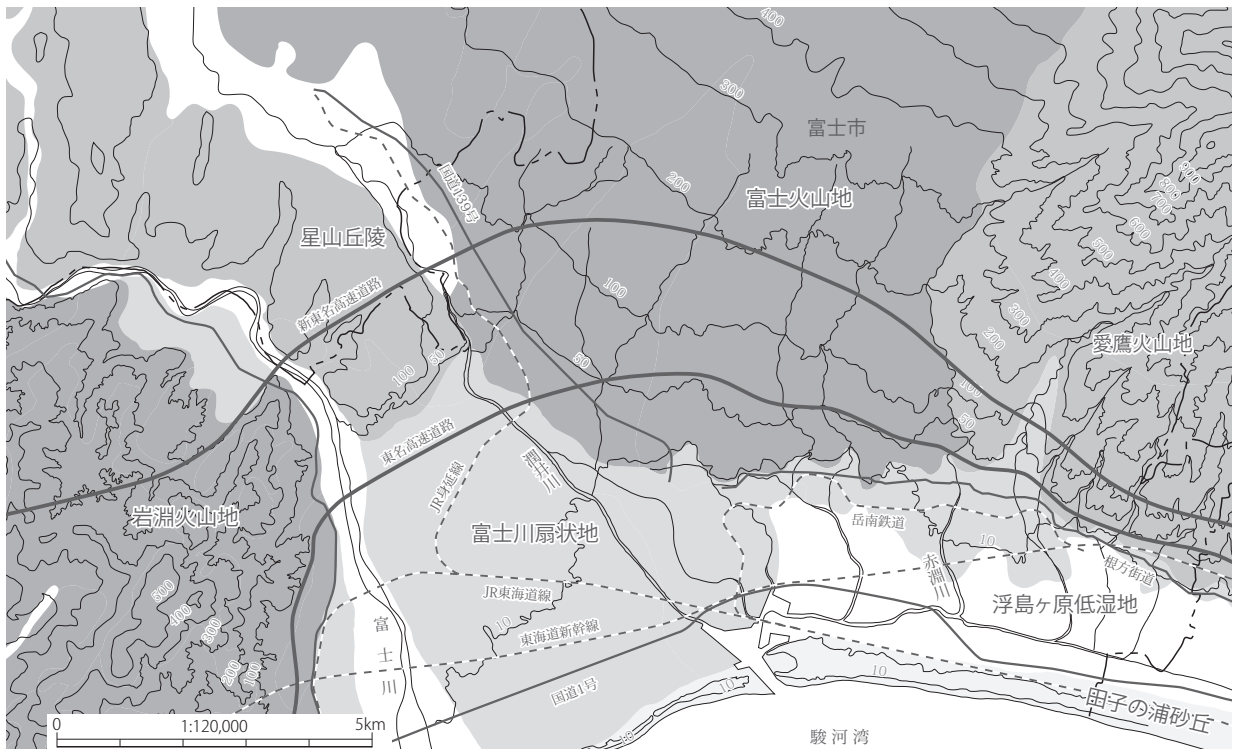
市域の地形は大きく富士山、愛鷹山の火山系山地と、富士川河口付近のデルタ地帯、海岸平野の進んでいる浮島低湿地帯の平野部に大別される。

山地は前述の通り、南東に傾斜する比較的単純な地形である富士火山麓、星山丘陵、岩淵火山群、火山の壮年期侵食地形を示す愛鷹山に区分される。

平野部は富士川の運搬した物質が堆積して形成された扇状地型三角州である富士平野、東西約15km、南北約2km、海拔高度平均約5m以下の低地で、江戸時代までは滞水性の沼湖であった浮島ヶ原、富士川河口付近から隣接する沼津市を流れる狩野川左岸の牛伏山まで、約22kmにわたって、田子の浦の海岸線をのびる田子の浦砂丘に区分される（小川1986）。

田子の浦砂丘は位置と形成要因から浮島砂丘、西田子の浦砂丘、東田子の浦砂丘、千本砂丘、我入道砂丘に分類される（小川1986）。その規模は東西方向で約14.5km、南北約400～900m、高さは田子の浦港の東で海拔23m、東端に行くに従い5～10mと低くなる。

本報告を行う富士塚遺跡は東田子の浦砂丘の西端に所在する。周辺には入り江である田子の浦港（旧吉原湊）が



第7図 富士市内の地質分類図

隣接し、北側にはJR吉原駅があり、東西に在来線路が通る。

塚の周辺は昭和30年代に宅地化し、市街地となっている。明治期の絵葉書では塚周辺はすべて砂地で、松林

がところどころにみられるが、人家は存在していない。

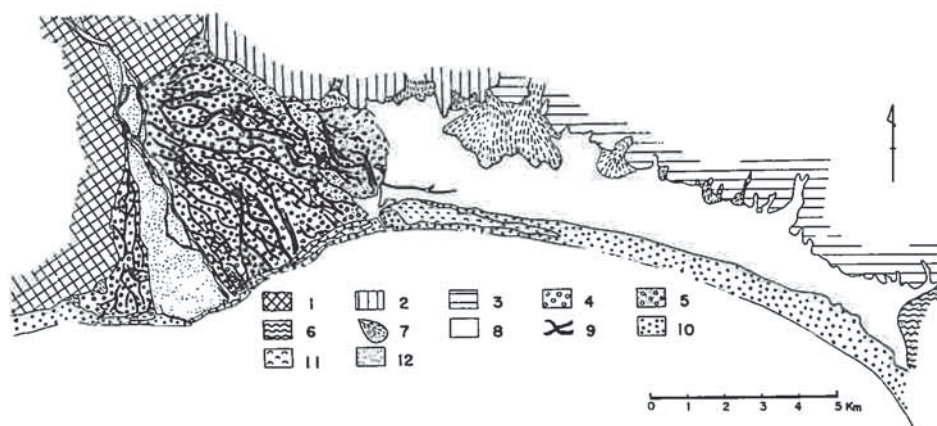
また塚から潮除堤が連続し、海までつながっていたという(荻野2006)。

## 第2節 地質学的背景

富士塚が分布する田子の浦砂丘や千本浜までの現在の海岸は礫を主体としており、第二放水路周辺での砂丘断面の小川(1965)の調査では、その礫種は小川(1965)が示すように砂岩、頁岩、珪石、緑色凝灰岩、閃緑岩や黒色片岩などを主体としている。今回、浜礫と比較するため、富士川河口から、前田、富士塚南、柏原、第二放水路付近、千本浜、牛臥海岸の海浜礫の調査を行った。調査方法は各地点で礫100個を無作為に抽出し、礫1個1個に礫種の肉眼による同定、礫径、円磨度、長径、中径、短径の計測を行った。30頁第2表に今回調査した富士川河口から牛臥海岸までの礫種を示したが、富士川河口では堆積岩が62%、火成岩が30%、変成岩が8%で堆積岩のうち砂岩は45%と圧倒的に多い。また、変成岩が8%あり、緑色の凝灰岩が7%ある。このため富士川河口は白、黒、緑、白黒とカラフルな礫で彩られた海岸となっている。このような礫種の特徴は田子の浦港西の前田海岸、田子の浦港を隔て柏原海岸、千本浜海岸まで連続しており、千本浜まではカラフルな海岸が続く。これに対して狩野川の西海岸である牛臥海岸は堆積岩が多くとも30%前後で火成岩は70%前後と圧倒的に火

成岩からなる。変成岩はほとんど観察されなくなる。また火成岩でも安山岩と玄武岩の両者を合わせると全体の70%前後でほとんど安山岩と玄武岩からなる。つまり、富士川から千本浜までは同質の礫からなり、富士川系列の礫を主体としており、狩野川を挟んで東側は狩野川が運ぶ富士山系の玄武岩、箱根系の安山岩などを主体としていることがわかる。これは、富士川が運んできた甲府盆地や南アルプスを作る岩石が西から東へ向かう強い沿岸流によって運搬されていることを示している。

また、この田子の浦砂丘も小川(1965)の第二放水路建設時の調査によって同様の結果を得ており、富士塚が位置する田子の浦砂丘は形成時から富士川の影響を強く受けた砂丘であることがわかる。一般に河川の堆積システムは、蛇行河川と網状河川の2つのシステムに大別される。蛇行河川は深い単一の河川河道からなり、広い氾濫源をもつ。河道の深さを埋めた厚さ数mの砂層と広い氾濫源に堆積した泥質層から構成される。堆積物は上方にむかって細粒化し、斜交層理からリップル葉理へと変化する。一方、網状河川は浅い複数の河川からなり、氾濫源は限られる。おもに砂質または礫質のチャネ



- 【凡例】 1：山地 2：富士山の裾野 3：愛鷹山の裾野 4：富士川扇状地（本体） 5：富士川扇状地（端部）  
6：黄瀬川扇状地 7：小規模扇状地 8：灌漑がほとんど行われていない三角州の低地  
9：消失した低水位の川筋 10：沿岸の砂州 11：砂丘 12：濁れ川の河床

翻訳：井上卓哉

1966（昭和41年） Hiroshi KADOMURA 「Natural Disasters due Soft Ground Conditions in the Gaku-Nan Region, Shizuoka Prefecture, Central Japan」 『GEOGRAPHICAL REPORTS OF TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY』より

第8図 富士市南部の地質分類図（富士市立博物館2009『第47回企画展「富士川を渡る歴史」解説図録』より転載）

ル堆積物のくり返しからなり、泥質堆積物がきわめて少ないのが特徴である。網状河川は、一般に水量変化も河川勾配も大きく、粗粒堆積物を運び扇状地面上に形成される。河川の地形も複雑で、植生をもつ中洲、バー、分流があり、川（水路）は合流をくり返すために砂層と礫層がくり返す。富士川は水量変化が激しく、多くの中洲を形成し、それらは森島、鮫島、中島などの地名として残っている。季節によっては河口に砂嘴を形成するなど、網状河川の特徴を持つ。このような網状河川は砂嘴と後背湿地を持つことがしばしばあり、田子の浦砂丘は富士川の粗粒堆積物を西から東に向かって運んだ沿岸流によって形成された砂嘴であると考えられる。そしてその後背湿地として浮島沼（渦）が田子の浦砂丘と並行に形成されたものと思われる。このため、渦の底部に最後まで残った河川が沼川であり、田子の浦砂丘に平行に川筋が形成された。なお、小川（1965）の調査結果をみると田子の浦砂丘には、3つの不整合があり、礫と炭化物が砂にふくまれ、淘汰の悪い堆積物をつくるものと、砂や礫は分級されて非常に淘汰がよく、炭化物をふくまず、

礫は円磨度がよく、やや傾いたくさび状層理が観察されている。そしてこれを覆うように淘汰のよい砂の層がある。これらの3つの不整合で区別された堆積物の特徴は、後浜と前浜の堆積物および風成砂の岩相を示すものである。つまり、田子の浦砂丘の原型は、富士川の砂嘴として形成されたものと考えられる。しかし、あの高さに前浜、後浜の堆積物が存在することや地形的な面として東西に存在することからは、局所的な隆起陥没という地殻変動よりも、第四紀にあった氷河性海面変動によって、間氷期の温暖な時期の海面上昇（海進）があったと考えられる。小川（1965）は縄文海進を挙げているが第四紀の何回かあった海進時の海面上昇時に海岸近くで形成された砂嘴で、その後浸食を受けた後、氷期の海退にもなう海面低下が起こり、それを繰り返して、現在のよう形で東西の高まりとして砂丘として残った。数回の海面上下動の間に差別浸食をうけ、最も高い高まりとして、現在の富士塚周辺が残ったと考えられる。その後浜から風によって風成砂の堆積物がこの砂嘴を覆い被せたと考えられる

### 第3節 歴史的環境

富士塚遺跡は東田子の浦砂丘上に立地する。このため、本節は田子の浦砂丘上の遺跡を中心に歴史的環境を概観する。

#### 1. 縄文時代～平安時代

日本列島は縄文時代に起きた海進の影響によって、海岸線が内陸に侵食していた。このため、縄文時代の遺跡は富士市域の北側にある富士山南麓から愛鷹山南西麓、西側の富士川河岸段丘といった標高の高い位置に分布している。田子の浦砂丘上には縄文時代の大規模な遺跡は認められず、わずかに柏原遺跡で加曾利B 2～3式の土器が出土し（藤村・若林 2013）、三新田遺跡で縄文時代晩期の土器（平林編 1983）が確認されている。

東田子の浦砂丘周辺に定型化した集落が形成されるのは、潟湖である浮島沼が陸地となった弥生時代末以降である。浮島沼周辺では張り出した低地部に行僧遺跡（藤村・若林 2012）が成立する。また、浮島沼西の沖田遺跡で同時期の土器が確認されている（佐藤・服部 2012）。砂丘東では柏原遺跡（藤村 2013）で集落が

確認されている。しかし、縄文時代と同様、遺跡の数は少なく、浮島沼を見下ろす宇東川遺跡（若林編 2012 ほか）、愛鷹西南麓にある宮添遺跡（佐藤 2011・2012 ほか）など、富士山南麓から愛鷹山南西麓の緩斜面に分布が多い。

古墳時代になると東田子の浦砂丘に大規模な集落や墳墓が営まれる。前記した柏原遺跡は古墳時代前期まで集落が継続した。これに続いて柏原遺跡から 1.5km ほど西にある三新田遺跡は古墳時代前期から拠点的な集落が形成される（佐藤 2010）。

富士塚遺跡の北西には砂山遺跡が所在する。遺物散布量は少ないものの、古墳時代初期に遡るものも確認されている（志村 1986）。田子の浦西側に位置する田子の浦港遺跡は遺物の出土量が極めて多く、弥生時代後期の土器片や古墳時代の土師器片の他に矢板等の木器類も発見されている。

富士宮市、富士市、沼津市の遺跡では近畿や北陸といった遠隔地の土器が認められる。これらは海上を通り、田子の浦砂丘にある入江（旧吉原湊）を経由し、陸路や



の刻印があった。他の五輪塔も形状から2基が概ね同時期と推定されている（松井ほか 2009）。出土した骨壺とされる常滑産の三筋壺は12世紀後半と推測され、本遺跡が中世初頭まで遡る可能性が示された（藤村 2016）。

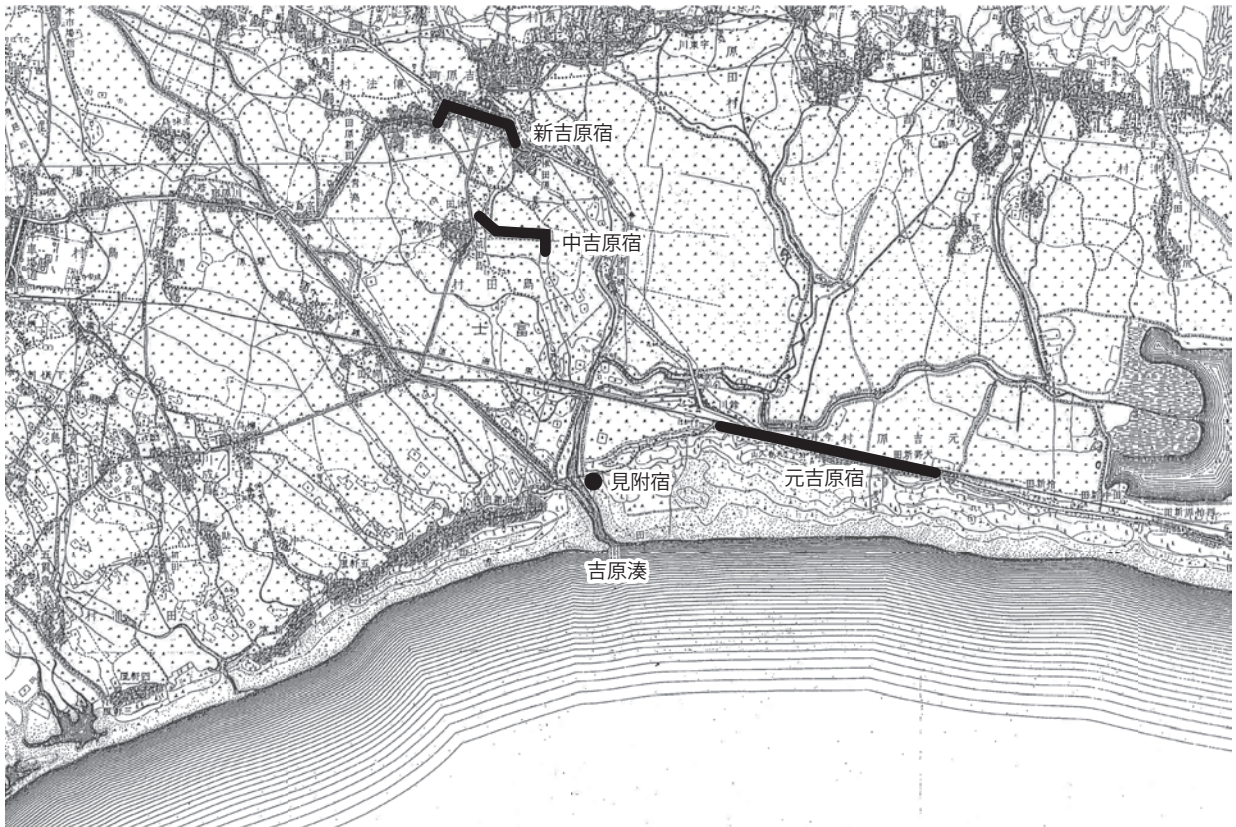
これらの陶器の発見は、中世において富士塚遺跡周辺で活発な生産活動や交易が行われたことの表れと捉えられる。また、五輪塔群の東側には平安時代作とされる毘沙門天像を祀る妙法寺がある。同寺周辺では平安時代末から鎌倉時代初頭の大寺院が存在した可能性も指摘されており（鈴木 1981）、見附が宿として盛業していた表れといえる。

中世には、田子の浦港は吉原湊と呼ばれた。詳細は後章に譲るが、この時代になると吉原湊の渡船管理と「道者商人問屋」を営んだ矢部氏が台頭する。ここでいう道者とは富士山を登拝する信仰者であり、この道者が湊を利用していたものと考えられる。また、矢部家文書には今川、武田といった有力な戦国大名から問屋や渡航役が安堵された朱印状がみられ、権力者が湊と見附を重要な戦略拠点と考えていたことがうかがわれる。このため、当地は同時に前述の大名による所領争いが頻繁に起こった。同地周辺には天文23年（1554）、北条氏康父子が、

今川義元、武田信玄と対峙した際、陣をはったと伝えられる天之香具山砦が存在する。

江戸幕府を築いた徳川家康は東海道の整備を進め、江戸日本橋から京都三条大橋まで53の宿場を設けた。吉原湊は延宝2年（1674）、加島代官を勤めた古郡氏による富士川の築堤工事が完成すると、富士川の洪水被害がなくなり、商港として栄えたとされる（鈴木 1981）。これを示すように、湊で内海産の塩、伊豆産の石材、遠州産の海産物や瀬戸物が陸揚げされ各地に運ばれた。さらに旗本領の年貢米、愛鷹山の木炭、富士山の材木、紙、塩鮭などが、湊から江戸まで廻船で運送された（註2）。このため吉原には回漕業者が多かったといわれている。

一方、見附宿は近世初頭に所替することとなった。その理由を地誌『田子の古道』には見附周辺は季節風が強く、砂が吹きまくり、家や並木の末まで埋め、砂山を吹き崩して住居することができなくなった。さらに道路にも凹凸ができ、今井と見附間の伝馬の連絡ができなくなったため、やむなく所替したとして記されている。また、時期は遡るが、天文23年（1554）の「今川朱印状」（矢部家文書）には暴風雨による高波によって、見附宿問屋役の矢部家当主将監が亡くなったことが記されている。



第10図 吉原湊と吉原宿変遷（明治28年陸地測量部地図を改変）

これらのことから、戦国末期から江戸時代初めの自然災害によって、見附は大きな被害を受け、吉原湊周辺から東側の今井・鈴川地区に移動したとされる。また、その際宿場の名を「吉原」に改めた。

さらに『田子の古道』によれば、この吉原宿も海岸からの度重なる風砂と寛永8年(1631)の富士川の氾濫、同16年の津波(高潮か)によって大きな被害を受け、同16から17年に内陸にあたる場所に所替を行っている。この移転先も延宝8年(1680)閏8月6日襲来した台風による高潮で壊滅した。このため、天和元年(1681)、吉原宿は再び所替を行い、更に内陸に移動し、現在まで続いている。現在は便宜上、鈴川、今井地区にあった宿場を「元吉原宿」、次を「中吉原宿」、最後の所替の地を「新吉原宿」と呼称している。なお、平成11年に行われた中吉原宿遺跡の発掘調査では、17世紀中葉の良好な廃棄資料を得、土層の検討から高潮の存在を証明することができ(木ノ内2002)、文献資料と考古学資料による総合的な成果を挙げている。

中吉原宿に宿場が移転後、吉原村と称していた元吉原宿は寛文8年(1668)に鈴川と改めたとされる。文久元年(1861)編纂された『駿河志料』によれば「此地吉原驛舎の地にて、其頃は今井村坂の口より西、砂山地蔵前まで、驛舎にて、後に北へ一町曲て、今の湊口まで驛舎とし、石佛地藏の松を町場と唱ふ。〈中略〉寛永十辰年今泉、傳法、依田橋当の地、河原分芝間を賜はり……」とあることから現在の鈴川地区がこれにあたる。

明治時代になると富士市は近代製紙産業が発展し、吉原湊(田子の浦港)はパルプの原料搬入や紙の輸出港として近代化した。昭和になると、富士市は更に製紙業が隆盛を極め、現代も「紙のまち富士市」として知られている。

このように、富士塚遺跡周辺は古代から重要な交通拠点として現代までその役割が引き継がれてきたといえる。

#### 【註】

1 弘安6年(1283)に成立したとされる阿仏尼の紀行文『十六夜日記』に「廿七日、明けはなられて後、ふし河かわたる、朝川いとさむし、かそふれは十五瀬をわたりぬる」とある。

2 富士川に舟運が開かれると、甲州～駿州に様々な物資を運んだ。享保17年(1732)、『岩本村旧記』によると吉原湊でも、対岸の岩本村から物資が運ばれたとされる。

#### 【引用・参考文献】

- 小川賢之輔 1965 「駿河湾北部に発達する田子の浦砂丘の研究『地学評論』38巻
- 小川賢之輔 1986 「富士・愛鷹両火山南麓の平野」『富士市の自然』富士市
- 荻野裕子 2006 「富士講以外の富士塚－静岡県を事例として－」『民具マンスリー』第38巻10号
- 木ノ内義昭編 2002 『中吉原宿遺跡』富士市教育委員会
- 佐藤祐樹編 2010 『宮添遺跡Ⅲ』富士市教育委員会
- 佐藤祐樹編 2011 『宮添遺跡Ⅳ』富士市教育委員会
- 佐藤祐樹編 2012 『宮添遺跡Ⅴ』富士市教育委員会
- 佐藤祐樹編 2012 「沖田遺跡133次調査地点」『富士市内遺跡発掘調査報告書－平成22・23年度－』富士市教育委員会
- 佐野五十三 2008 「駿河国富士郡における8世紀代の移住と集住」『静岡県考古学研究40周年記念号』静岡県考古学会
- 志村 博編 1986 『富士市の遺跡』富士市教育委員会
- 鈴木富男 1981 『鈴川の歴史』鈴川区管理委員会
- 田島 公 2005 「三駅二伝の消長と横走関－駿河国の駅伝制の変容－」『沼津市史 通史編 原始・古代・中世』沼津市
- 平林将信編 1983 『三新田遺跡発掘調査報告書』富士市教育委員会
- 藤村 翔 2016 「富士市の中世墓～今井中世五輪塔群・沢上遺跡出土資料の紹介～」『富士山かぐや姫ミュージアム館報第31号(平成27年)』
- 藤村 翔・若林美希 2013 「柏原遺跡第6地区」『富士市内遺跡発掘調査報告書－平成22・23年度－』富士市教育委員会
- 松井一明・木村弘行・溝口彰啓ほか 2009 「静岡県下における中世石塔の研究5」『静岡県博物館協会研究紀要』第32号 静岡県博物館協会
- 渡井義彦編 1988 『富士市の古墳』富士市教育委員会
- 1733 『田子の古道』

# 第3章 発掘調査

## 第1節 調査経過

富士塚遺跡は4次まで確認調査を実施している。第1・2次調査はそれぞれ『平成14・20年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』、『平成21年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』にて調査結果を報告しているので、参照されたい。

このため、本報告では第3・4次調査成果を中心に報告していく。ただし、調査経過については、平成27年度富士塚確認調査が周辺整備という一連の流れの中で進行していることから、第1次調査から記述していくこととする。

### 1. 平成20年度調査（第1次調査）

#### 調査にいたる経過

第1章で記載したとおり、当該調査は事業者である鈴川財産区が富士塚を中心とした周辺の整備事業を計画したことを契機としている。

平成19年4月10日、文化振興課に地元である鈴川財産区（富士塚整備委員会）から富士塚を含む周辺の再整備を計画したい旨の話があった。また、併せて今後、事業を進める上でどうしたらよいかと相談された。文化振興課は当該地が埋蔵文化財包蔵地「富士塚遺跡」にあたることから確認調査の必要があると鈴川財産区に説明した。これを受け、平成20年4月、鈴川財産区は土地所有者名で埋蔵文化財試掘確認調査依頼書を提出した。

#### 調査の経過

確認調査は平成20年8月5日～6日にかけて実施し



第11図 平成20年度調査風景

た。今回の事業が富士塚に到る参道の整備を実施することから、富士塚の範囲を確定するための調査と富士塚の詳細測量図の作成を目的として、塚裾に5箇所のトレンチを設定し、確認につとめた。

### 2. 平成21年度調査（第2次調査）

#### 調査にいたる経過

平成21年4月に再度、鈴川区管理委員会から富士塚周辺の整備計画を進めたい旨、打診があった。計画内容は鈴川財産区が富士塚北東部に資材倉庫を建設することと、その際に倉庫建設予定南側の竹林を伐根したいことを伝えられた。これを受け、文化振興課は、倉庫建設予定地が埋蔵文化財包蔵地範囲から外れているものの、その重要性を鑑み、確認調査を実施した。

#### 調査の経過

調査は平成21年6月23日～30日の間に実施した。平成20年度に引き続き、富士塚の基礎的なデータ収集を目的として、塚周辺の地形測量、写真撮影を行った。また、倉庫建設対象地付近に2箇所のトレンチを設定し、遺構、遺物の確認につとめた。

### 3. 平成27年度調査（第3次調査）

#### 調査にいたる経過

平成27年4月24日、木之元神社氏子総代及び鈴川区管理委員会が来課し、富士塚の整備についての相談が



第12図 平成21年度調査トレンチ



あった。文化振興課は平成23年5月10日付け富教文発第83号の文書にて、富士塚の歴史調査や復元についての課題をクリアするまで、富士塚本体は現状を維持してほしいことを依頼していた。しかし、富士山世界遺産登録もあり富士塚を訪れる人が増えてきたため、地元では再び整備を検討しているとのことであった。

このため、同年9月24日、鈴川区管理委員会と文化振興課にて再度協議を行った。その際、文化振興課は富士塚が埋蔵文化財包蔵地であることから、周辺整備計画に基づく確認調査を再度行いたいことを伝えた。その結果、確認調査の結果を踏まえた上で、今後について協議することで合意した。これを受け、鈴川区管理委員会より平成27年10月27日に埋蔵文化財試掘確認依頼書が提出され、確認調査を実施することとなった。

#### 調査体制

平成27年度の埋蔵文化財調査体制は以下の通りである。

調査主体者	富士市教育委員会	教育長	山田幸男
	市民部文化振興課	課長	町田しげ美
		統括主幹	前田勝己
		専門員	渡井義彦
	文化財担当	主査	石川武男
		上席主事	佐藤祐樹
		調査員	服部孝信
			小島利史

#### 調査経過

確認調査は塚本体の残存状況を確認することを目的として、頂上石祠を撤去後、平成27年12月8日から実施した。調査はまず、頂上部及び塚北側のコンクリートと貼石の撤去を手作業で行うことから始めた。その後、コンクリートを外した部分にトレンチを設定し、塚の本体部の確認と遺物の検出につとめた。調査は、地元が



第13図 平成27年度調査前神事

計画した工事との調整で長期化した。平成28年1月21日の埋め戻し及び塚北側のコンクリートによる形状復旧をもって、終了した。

本確認調査期間中の平成27年12月15日、富士市文化財保護審議会委員の現地視察が行われ、同日の平成27年度第2回富士市文化財保護審議会にて、富士塚遺跡確認調査の中間報告を行った。さらに平成29年1月22日に地元鈴川区管理委員会並びに報道機関に対して調査中間報告会を開催した。

#### 4. 平成29年度調査（第4次調査）

##### 調査にいたる経過

文化振興課は、平成27年度に実施した第3次調査にて富士塚の基盤である砂山を確認した。また調査の結果、富士塚周辺に散在する礫が富士塚に関連する石である可能性が高まった。このため、平成29年度に文献調査、民俗調査、石材調査をあわせて実施し、その成果について富士市文化財調査報告書第六集として報告書を刊行することを計画した。報告書作成に伴い、富士塚の現状を図化、写真撮影し、記録保存することを目的として確認調査を実施することとなった。調査は平成29年7月3日～7月25日の間に実施した。

##### 調査体制

平成29年度の埋蔵文化財調査体制は以下の通りである。

調査主体者	富士市教育委員会	教育長	山田幸男
	市民部文化振興課	課長	久保田伸彦
		統括主幹	植松良夫
		主幹	石川武男
	文化財担当	主査	佐藤祐樹
		主事補	伊藤愛
		調査員	小島利史



第14図 平成27年度中間報告会

## 調査経過

調査は平成 29 年 7 月 3 日より現況の地形測量を開始し、7 月 7 日に現地での測量を終了した。

7 月 24 日からは塚周辺に散在する礫を人力によって検出し、7 月 26 日からポールによる写真測量を開始、27 日に完了した。

## 5. 整理作業

### (1) 基礎整理作業

本整理作業は平成 29 年 4 月 1 日から開始し、本書の刊行をもって終了した。期間中に出土土器の洗浄や遺物の図化作業、遺構図、遺物図等の編集、各図トレース作業、観察表等作成、遺物の写真撮影、報告書等の執筆を行った。

#### 本整理作業体制

本整理作業体制は以下の通りである。

調査主体者	富士市教育委員会	教育長	山田幸男
	市民部文化振興課	課長	久保田伸彦
		統括主幹	植松良夫
整理担当		主幹	石川武男
		主査	佐藤祐樹
		主事補	伊藤愛
		調査員	小島利史
整理補助	文化振興課	臨時職員	稲葉万智子
			小田貴子
			井上尚子
			金田純子

なお、本書にて報告する遺物、図面、写真はすべて富士市役所市民部文化振興課にて保管・管理されている。

### (2) 検討会

本書では各分野にわたる総合的な調査を目指し、塚周辺に広がる礫と周辺海岸に分布する礫の分析を山本玄珠、富士市内周辺の中世陶磁器の調査整理を池谷初恵、文献資料調査を大高康正、富士塚の古写真・古地図の収集、分析調査を井上卓也、周辺への聞き取り調査、民俗事例調査を松田香代子がそれぞれ担当した。また、各分野の成果を分析し、富士塚の成立、造営時期等をテーマに右記検討会を実施した。

第 1 回 (平成 29 年 4 月 28 日)

「主旨説明」(石川)

「富士塚遺跡の発掘調査について」(石川)

会場 富士市埋蔵文化財調査室

参加者 池谷、石川、井上、大高、松田

第 2 回 (平成 29 年 5 月 24 日)

「吉原湊をめぐる中世遺跡の概要(仮)」(池谷)

「歴史資料にみる中世・近世の富士塚」(大高)

会場 富士市埋蔵文化財調査室

参加者 秋山、池谷、石川、伊藤、大高、松田

第 3 回 (平成 29 年 7 月 12 日)

「ビジュアルメディアから探る富士塚の実像」(井上)

「鈴川の富士塚伝承の背景—小須湊・三俣淵・天香久山—」(松田)

会場 富士市埋蔵文化財調査室

参加者 秋山、池谷、石川、伊藤、井上、大高、松田

第 4 回 (平成 29 年 8 月 25 日)

「方針の確認」(石川)

「中世東海道のルートについて」

会場 富士市埋蔵文化財調査室

参加者 秋山、池谷、石川、伊藤、大高、松田

第 5 回 (平成 29 年 10 月 19 日)

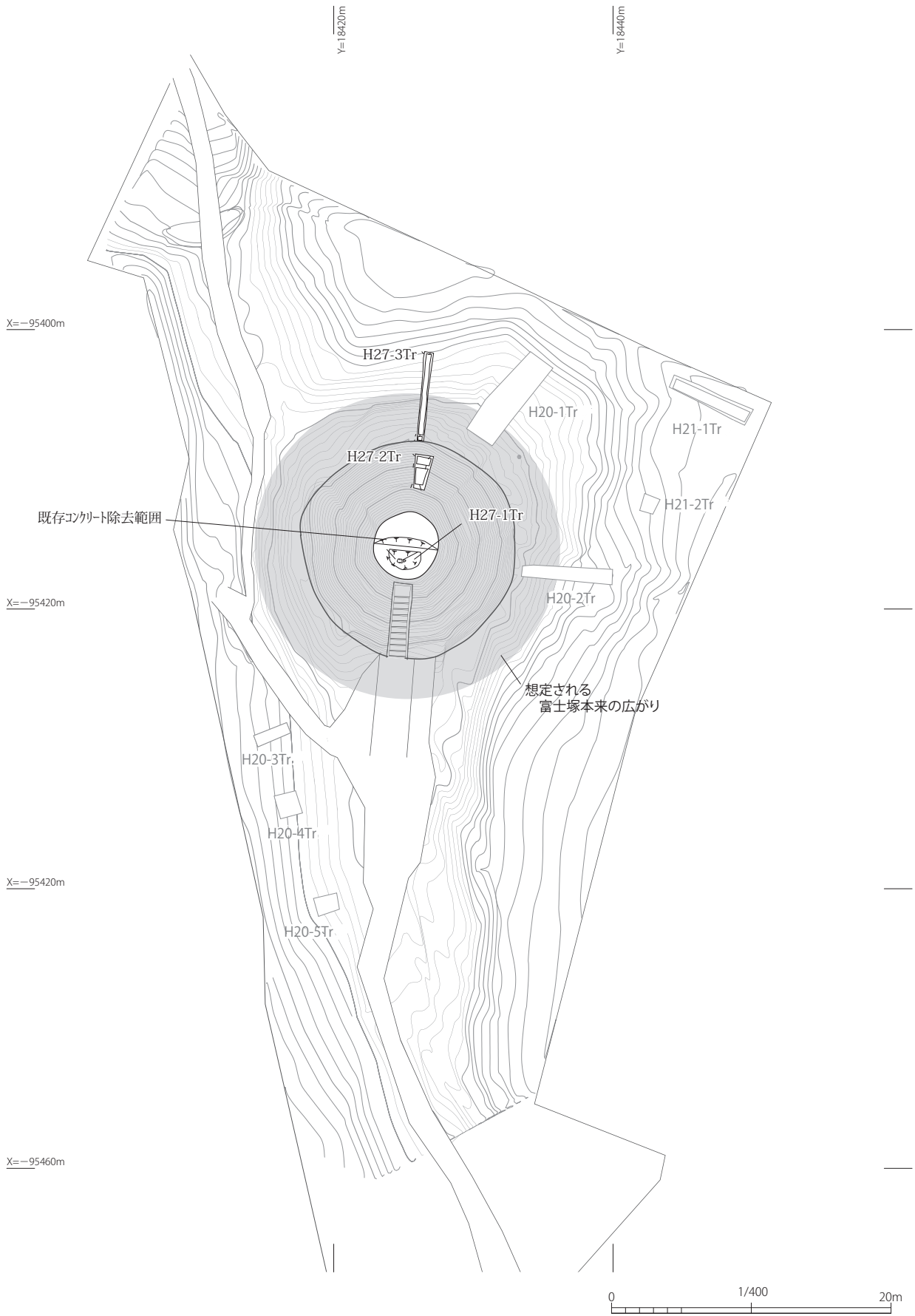
「富士塚とは何か」

会場 富士市埋蔵文化財調査室

参加者 池谷、石川、伊藤、井上、大高、松田



第 15 図 富士塚遺跡検討会風景



第 16 図 富士塚調査全体図

## 第2節 調査成果

### 1. 平成27年度調査（第3次調査）

#### 遺構

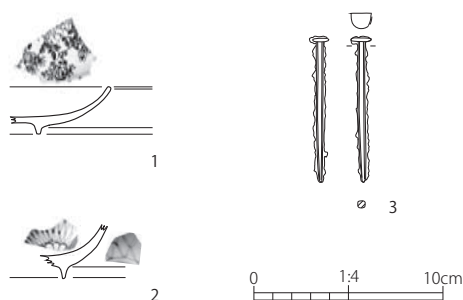
今回の調査が塚本体の状況を確認することを目的としていることから、頂上部に半円形状にトレンチを設定し、現存する塚の頂上部の検出を行った。調査上これを1トレンチとした。また、2トレンチとして参拝用の階段がない塚北部に南北方向のトレンチを設定し、塚に積み上げられた石と塚の基盤部の検出につとめた。

さらに2トレンチの延長線上、現在のコンクリート基礎部より北に連続する箇所にも3トレンチを設定し、北側の石の拡がりについて確認した。

1トレンチでは、頂上部にあった浅間宮社基礎下から210cmでⅢ層を確認した。Ⅲ層にいたるまでは碎石やコンクリート碎片を含む攪乱土Ⅰ層で、昭和51年工事の盛土と判断した。なお、Ⅱ層は確認できなかった。

2トレンチではⅡ層直下にⅢ層を検出した。また、Ⅲ層下にⅣ層、Ⅴ層を確認した。Ⅲ～Ⅴ層まで堆積に乱れがないことから、自然堆積の層と考えられる。このことから塚は文献にみられるように人工的に造作されたものではなく、参道から高さ2.60m前後の砂で形成された自然低丘であったことが明らかとなった。

また、2トレンチではⅢ層直上に直径10cmほどの丸石が散在する状況が認められた。同様に3トレンチでも3m以北まで丸石が確認された。このため、平成20年度に実施された第1次調査と同様、塚の基底が直径21～22m程度まで広がることが明らかとなった。ただし、現状でも裾部周辺には同様な丸石が確認されている。これらの石が裾部周囲に巡らされたものか、信仰



第17図 平成27年度出土遺物

の中断後に散在したものかは明らかにできなかった。

#### 遺物出土状況

遺物は2トレンチから3点が出土した。2点は陶磁器、1点は不明鉄製品であった。いずれもⅡ層中から出土した。出土遺物

1は18世紀中ごろの肥前焼の碗である。外面が二重網目、内面には一重網目と中央に菊花文が施されていることから18世紀第2四半期に位置づけられる。

3は鉄釘で残存長7.6cm、幅・厚さともに0.35cmを測る。断面方形を呈する和釘である。

### 2. 平成29年度調査（第4次調査）

#### 遺構

塚周辺の礫 平成21年、27年の調査によって、富士塚周辺に散在する礫が富士塚に関連するものである可能性が高まった。このため、礫の分布状況を写真測量するため、塚周辺礫の検出と精査を行った。その結果、礫は北側正面と西側園路に沿って分布が集中することが明らかとなった。また東側では塚から50cm幅で南東部に石の集中が認められた。礫の大きさは10cmから30cmと大きさにばらつきが見られた。なお、礫の構成、石材等の分析結果は第4章第1節にて山本氏が後述される。

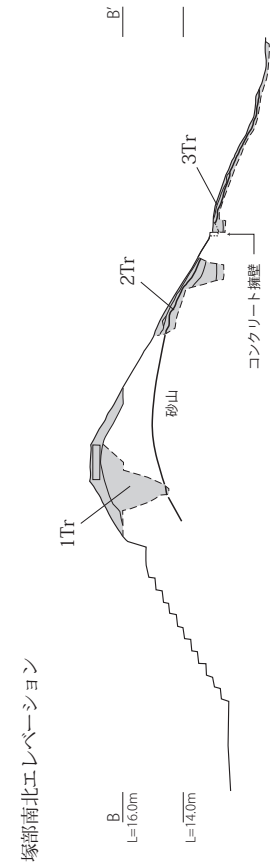
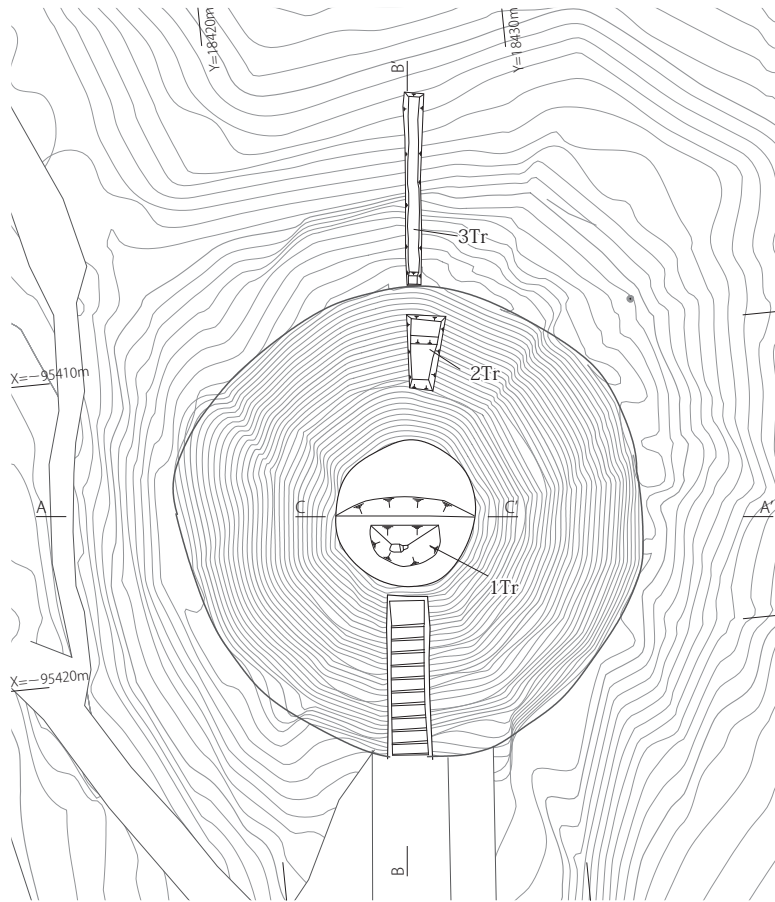
石燈籠 塚の南西、南東に参拝用の階段を挟んで対に位置する。南東の石燈籠は昭和51年の復元時に寄進されたものであることから本調査では対象としなかった。

南西の石燈籠は高さ2.13m、幅1.21m、奥行1.18mを測る。各部位の法量については第1表のとおりである。

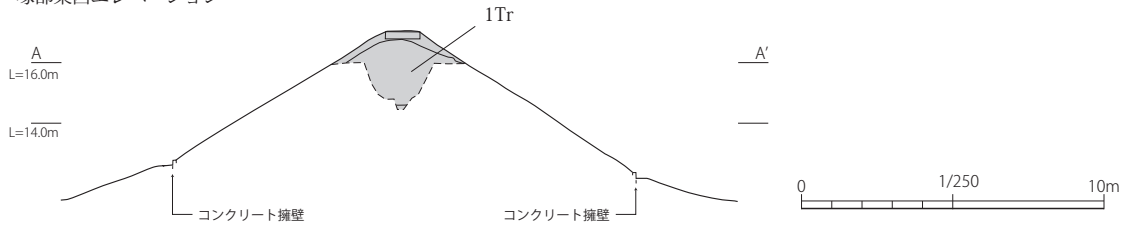
部位の石材は材質から①宝珠・請花・露盤・中台・基礎・



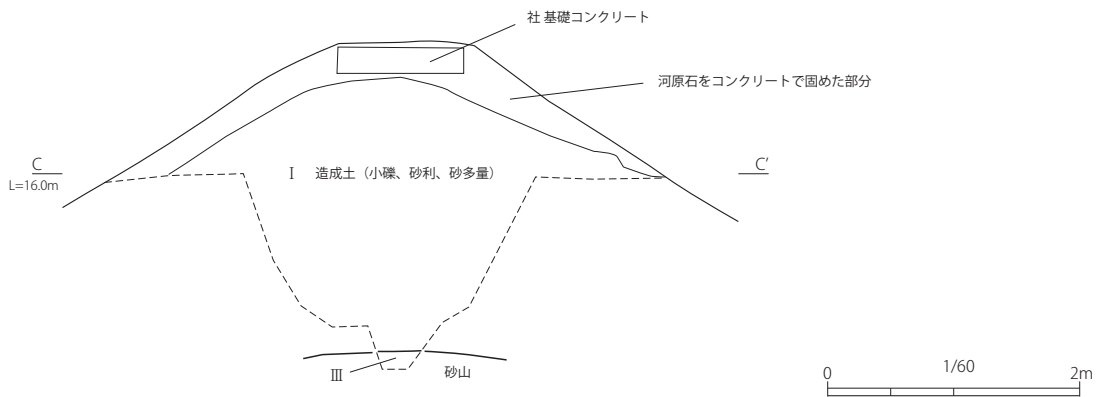
第18図 富士塚外周の礫



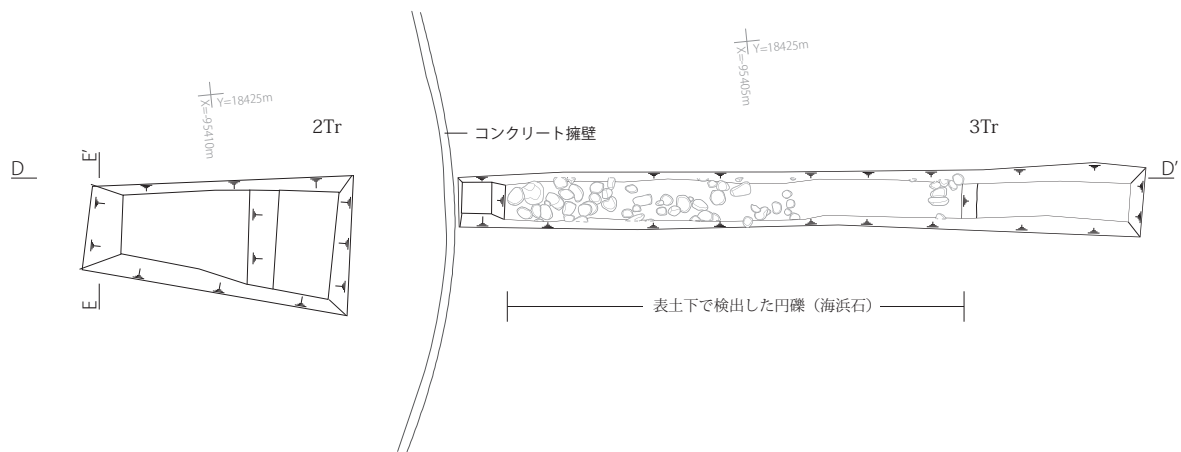
塚部東西エレベーション



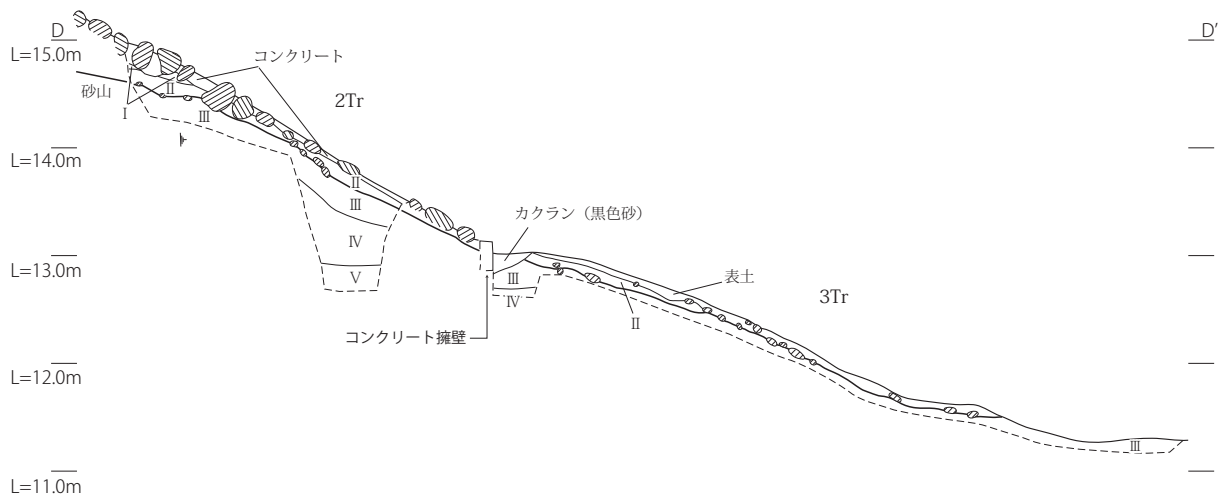
1Tr 東西セクション北壁



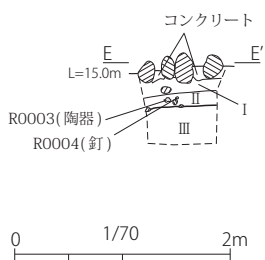
第19図 トレンチ配置図・エレベーション図



2Tr・3Tr 南北セクション西壁



2Tr 東西セクション南壁



- I 暗褐色砂礫層 (10YR3/4) しまりやや強、粘性なし。小礫、砂利、砂多量。
- II 黒褐色砂層 (10YR3/2) しまり弱、粘性なし。黒色土中量。円礫 (10 ~ 15cm) が下面を中心に点在。
- III 暗灰黄色砂層 (10YR2/3) しまりやや弱、粘性なし。混入物殆どなし。
- IV 黒褐色砂層 (2.5Y3/1) しまりやや弱、粘性なし。III層よりしまりが強い。
- V 暗褐色砂層 (10YR3/3) しまりやや弱、粘性なし。IV層よりしまりが強い。

第 20 図 トレンチ平面図・断面図



第 21 図 富士塚周辺礫の測量調査

基壇、②火袋、③竿に分けられる。それぞれ材質が①普通輝石玄武岩質安山岩、②安山岩、③カンラン石を含む玄武岩である。

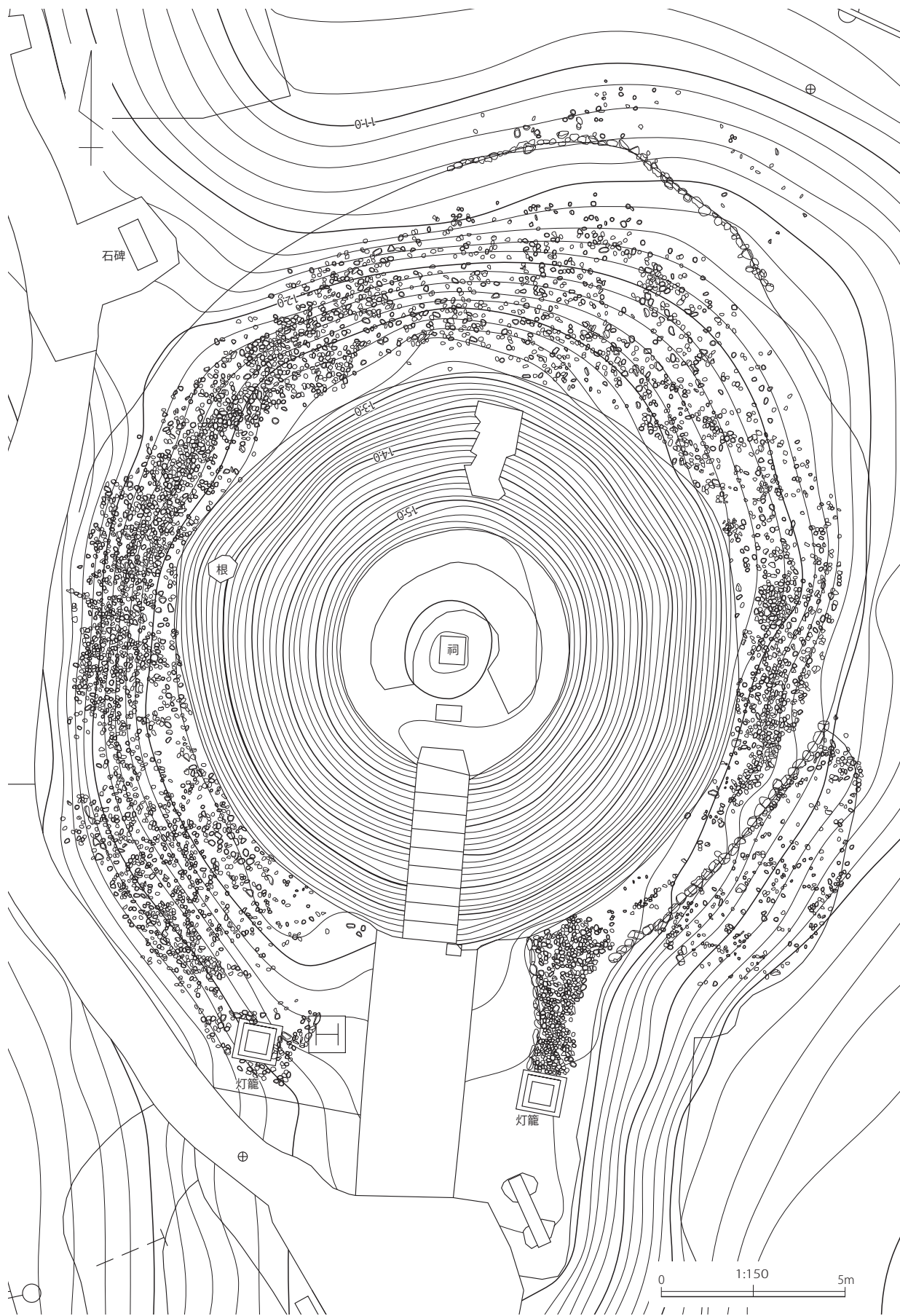
請花、中台には丸に「三」の紋が彫られている。この紋については、江戸時代後期に隆盛した富士講等の紋にはないことから、造立者の家紋とも推測されるが、明らかにできなかった。火袋は『吉居雑話』（山中共古 1911）中の石燈籠のスケッチに描かれていないことから、明治以降に復元したものと考えられる。

竿には正面に「浅間宮 ■」、左側面に「享保二年丁酉五月下旬」「■部長蔵」、右側面には「富士之海畔鈴川神祠」「村民相博言木花開姫」「漁人祈是福山神」と推測される文が刻書されている。

竿は燈籠本来のものとも推測されるが、①は石材が異なることから、後世に補修、交換を行った可能性が高い。燈籠の翻刻と推測される文は『富士郡元吉原村誌』（本吉原尋常小学校・柏原小学校 1912）に記載されているが、文中に「同所ニ奉納セル石燈籠数基アリ・・・」との記述があることから、数基あった石燈籠の部材を組み合わせたことも考えられる。

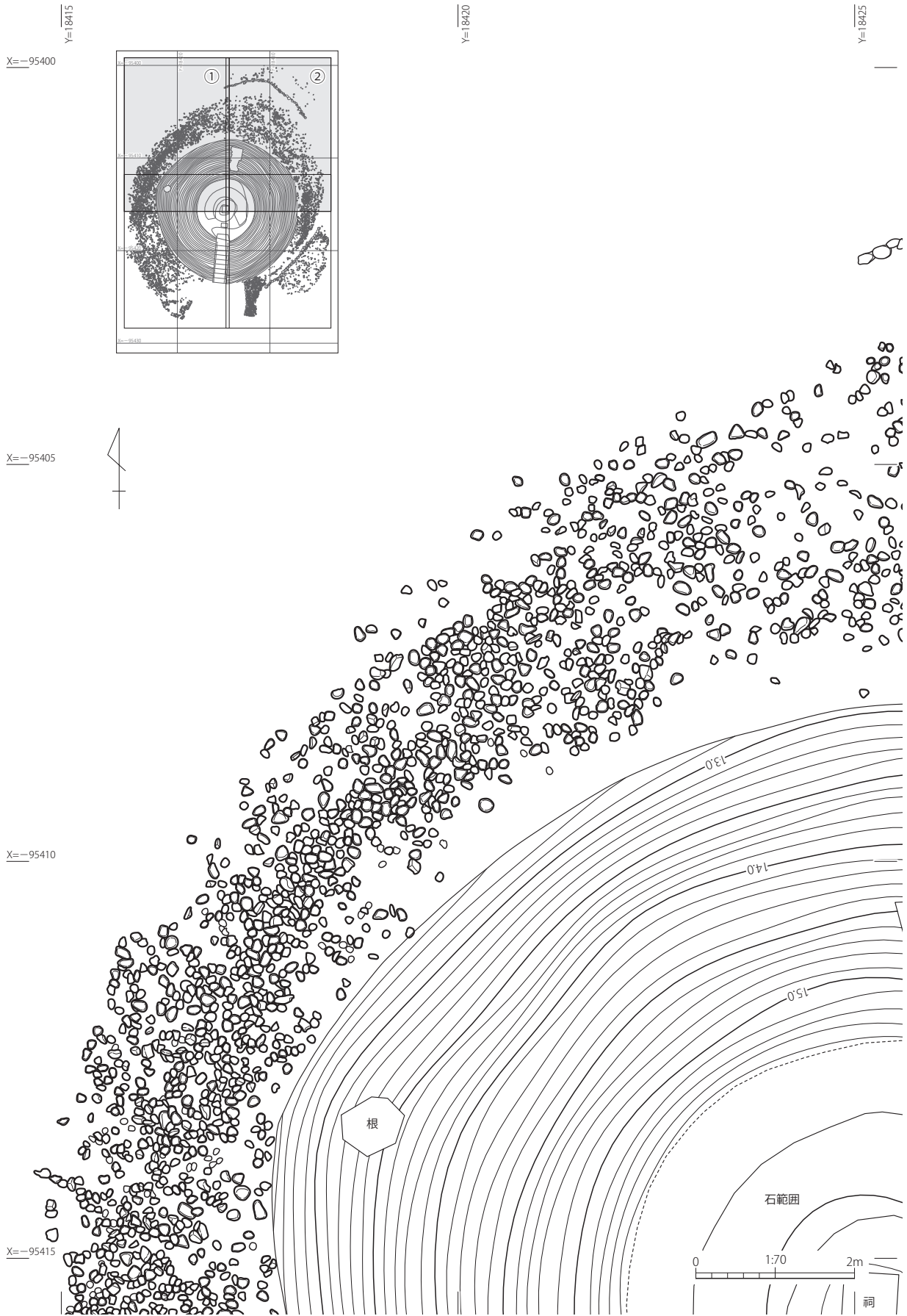


第 22 図 石燈籠

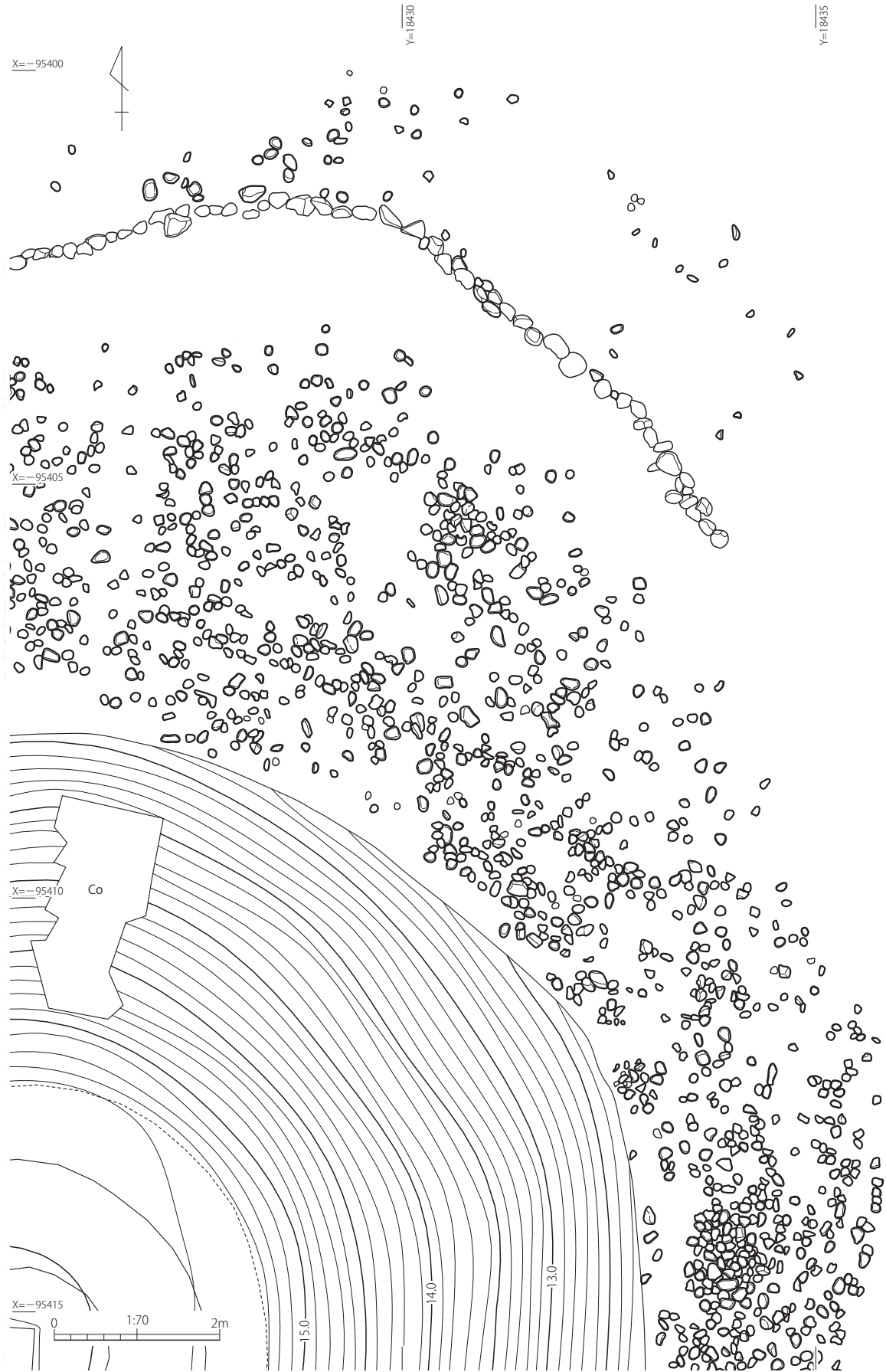


第 23 图 塚周边礫分布状况图

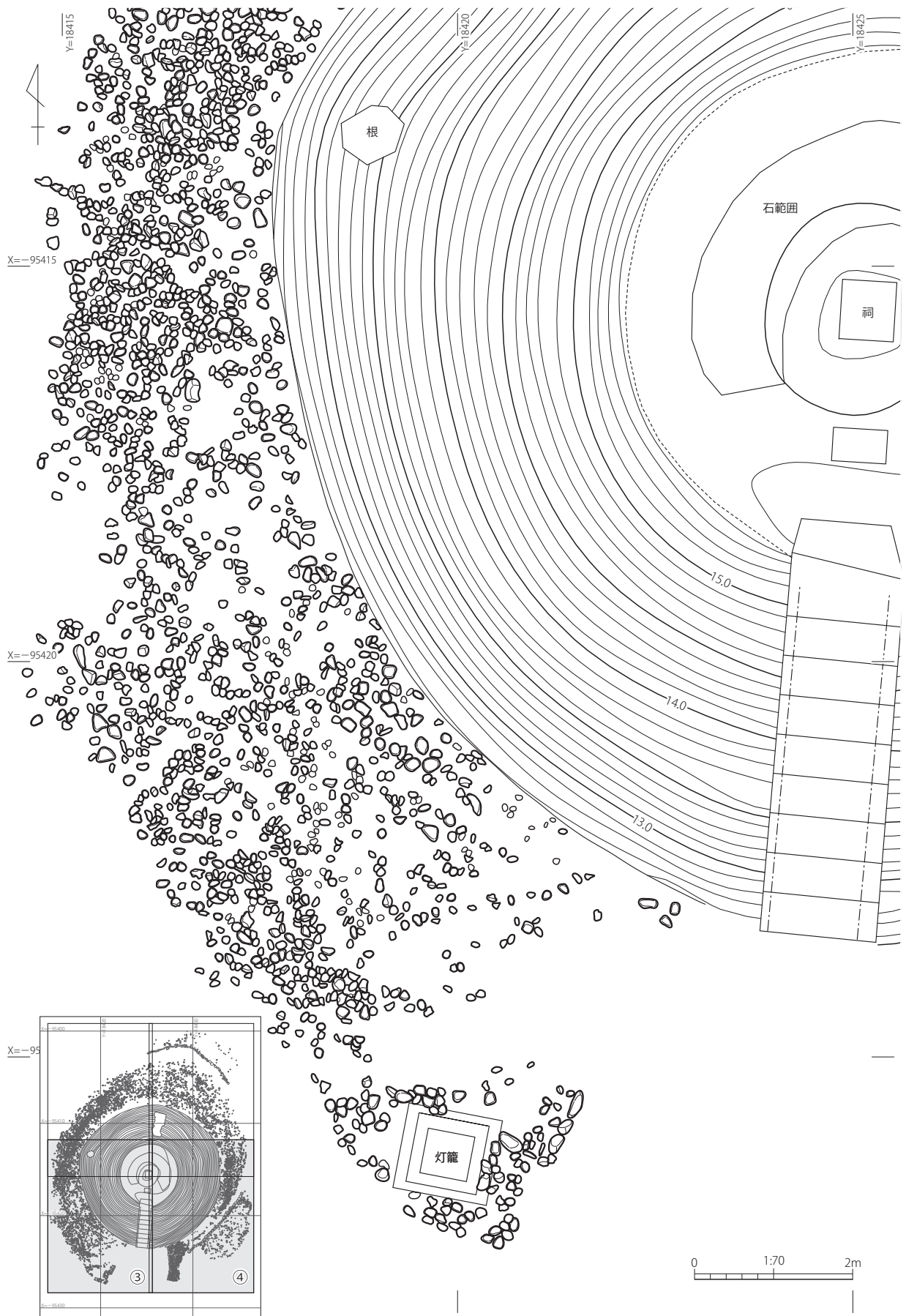




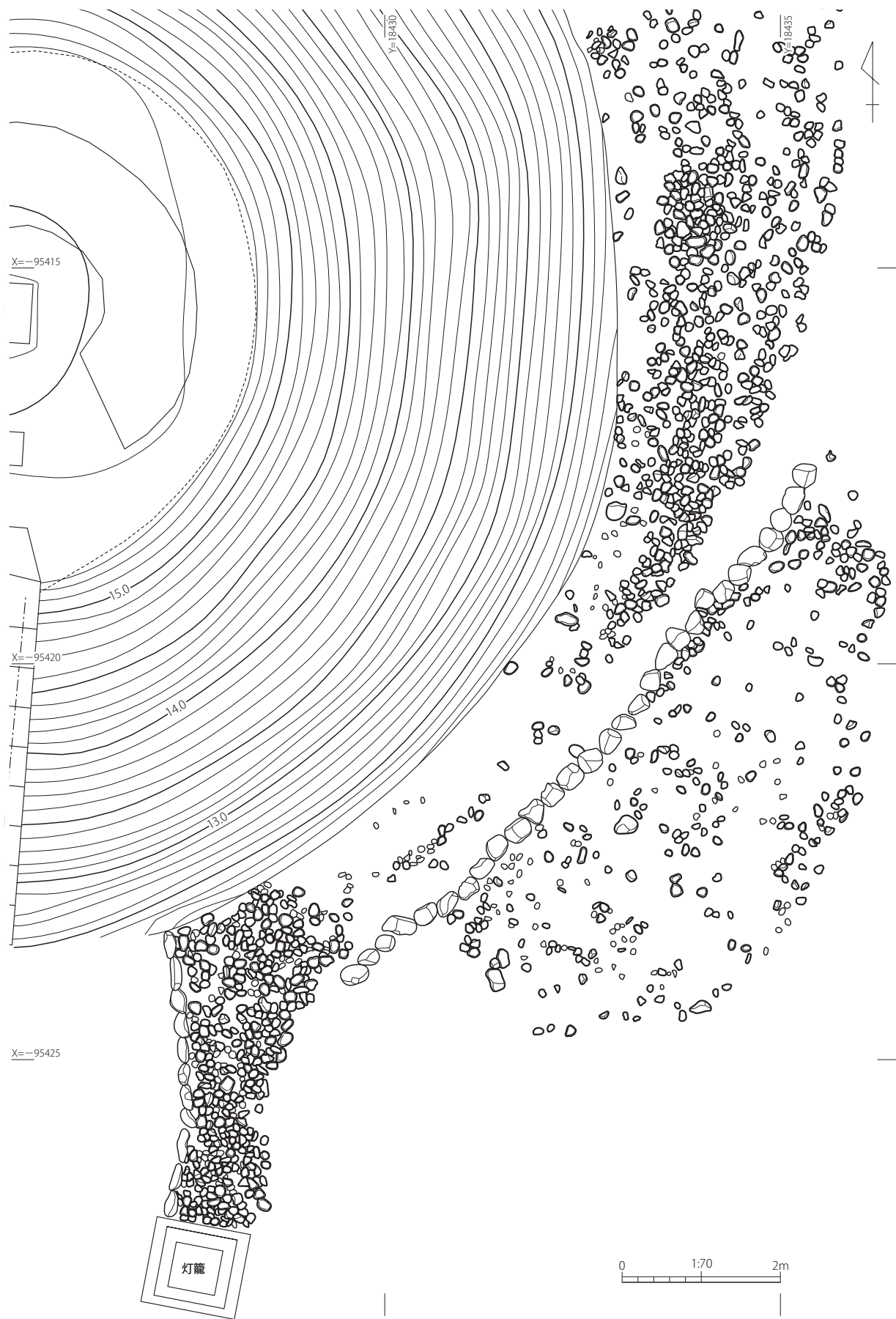
第 24 図 塚周辺礫詳細図①



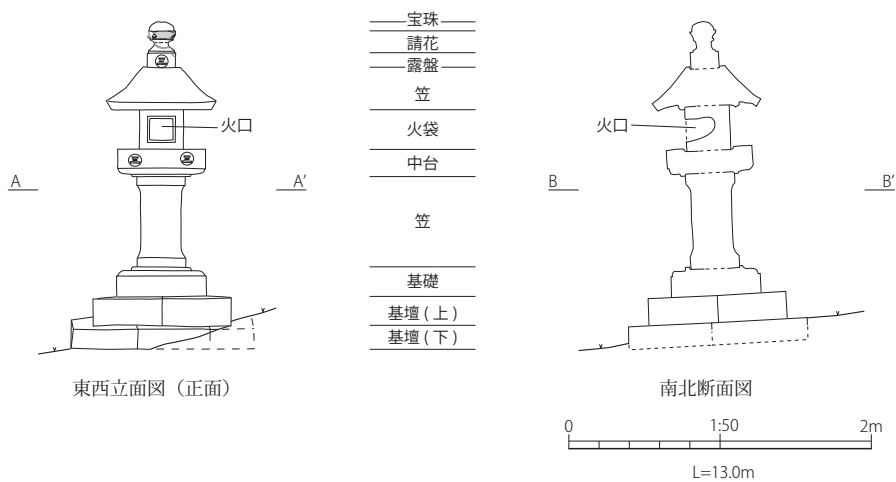
第 25 図 塚周辺礫詳細図②



第 26 図 塚周辺礫詳細図③



第 27 図 塚周辺礫詳細図④

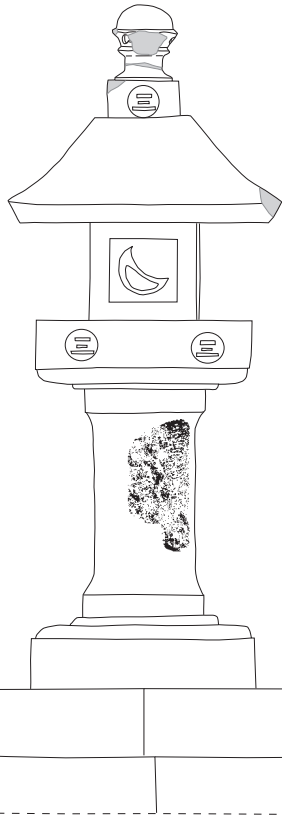
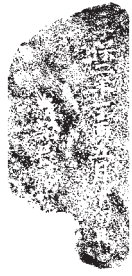


第 28 図 石燈籠配置図・立面図

第 1 表 石燈籠計測

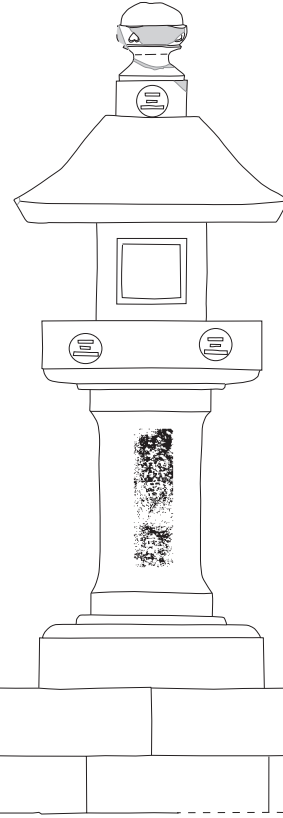
部位	幅	奥行き	高さ
宝珠	16.4	15.0	6.2
請花	17.8	17.4	20.0
露盤	17.8	17.4	20.0
笠	72.0	72.0	27.6
火袋	28.0	28.8	29.4
中台	56.6	57.0	18.2
竿	32.0	32.0	63.6
基礎	60.0	59.2	19.4
基壇 (上)	91.0	91.0	18.0
基壇 (下)	121.0	118.0	15.0
全体	121.0	118.0	213.0

享保二年丁酉五月下旬  
□部長蔵



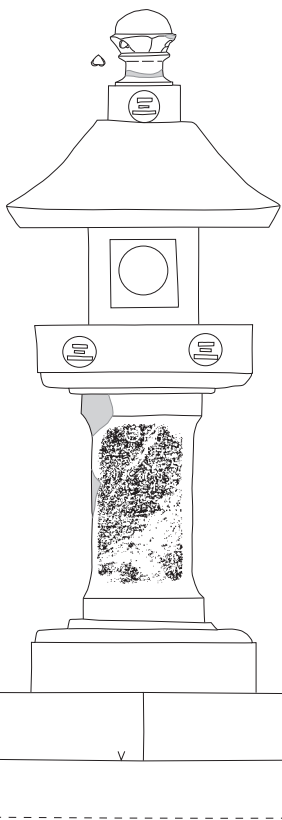
左側面立面図

浅間宮

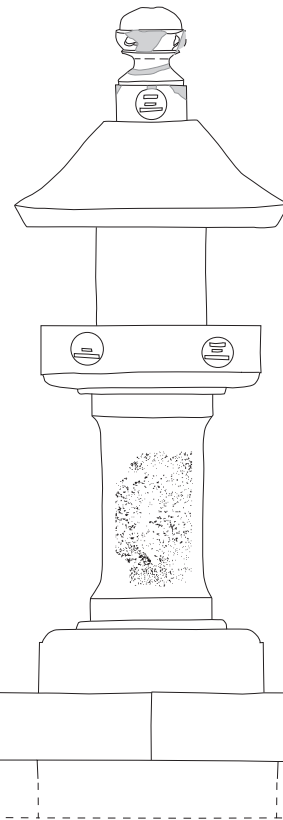
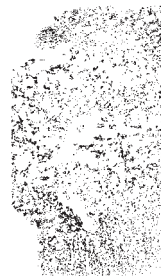


正面立面図

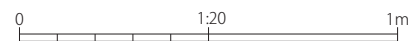
□ □  
富士之海畔鈴川神祠  
村民相博言木花開姫  
漁人祈是福山神



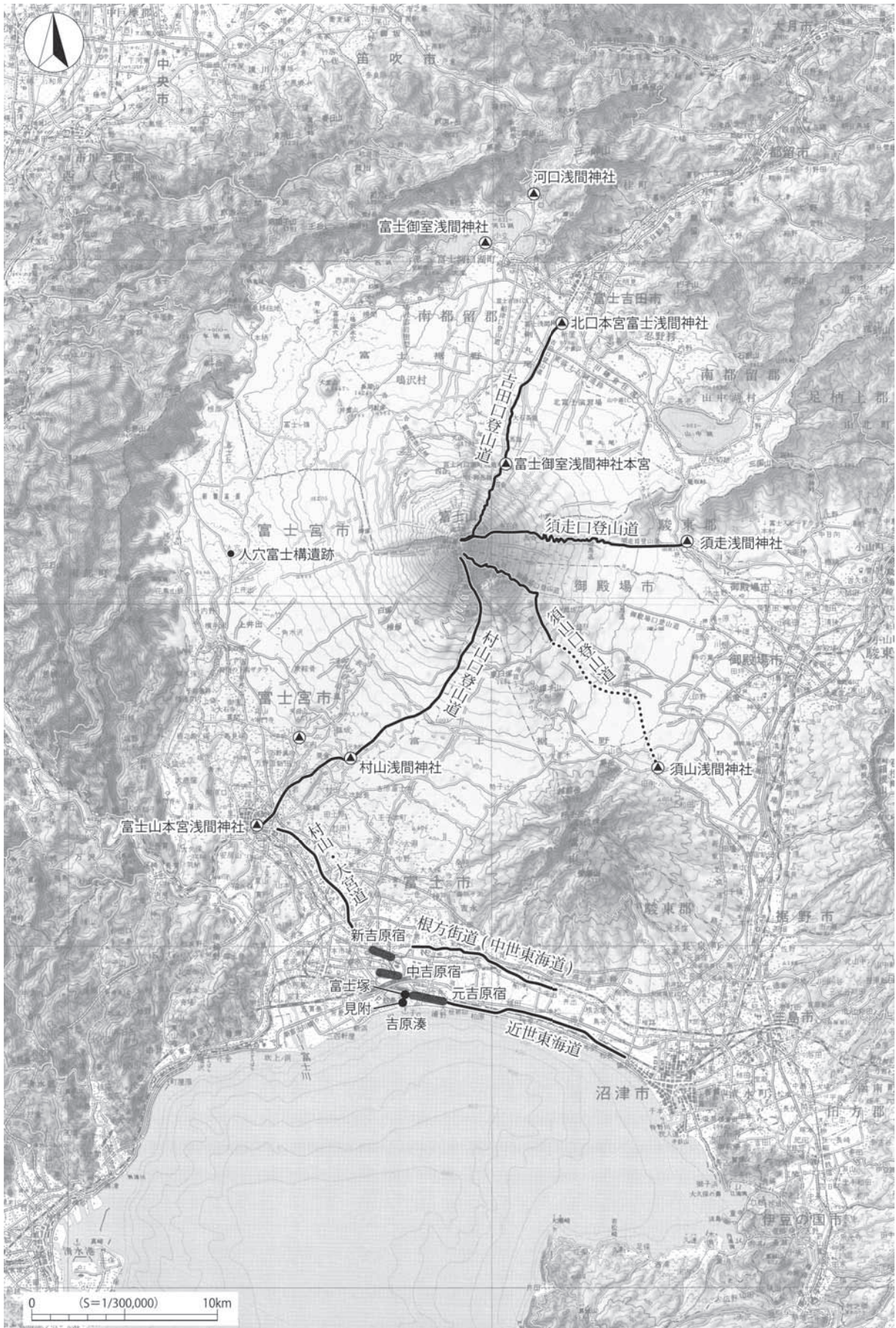
右側面立面図



後面立面図



第 29 図 石燈籠



第 30 図 富士山の登山道

# 第4章 考察

## 第1節 富士塚周辺の礫群について

山本 玄珠

はじめに

富士塚の礫は富士登山の前に海岸の礫を拾ってきて、砂山に積んでケルン状としたと言われている。それを証明するため、現在の海岸の礫と富士塚の礫の比較を行った。

### 1. 富士塚調査とその結果

富士塚を調査するにあたって、現存する富士塚（第1図）は直径30～50cmの礫をコンクリートで固めて斜面の崩壊を防いでいるが、これは昭和の工事によってつくられた記録が残されており、昭和初期の写真（巻頭図版3-6）では大型の礫はなく、10cm程度のものである。

現存する富士塚では、斜面はコンクリートで施工されているが、斜面下部は施工がない。そこで富士塚の斜面下部に存在する礫を調査対象とした。この礫は見た目でも直径10cm程度で明らかにコンクリート施工の礫とは異なっている。

調査方法は斜面下部の礫を無作為に100個選び、その円磨度、長径、中径、短径、礫種を測定した。

富士塚の礫は中礫を主体としており、礫種は大分類では堆積岩が62%、火成岩が26%、変成岩が12%である（第31・32図、第2表）。特に堆積岩では砂岩が圧倒的に多く51%にも達する。火成岩では安山岩が18%と多く、富士山を構成する玄武岩は0%で、あったとしても非常に少ない。円磨度は円礫から極円礫からなり、かなり円磨されている。偏平率を図に示したが（第33図）、小判状から円盤状を呈しており、扁平した礫を主体としている。

浜の調査とその結果、富士塚南の田子の浦の海岸表面は、浪打際は礫を主体としており、そこから数mで砂を主体とするように変化する。近代に入って波けしブロックの設置、産業廃棄物の投棄、養浜などがあり、礫もどこからか人工的に運ばれた可能性も否定できない。また浪けしブロックによって波打際に自然状態と異なった小

さな入り江のような環境ができる所もあり、砂浜となっている波打際もある。これらのことに注意して、比較的自然状態に近い、柏原海岸から続く、浪打ち際付近の浪打際と並行に形成されている高さ1m前後の礫堤の礫を対象とした。調査方法は他の海岸礫並びに富士塚と同様に無作為に採取した礫の礫種、円磨度、礫径、長軸、中軸、短軸の長さを計測した。

浜全体でも礫は、中礫を主体としており、小礫も観察することができるが、富士塚の斜面を施工したような直径30～50cmに及ぶような礫は観察できない。今回調査した浜の礫は、中礫を主体としており、礫種は大分類では堆積岩が58%、火成岩が30%、変成岩が12%となった（第34・35図、第2表）。特に堆積岩の砂岩が圧倒的に多く47%となった。火成岩では安山岩が多く全体の20%となった。円磨度は円礫から極円礫からなり、かなり円磨されている。偏平率を図に示したが（第36図）、小判状から円盤状を呈しており、扁平した礫を主体としている。このような扁平形状を示す礫は浜礫の特徴を示している。

### 2. 富士塚と浜礫の比較

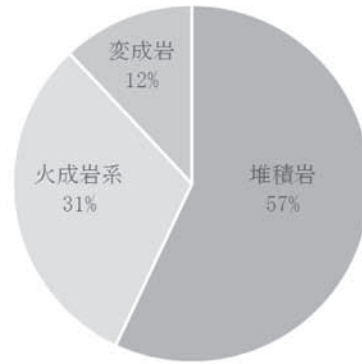
富士塚の礫と富士塚南浜礫は礫種は両者とも大分類では、堆積岩が62%、58%で、火成岩が26%、30%、変成岩が12%、12%と類似した値をとっている。しかも堆積岩のうち砂岩が51%、47%と圧倒的に多いという特徴も類似している。詳細については述べないが第2表のように礫種の多さおよびその多量順とその量とも一致している。円磨度は両者とも、円礫から極円礫からなり、かなり円磨されている点も一致している。偏平率は両者とも小判状から円盤状を呈しており、第32図、第35図ともほぼ同じ割合で扁平の礫が存在する。以上のようにどれを取っても非常に類似しており、富士塚の礫は富士塚南浜やその周辺の礫と考えられる。



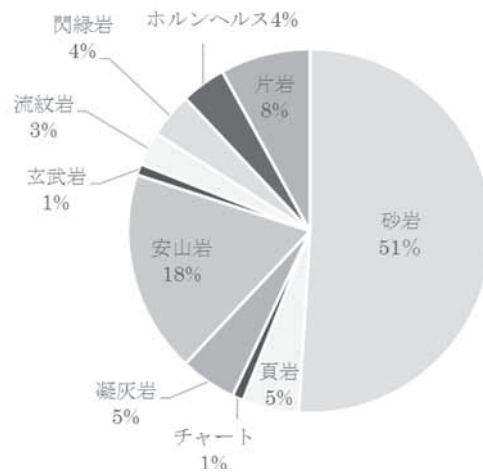
おわりに

富士川河口から千本浜まで続く、富士川系の南アルプスを構成する礫が主であることがわかる。つまり、潤井川や須津川など、富士火山や愛鷹火山を起源とする礫を

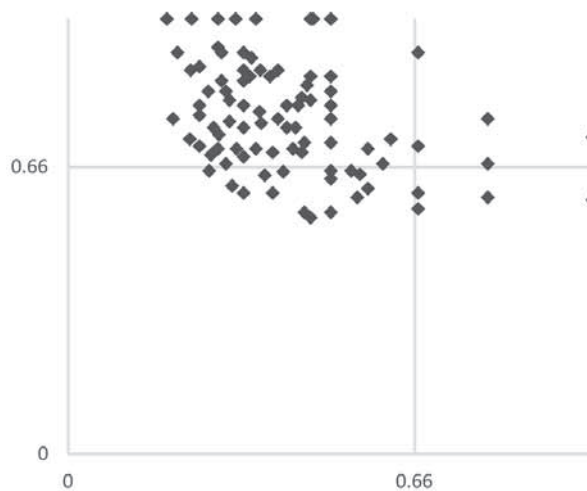
拾ってきたのではなく、古文書のとおり、浜から浜礫を運んできて、富士塚に積んだ可能性が非常に大きいと考えられる。



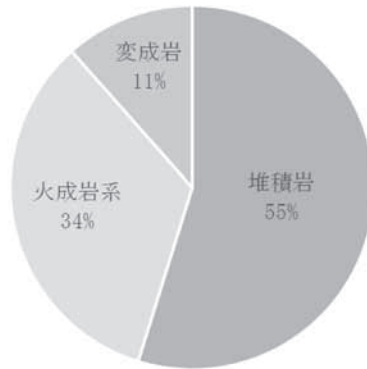
第 31 図 富士塚礫種大分類



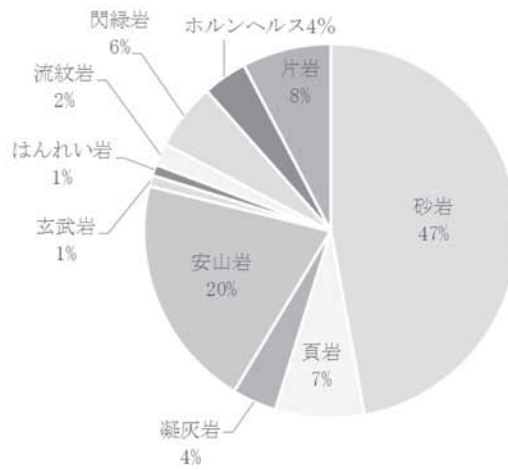
第 32 図 富士塚の礫種の割合



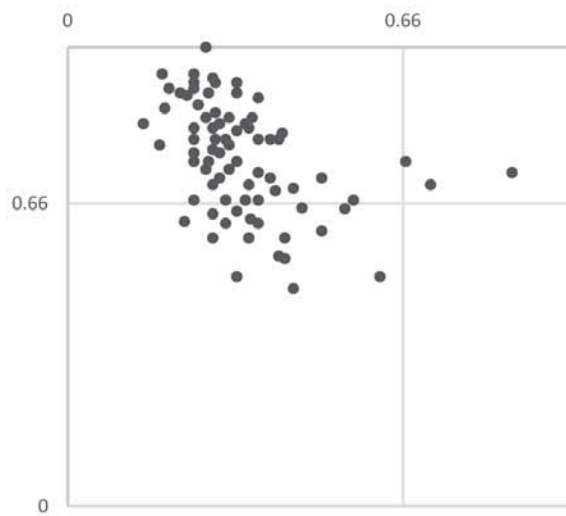
第 33 図 富士塚礫偏平率



第 34 図 浜礫種大分類



第 35 図 浜礫の礫種の割合



第 36 図 浜礫扁平率

第2表 礫調査表

(%)

位置	富士川 河口	前田	富士塚 南	柏原		第二放水路		千本浜		牛臥海岸					富士塚
				K-1	K-2	H2-1	H2-2	S-1	S-2	U-1	U-2	U-3	U-4	U-5	
砂岩	45	40	47	54	46	66	66	49	50	20	8	16	24	16	51
頁岩	8	4	7	4	10	10	16	4	12	8	2	12	10	8	5
チャート	2							2				2		2	1
凝灰岩	7	10	4	4	6	4		16	2	6	6	2	4	4	5
流紋岩	2		2												3
安山岩	16	18	20	16	18	12	12	12	24	38	42	24	20	22	18
玄武岩	5	16	1	14	10	2	2	1	6	26	42	44	40	46	
花こう岩								2							
閃緑岩	3	2	6	6	6	2		6					2		4
ハンレイ岩	4	4	1					1							1
片岩	6	4	8	2	4	4	4	8	6	2				2	8
ホルンヘルス	2	2	4												4
	100	100	100	100	100	100	100	101	100	100	100	100	100	100	100
大分類															
堆積岩	62	54	58	62	62	80	82	71	64	34	16	32	38	30	62
火成岩	30	40	30	36	34	16	14	22	30	64	84	68	62	68	26
変成岩	8	6	12	2	4	4	4	8	6	2	0	0	0	2	12
	100	100	100	100	100	100	100	101	100	100	100	100	100	100	100

## 第2節 吉原湊をめぐる中世遺跡の概要

池谷 初恵

はじめに

富士塚の立地する元吉原地区は古代東海道が通り、富士塚造営に先立つ中世においても湊・宿・街道などの存在が想定される。しかし現在までのところ、中世の吉原湊や宿を解明するための具体的な考古学資料には恵まれていない。

本稿では、富士塚造営の背景としての吉原湊・宿・街道を明らかにするため、富士市内および周辺地域の遺跡の出土遺物を分析し、遺跡の時期的変遷や遺物の特徴を明らかにした上で、中世の元吉原地区および周辺の街道を検討する。

### 1. 富士市および周辺地域の中世遺跡の概要

これまで富士市においては、著名な武士の館や戦国城館、中世の寺社等が知られていなかったこともあり、中世遺跡についてあまり注目されてこなかった経緯がある。

戦前に遡る古い発見資料では、比奈地区の医王寺経塚をあげることができる（静岡県 1992）。経塚は天平年間の創建とされる古刹、医王寺境内で発見されたもので、経塚遺物は昭和9年に風で倒れた大木の根元から出土したとされる（駿河郷土史研究会 1989）。「承安四年」（1174）の線刻銘のある経筒と、和鏡2面、白磁合子2点が出土している。12世紀末は東海・関東地方で経塚造営が盛行した時期であり、富士地域においても埋納思想が定着していたことを示す良好な資料である。

また、昭和39年、富士塚に程近い今井地区妙法寺（毘沙門天）西側の砂丘上で、五輪塔、蔵骨器、人骨などが多数発見された（鈴木 1981）。当時の記録によれば、これらの遺物は公園をつくるための造成工事中に砂丘を7～8m削平した際に発見されたと記されている。現在、富士山かぐや姫ミュージアムに保管されている資料は、五輪塔4基と、「文保二年十二月八日」紀年銘のある地輪1基、常滑三筋壺1点である（第37図）。五輪塔3基は、組合せは不確実ながら14世紀に位置付けられ、他の1基は15～16世紀のものとされる（藤村 2016、松井他 2007、溝口 2009・2012）。常滑三筋壺には人骨片が入っていたとされ、蔵骨器として埋納されたもの

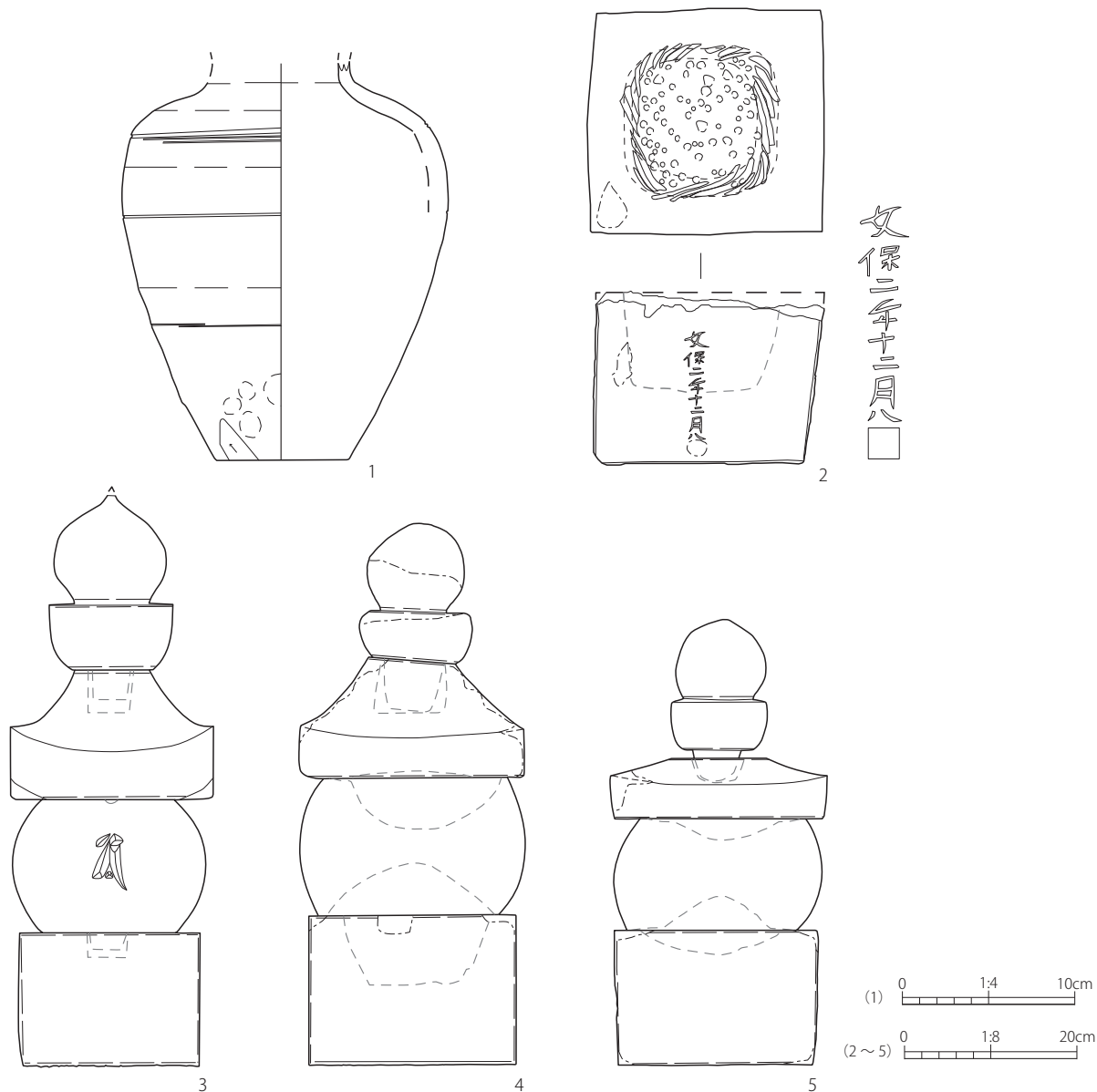
である。中野晴久氏の編年で常滑2型式（1150～1175年）に比定されるもので、文保2年（1318）の五輪塔地輪とは約150年の年代差が生じることになる（註1）（中野 2005・2012）。五輪塔・常滑壺ともに出土状況が明らかでないため、五輪塔の正確な組み合わせや三筋壺との関係などは検証することはできないが、少なくとも12世紀後半から16世紀にかけての長期間にわたり砂丘上に墓地や宗教施設が造営されていたことは推測できる。

蔵骨器と推定されるもう1例として、岩本地区の鎌研第4号墳（通称「念信園古墳」）で発見された瀬戸産の壺3点が報告されている（第38図）（佐藤 2010）。個人が採集した資料であり、出土状況は不明である。古瀬戸四耳壺2点と梅瓶1点で、いずれも口縁部は意図的に打ち欠かされている。藤澤良祐氏の編年に拠れば、古瀬戸前期第IV段階（13世紀後半）に位置づけられる（註2）（藤澤 2007）。出土地の近くには、実相寺や永源寺など中世に建立された寺院があり、また五輪塔などが集石された場所もあるという。これらのことから周辺には墓域が形成されていたと考えられる。

以上の3地点の中世遺物は、発掘調査によるものではないため、遺構や出土状況などが不明であるが、経塚や蔵骨器など宗教的な遺物であることが特徴である。

前述のように、著名な中世遺跡が存在しなかった富士市では、中世を主眼とした発掘調査の事例はあまり多くはないが、西富士道路建設に伴う広範囲の発掘調査において中世墓が検出された事例がある（富士市教委 1981a、静岡県考古学会 1997）。出口遺跡（註3）では、中世～近世の土坑が400基以上検出され、人骨・副葬品から土坑墓と認定できた遺構は16基である。このうち遺物から確実に中世と断定できる土坑墓は2基である。その他、ほとんどの土坑は出土遺物がなく墓と特定できないが、形状の類似性からみて、多数の土坑墓が存在し、中世から近世にかけての大規模な墓域が形成されていたと考えられる。

このような状況の中、平成28年度に富士山かぐや姫ミュージアムにおいてテーマ展示「富士へとつながる海の道—吉原ミナトの交通史」が開催され、古代から近世



第 37 図 今井中世五輪塔群出土資料

に至る吉原湊に関連する資料が紹介された。中世に関連する資料では、前述の今井五輪塔群と常滑三筋壺や鎌研第 4 号墳出土古瀬戸壺が展示された。また関連して、藤村翔氏が富士市内の中世墓関連資料を報告し、吉原湊や富士川渡川ルートなど交通の要所に中世墓が分布していることを明らかにした（藤村 2016）。

一方で、富士市と隣り合う富士宮市と沼津市では中世遺跡の調査が進んでいる。富士宮市では元富士大宮司館跡（大宮城跡）、浅間大社遺跡、村山浅間神社遺跡、山宮浅間神社遺跡など、富士山信仰に関連する遺跡が調査されている。とくに、富士大宮司館跡（大宮城跡）と浅間大社遺跡は、12 世紀代から遺物が確認されており、大宮司富士氏

の居館である富士大宮司館跡では、その権威を示す威信財としての貿易陶磁が出土していることでも注目された。また、富士大宮司館跡は 16 世紀になると城郭に造りかえられており、今川氏と武田氏の攻防の場となった。

沼津市では、興国寺城跡、中原遺跡、西通北遺跡が調査されている。興国寺城跡は、根方街道沿いに位置する城郭遺跡で、伊勢宗瑞（北条早雲）の築城とされ、小田原北条氏滅亡後は中村氏、天野氏の居城となった。中原遺跡・西通北遺跡は砂丘上または浮島沼縁に位置する古代東海道沿いの遺跡である。8～9 世紀代を中心に遺構・遺物が多く確認されているが、包含層から一定量の中世遺物が出土している。

## 2. 富士市および周辺地域の出土陶磁器

### (1) 調査方法・分類・時期区分

富士市および周辺地域において発掘調査の出土遺物（主に陶磁器）および採集資料を、遺跡ごとに産地・種別・型式ごとに分類し、点数を集計した。（第4～7表）

型式分類・時期比定については、以下の分類基準を参考とした。

貿易陶磁（中国産陶磁器）：菊川町教育委員会 2000『横地城跡 総合調査報告書 資料編』、菊川シンポジウム実行委員会 2005『陶磁器から見る静岡県の中世社会—東でも西でもない』

瀬戸美濃（瀬戸美濃産陶器）：藤澤良祐 2007「第1章 総論」「編年表」『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県

常滑（常滑産陶器）：中野晴久 2012「第1章 総論 第3節 常滑窯」「編年表」『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』愛知県

渥美（渥美・湖西産陶器）：安井俊則 2012「第1章 総論 第2節 渥美窯」「編年表」『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』愛知県

なお、本稿においては、瀬戸美濃系施釉陶器・瀬戸美濃産陶器類・瀬戸美濃焼などを略して「瀬戸美濃」と記述する。常滑焼・常滑産陶器は「常滑」、渥美焼・渥美湖西窯製品は「渥美」と略記する。また、志戸呂窯製品、初山窯製品については、「志戸呂」、「初山」と記す。

時期区分と該当する主な各陶磁器分類は第3表の通りである。なお、本稿では上記Ⅰ～Ⅵ期の時期区分で遺物の年代を記述し、詳細な分類・型式別の点数については別稿において報告する予定である。

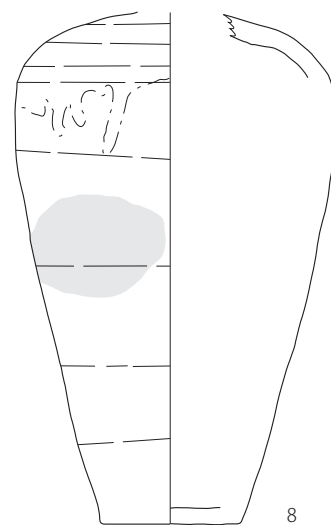
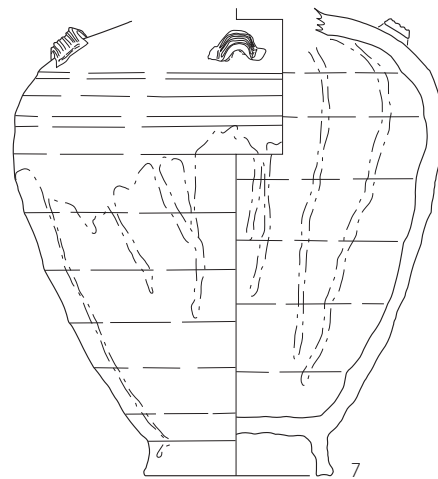
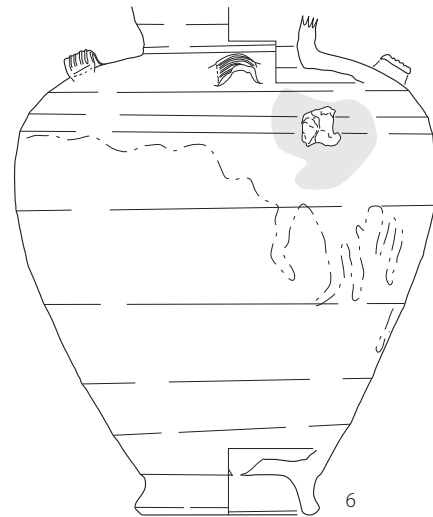
### (2) 対象遺跡と調査結果（第4～7表）

今回、型式・時期を調査した遺跡は、富士市14遺跡、富士宮市2遺跡、沼津市2遺跡の計18遺跡である。出土陶磁器を分析するにあたり、前述の遺跡概要に示した遺跡のほか、明確な中世の遺構を検出できないものの、包含層からの出土や他の時代の遺構に混入した中世遺物も含めて分類・集計を行った。

富士市

#### 元吉原遺跡第3地区

元吉原宿遺跡第3地区は元吉原地区にあり、戦国時代～近世初頭の吉原宿（元吉原宿）の範囲内にある（富士



0 1:4 10cm

第38図 鎌研第4号墳出土資料

第3表 時期区分と陶磁器分類

	年代	貿易陶磁 *主な分類のみ	瀬戸美濃	常滑	渥美	山茶碗
I期	11世紀後半 ～12世紀前半	白磁碗Ⅱ・Ⅳ		1a・1b型式	1a型式	3・4型式
Ⅱ期	12世紀後半 ～13世紀前半	青磁碗A 青磁同安窯系統 白磁碗Ⅴ	古瀬戸前期Ⅰ・Ⅱ期	2～5型式	1b～3a型式	5・6型式
Ⅲ期	13世紀中葉 ～14世紀前半	青磁碗B0・B1 白磁碗ⅢⅨ	古瀬戸前期Ⅲ・Ⅳ期 中期Ⅰ・Ⅱ期	6a～7型式	3b・3c型式	7・8型式
Ⅳ期	14世紀後半 ～15世紀中葉	青磁碗B2・B3・C2・D1 白磁碗ⅢB	古瀬戸中期Ⅲ・Ⅳ期 後期Ⅰ～Ⅲ期	8・9型式		9・10型式
Ⅴ期	15世紀後半 ～16世紀前半	青磁碗B4・D2・E1 白磁碗ⅢC1 染付碗ⅢC・ⅢB1	古瀬戸後期Ⅳ古 新期大窯1～3前段階	10・11型式		11型式
Ⅵ期	16世紀中葉 ～16世紀後半	青磁碗E2 白磁碗ⅢC2 染付碗ⅢE・ⅢB2	大窯3後～4後段階	12型式		

市教委2015)。わずか6㎡の面積の発掘調査であったが、Ⅵ期の瀬戸美濃の播鉢と皿各1点が出土した。また、調査地点の地層は砂層と安定層を交互に堆積していることが確認され、風砂・高波・津波等の自然災害の影響が認められている。

### 三新田遺跡

三新田遺跡は元吉原宿遺跡の東に位置する。1981年と1993年に発掘調査が行われ、古墳時代前期初頭と奈良・平安時代の住居跡、掘立柱建物跡等が多数検出された(富士市教委1983・2000)。中世の遺構はないが、D地区において併行する2本の溝が検出されており、道路状遺構の可能性が指摘されている。

三新田遺跡では、Ⅱ期の貿易陶磁青磁1点、Ⅱ～Ⅳ期の常滑、渥美の甕・片口鉢計8点が出土している。また、瀬戸美濃はⅤ・Ⅵ期の天目茶碗、皿、盤類など5点、志戸呂皿1点が出土している。14世紀代の遺物はごく少量であるが、中世前半から後半にかけて一定量の遺物が認められたことは、中世において継続的に集落等が営まれたことを示している。

### 柏原遺跡

柏原遺跡は『三代実録』貞観六年(864)十二月十日条に記載され、これ以後廃絶したとされる「柏原駅」の比定地である。発掘調査は11地区で行われ、奈良・平安時代の住居跡、掘立柱建物跡等が検出されている(富士市教委2012・2013)。

中世の遺物は第6地区の溝と掘立柱建物跡の覆土からⅡ期の常滑片口鉢各1点出土している。貿易陶磁・瀬戸美濃については未確認である。

### 善得寺城跡・東泉院跡

東泉院は江戸時代の吉原宿(新吉原宿)をのぞむ高台に

位置する密教寺院である。平成19年度より、富士市では東泉院の最後の住持を務めた六所家が所有してきた膨大な資料、建物の総合調査を開始し、その一環として敷地内の埋蔵文化財の発掘調査を行っている(富士市教委2014)。

調査の結果、出土遺物の大半が近世の陶磁器・土器・瓦であったが、少量ながら中世遺物が認められた。中世陶器はⅣ～Ⅵ期の瀬戸美濃5点、Ⅱ～Ⅴ期の常滑9点、Ⅱ期の渥美1点である。14～15世紀のものが多く、Ⅱ期の渥美甕や常滑壺なども出土しており、中世前半の遺物も確認された。

### 東平遺跡

東平遺跡は古代の富士郡家に比定される遺跡で、8～10世紀の大規模な集落跡が調査されている。遺跡範囲は広大で、93地区で発掘調査が行われている。今回はこのうち3地区、28地区の出土遺物を調査した。

3地区 西富士道路建設のため広大な範囲を調査した地区で、中世陶磁器も多数出土している(富士市教委1981a・1981b)。貿易陶磁はⅡ・Ⅲ・Ⅴ期の青磁、白磁、天目茶碗など18点出土しているが、大半がⅢ期の青磁碗である。瀬戸美濃はⅢ～Ⅵ期の天目茶碗、皿、盤類、播鉢など83点で、Ⅳ・Ⅴ期の製品が多い傾向がある。常滑・渥美はⅡ・Ⅲ・Ⅴ期の甕、片口鉢が29点あり、Ⅴ期のものが半数以上を占める。その他、志戸呂・初山の皿、播鉢が4点出土している。

28地区 28地区は東平遺跡の南部、三日市廃寺跡と隣接する地区に位置する。古墳時代中期と7～8世紀の住居跡、掘立柱建物跡が検出されている(富士市教委2001)。

貿易陶磁はⅡ・Ⅲ期の青磁、白磁の碗、皿11点で、瀬戸美濃はⅢ～Ⅴ期の天目茶碗、皿、盤類など23点で

ある。常滑・渥美はⅡ～Ⅴ期の甕、片口鉢が66点で、Ⅲ・Ⅳ期のものが多い。

本地点ではかわらけがまとまって出土していることが特徴で、12～13世紀の小皿のみの一群と14世紀後半～15世紀代の大小組み合わせの一群がある。破片資料を含めると、かわらけの出土数は100点あまりで、富士市内では最も多い。また、三重県産の南伊勢系鍋が出土していることも注目される。

### 三日市廃寺跡（東平遺跡 16 地区）

三日市廃寺は、東平遺跡の南東部に隣接する遺跡で、古くから奈良時代の瓦が散布していたことが知られる。1994年に発掘調査が行われ、7～9世紀の住居跡、掘立柱建物跡が検出された（富士市教委 2002）。寺院に関連する遺構は確認されなかったが、8世紀前半の瓦が多数出土している。中世の遺物は、Ⅴ期の常滑片口鉢1点が出土したのみである。

### 出口遺跡

出口遺跡は前述の中世～近世の墓が多数検出された遺跡である（富士市教委 1981 a）。

第21号土坑墓から、副葬品としてⅥ期の初山の天目茶碗1点、かわらけ小皿1点、小柄1点、六道銭として納めた中国銭6枚がある（第39図）。他に、包含層からⅢ期の瀬戸美濃梅瓶、Ⅴ期の常滑甕が出土している。

### 中原遺跡

中原遺跡は東平遺跡の北部に位置し、同じく西富士

道路建設のための調査が行われた（註4）（富士市教委 1981）。Ⅳ・Ⅴ期の瀬戸美濃、皿3点、志戸呂皿1点が出土した。

### 浅間林遺跡

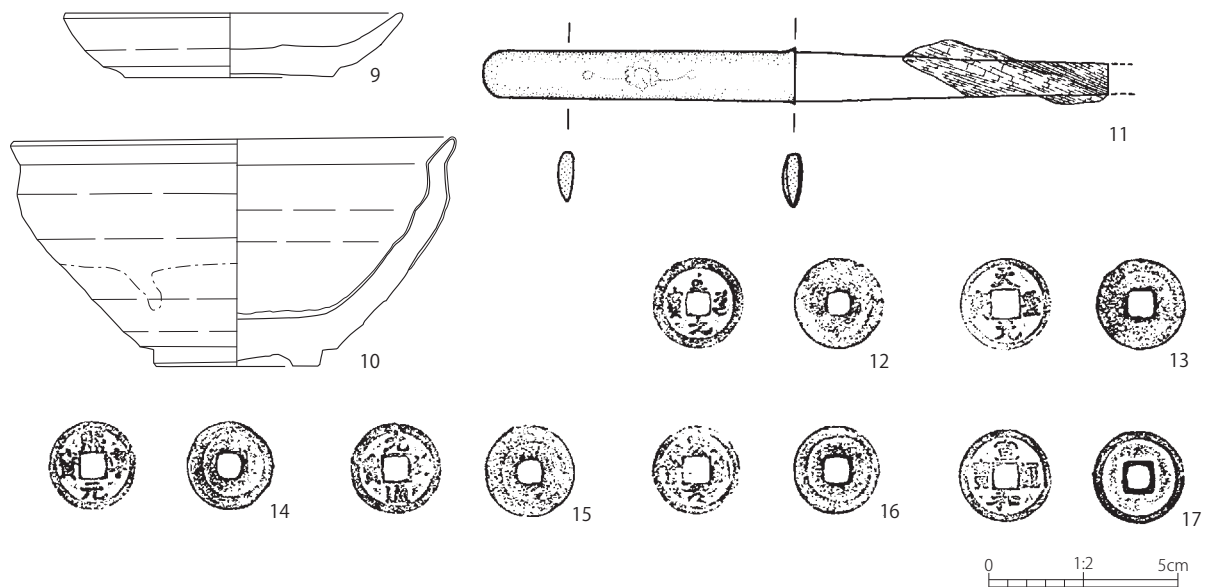
浅間林遺跡は富士川西岸の河岸段丘上に位置する縄文時代～近世に至る複合遺跡である（富士川町教委 1981、1991）。各時代の遺構、遺物が重層的に検出されているが、中心となる時代は縄文時代後・晩期と平安時代である。

貿易陶磁はⅡ・Ⅲ期の青磁・白磁の碗・皿7点である。瀬戸美濃はⅢ～Ⅵ期の天目茶碗、皿、盤類、播鉢など63点で、Ⅳ・Ⅴ期の製品が多い。常滑・渥美はⅡ～Ⅴ期の甕、片口鉢が30点あり、Ⅳ期のものが多い傾向があるが、Ⅱ期の三筋壺が2点、渥美甕1点がある。

また、志戸呂皿、盤類各1点、Ⅱ期の東遠江系山茶碗・小皿4点、長崎県西彼杵半島産の滑石製石鍋などが出土している。

### 半在家遺跡

半在家遺跡は浅間林遺跡と同様、富士川西岸の河岸段丘上に位置し、弥生時代末～古墳時代初頭の集落、中世～近世の土坑墓、堀跡、石積遺構などが検出されている（富士川町教委 1986）。中世～近世の各遺構は時期を特定できていない。貿易陶磁Ⅱ・Ⅲ期の青磁2点、Ⅴ期の瀬戸美濃天目茶碗と平碗各1点が確認できた。



第39図 出口遺跡出土資料



## 萩館

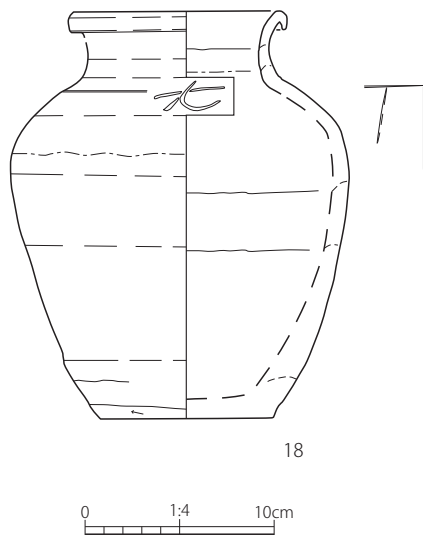
戦国時代の萩氏の居館跡と伝承される遺跡で、江戸時代末の絵図には土塁に囲まれた一町四方の館が描かれているが、現在は土塁の一部が残っているのみである（富士川町教委 1979）。

貿易陶磁はⅢ期の青磁碗 1 点、瀬戸美濃はⅤ・Ⅵ期の天目茶碗、皿、播鉢など 11 点、Ⅵ期の初山皿 1 点、Ⅱ・Ⅲ期の常滑甕、片口鉢が各 1 点が出土している。数は少ないが、中世全般にわたる遺物が出土しており、戦国時代に限定された居館ではなく、長期間営まれた遺跡と考えられる。

## 破魔射場遺跡

破魔射場遺跡は富士川西岸の段丘上の遺跡で、東名高速道路富士川サービスエリア改良工事に伴って、広大な面積の発掘調査が行われ、縄文時代中・後期、古墳時代、平安時代の遺構・遺物が多数検出された（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所〔以下静岡県埋文研究所と略記〕2001）。中世の遺構・遺物は遺跡北西部のB区で集中しており、土坑墓 16 基が確認されている。遺物も多くがB区で出土している。

貿易陶磁はⅠ・Ⅱ期の青磁・白磁の碗・皿 7 点、瀬戸美濃はⅣ期の皿 2 点を確認した。常滑・渥美はすべてⅡ期の甕、壺である。他に東遠江系山茶碗が 2 点出土している。本遺跡の中世陶磁器は、Ⅱ期に集中する傾向が顕著にみられた。



第 40 図 沢上遺跡出土資料

## 沢上遺跡

沢上遺跡は岩淵地区にあり、縄文時代後期の集落と中世～近世の墓が確認されている（富士川町 1968）。出土状況の詳細は不明であるが、蔵骨器に使われたⅡ期の渥美刻文小型壺が富士山かぐや姫ミュージアムに保管されている（藤村 2016）（第 40 図）。

このほか、Ⅱ・Ⅲ期の貿易陶磁 4 点、Ⅱ～Ⅳ期の常滑片口鉢 3 点が出土している。瀬戸美濃は出土していない。出土数が少ないため、傾向はとらえられないが、渥美刻文壺は静岡県内でも出土数が限られており、注目される遺物である。

## 今井五輪塔群

今井五輪塔群では、前述のようにⅡ期の常滑三筋壺が出土しているが、偶然採集されたものであり、出土状況や他の出土遺物は不明である。

## 鎌研古墳群（念信園古墳）

今井五輪塔群の壺と同様、偶然採集されたものであり、出土状況や共伴遺物は不明である。Ⅱ期の瀬戸美濃四耳壺、梅瓶計 3 点が報告されている（佐藤 2010）。Ⅱ期、とくに古瀬戸前期段階の瀬戸美濃壺類の出土は、静岡県内では館跡や宗教関連遺跡で出土する傾向があり、立地を考慮すると本例は寺社か墓の遺物の可能性が高い。

## 富士宮市

### 浅間大社遺跡

浅間大社遺跡は、富士宮市宮町に所在する富士山本宮浅間大社の境内地であり、境内 5 地点と本殿裏の神立山地区、湧玉池などで調査が行われている。今回は富士宮市が調査・報告した社殿南側の第 1～4 地点（富士宮市教委 1996、2003、菊川シンポジウム実行委員会 2005）および湧玉池（富士宮市教委 2013）と、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査した社殿北側の神立山地区と推定護摩堂跡地点（静岡県埋文研究所 2009）の出土陶磁器をあわせて検討を行った。

貿易陶磁はⅠ～Ⅴ期の製品 169 点で、Ⅱ・Ⅲ期のものが 9 割以上を占める。青磁太鼓胴盤、白磁四耳壺、青白磁梅瓶など、威信財とされるものが出土していることが注目される。瀬戸美濃は 116 点で、Ⅱ～Ⅵ期の製品があるが、Ⅱ期・Ⅲ期は卸皿と壺類が数点出土しているのみであり、多くがⅣ・Ⅴ期の碗、皿、播鉢などである。花瓶、香炉など神仏具が多いことも注目される。常滑は

458点、渥美は62点で、山茶碗等の東海地域の製品を含めると569点出土している。Ⅱ・Ⅲ期のものが多い。

浅間大社遺跡では約15,600点(破片数)のかわらけが出土しており、出土量全体の約9割を占めている。とくに12～13世紀の小皿形態のかわらけが主体を占めており、浅間大社の祭祀に関わる遺物と考えられる。中世前半の東国では、館や寺社に関連する遺跡でかわらけが大量に出土する傾向があるが、本遺跡ではとくに小皿が卓越する特徴が確認された。

#### 元富士大宮司館跡(大宮城跡)

元富士大宮司館跡(大宮城跡)は浅間大社遺跡の東に位置し、中世前半には浅間大社の大宮司富士氏の居館、戦国時代には大宮城として築かれた重層的な遺跡である(富士宮市教委2000、2014)。学校、公共施設建設等に伴い、5次の発掘調査が行われた。今回の集計は第1～4次については菊川市教育委員会による横地城跡総合調査における調査成果(菊川シンポジウム実行委員会2005)、第5次については、報告書掲載データ(富士宮市教委2014)と筆者の実見結果に基づいて行った。

貿易陶磁はⅠ～Ⅴ期の製品373点出土しており、このうちⅡ・Ⅲ期のものが9割以上を占める。青磁・白磁の碗・皿類が大半であるが、青磁花生、白磁水注、青白磁梅瓶、華南産の盤など威信財とされるものも多数含まれている。瀬戸美濃は324点で、Ⅱ～Ⅵ期の製品があり、Ⅳ・Ⅴ期の碗、皿、搦鉢などが多い。13世紀の四耳壺、水注、梅瓶などが出土しており、これらも館の権威を示す遺物と位置づけることができる。常滑は1,070点、渥美は76点で、山茶碗等の東海地域の製品を含めると1,280点出土している。

元富士大宮司館跡で注目されるのは、浅間大社遺跡と同様に、かわらけが大量に出土していることである。破片数で約33,000点出土しており、出土量全体の93%を占める。かわらけや威信財の陶磁器が出土していることは、本遺跡が富士氏の居館であることの証左となる。

#### 沼津市

##### 中原遺跡

中原遺跡は沼津市の西部、富士市から続く砂丘上に立地し、古代東海道沿いに位置する。古墳時代、奈良・平安時代の住居跡が100軒以上検出された大規模な集落遺跡である(沼津市教委2016)。現在も発掘調査、整

理調査が継続中であり、中世の遺構・遺物の詳細については未報告であるが、整理調査中の遺物を実見する機会を得たため、現状の概要のみ記すこととする。

貿易陶磁はⅠ～Ⅲ期の青磁・白磁の碗・皿が出土している。瀬戸美濃は多くはないが、Ⅱ～Ⅵ期までの製品がある。常滑・渥美はⅡ～Ⅳ期の甕・片口鉢・壺を確認したが、今後の整理状況により前後の時期まで広がる可能性もある。

##### 西通北遺跡

西通北遺跡は沼津市西部、浮島ヶ原と呼ばれる低湿地帯の東端、標高6mに位置する。JR東海道線改良工事に伴う調査で、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所と沼津市教育委員会の2機関によって分割されて発掘調査が行われたが、すでに2地点とも報告書が刊行されているため、本稿ではあわせて検討を行う(静岡県埋蔵文化財研究所2011、沼津市教委2013)。

貿易陶磁はⅠ～Ⅴ期の製品91点があり、Ⅱ・Ⅲ期の青磁・白磁の碗・皿が多い。碗・皿だけでなく、Ⅲ期の青白磁梅瓶が出土している点は注目される。瀬戸美濃は35点で、Ⅳ～Ⅵ期の天目茶碗・皿・盤類・搦鉢などがあり、Ⅴ期のものが多くを占める。常滑・渥美は82点出土しており、Ⅱ～Ⅴ期の甕・片口鉢・壺が出土している。

#### 3. 陶磁器様相から見る吉原湊・宿・街道

最後に、これまで述べてきた陶磁器の出土状況を分布ごとに整理し、中世の街道と吉原湊・宿の位置づけを検討してみよう。

富士川左岸の田子の浦砂丘上の元吉原地区には、元吉原宿遺跡、三新田遺跡など、数は少ないものの中世全般にわたる遺物が出土している。同じ砂丘上に立地する沼津市の中原遺跡、西通北遺跡でも一定量の遺物が確認でき、とくに中世前半の遺物が多い。田子の浦砂丘上には、富士市から沼津市にかけて古代の集落が濃密に分布しており、古代東海道の柏原駅が置かれたことも知られているが、中世においても全般にわたる遺物が出土しており、古代東海道が中世にも継続して使われていたことが確認できた。

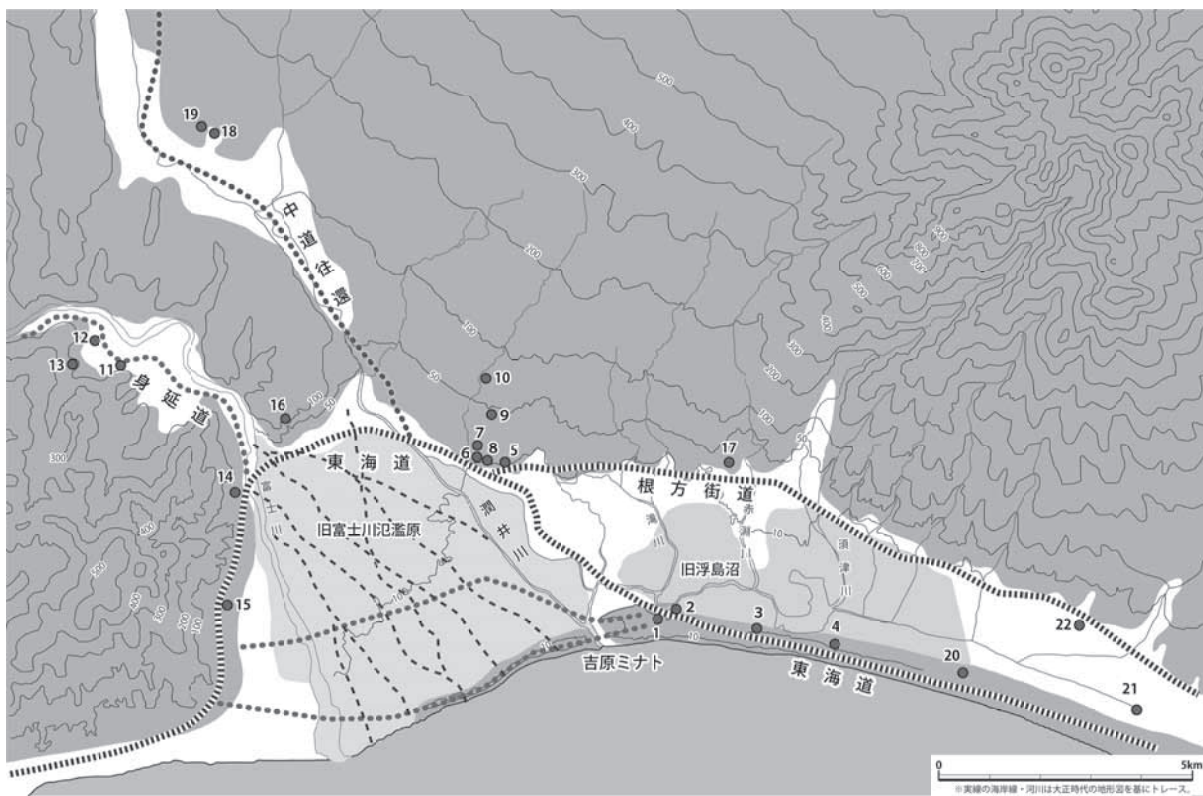
つぎに古代に郡衙がおかれた東平遺跡周辺の伝法地区の状況を見る。東平遺跡ではⅡ～Ⅴ期の遺物が出土しており、中世全般にわたるが、北側の3地区ではとくに14世紀後半～15世紀前半の遺物が多い傾向がある。東側の善得寺城跡・東泉院跡では15世紀後半～16世

紀前半の遺物が集中している。また、これらの遺跡の東側は古代東海道と山沿いの根方街道が結節する場所とされており、さらに富士宮市方向へ通じる中道往還（右左口路）（海老沼 2008 佐藤 2015）にも接している。富士宮市の浅間大社遺跡と富士大宮司館跡の出土遺物は、富士市内の遺跡と比べて隔絶した質・量であり、居館や宗教施設の求心力をよくあらわしている。静岡県東部でこれらに匹敵する遺跡は、鎌倉北条氏の本拠である伊豆の国市御所之内遺跡（史跡北条氏邸跡・円城寺跡）や三島市の三嶋大社境内遺跡のみである。12世紀になり、富士宮地域にこのような居館・宗教・城郭などの核となる場が形成されたことにより、東海道の東西から富士宮方面に向かうルートに変化が生じ、富士市内の街道にも少なからず影響を与えたであろう。

富士川右岸の松野地区では、浅間林遺跡で多くの遺物が出土している。IV・V期の遺物が多いが、中世全般にわたる遺物が確認できた。破魔射場遺跡では12世紀

前半から遺物があり、中世前半が中心である。その他、半在家遺跡、萩館など館の伝承をもつ遺跡で、15～16世紀の遺物が出土しているが、戦国時代の遺物に限らないため、伝承の時期とは異なっていることがわかってきた。これらも含め、蒲原から富士川沿いに芝川、甲斐方面に北上するルート、所謂身延道（河内路）に沿って点在する遺跡と捉えられる。

最後に、蔵骨器などの出土位置を確認しておこう。発掘調査による出土状況は不明瞭ながら、今井五輪塔群、沢上遺跡、鎌研第4号墳で出土した常滑・渥美・古瀬戸の壺類は、蔵骨器もしくはその可能性が高いものである。医王寺経塚や出口遺跡の中世墓群も含めれば、これら宗教関連遺跡は、富士山麓に点在する傾向をみることができる。また、これらが中世に遡る寺院が山麓沿いに多く分布する傾向と一致していることもみてとれる。一方で、今井五輪塔群は他と異なる位置にあり、妙法寺と関連する可能性もあるものの、むしろ吉原宿や湊との関連をう



1. 今井五輪塔群
2. 元吉原宿遺跡
3. 三新田遺跡
4. 柏原遺跡（4地区）
5. 善得寺城跡・東泉院跡
6. 東平遺跡（28地区）
7. 東平遺跡（3地区）
8. 三日市廃寺跡（東平16地区）
9. 出口遺跡
10. 中原遺跡（富士市）
11. 浅間林遺跡
12. 半在家遺跡
13. 萩館
14. 破魔射場遺跡
15. 沢上遺跡
16. 鎌研4号墳（念信園古墳）
17. 医王寺経塚
18. 元富士大宮司館跡（大宮城）
19. 浅間大社（市・県）
20. 中原遺跡（沼津市）
21. 西通北遺跡
22. 興国寺城跡

第41図 遺跡の位置と中世の街道

かがわせる立地である。

今回抽出した遺跡は古代東海道やそこから派生する中道往還・身延道沿いなどに分布していることが確認できた。古代東海道は吉原付近から北西に進み、富士郡家である東平遺跡を通過した後、富士川を渡り、蒲原方面に南進するルートが想定されている。中世の東海道も基本的にはこれを踏襲していたであろう。しかし、第3節で大高氏が詳述しているように、中世においては富士川を渡るルートは1つには限られなかった。古代東海道ルートのほかに、たとえば徒歩で富士川河口も「十五瀬をわたり」、おそらくは田子の浦砂丘上か富士川氾濫原の微高地上をたどり元吉原地区に至るルートがあった(『十六夜日記』など)。また、治承4年(1180)に伊豆で頼朝が旗揚げした折に従軍した武士の中に、現在の鮫島地区付近を本拠にした鮫島氏の名前がみえる。さらに『平家物語』では、同年10月の富士川の戦いで、賀島地区に頼朝が20万という大軍を置き平家軍と対峙したことが語られている。頼朝は富士川氾濫原を通るいくつかのルート上に軍を配置した可能性が考えられる。

中世後期には、蒲原から船で吉原湊へ渡った記録(『東国紀行』)や、それに従事した矢部氏の存在も史料からわかる。また、吉原湊口には、元吉原宿に先行して置かれたという「見附」や、旅人の生贄伝説と関連する「阿字神社」があり、交通上の要所であったことが指摘されている(鈴木1981)。戦国時代には、元吉原地区に今川氏、北条氏、豊臣氏が在陣したという史料が多くあり、また、天の香具山砦と呼ばれる遺跡も存在する。ただし、周辺で城跡の発掘調査等を行われたことがなく、実態は不明である。いずれにしても、領国境界域に位置し、湊に近いこの地が重要な戦略拠点であったことは間違いない。

しかし、現在、富士川と元吉原の間の田子浦地区の中世の考古学的情報は皆無であり、海路や当時の湊についても、現在地形が大きく変えられているため検証は困難である。

以上のように、中世の吉原湊・宿は、東海道、潤井川の渡船や海路など、多くの交通の結節点に位置する流通の要であった。富士塚もしくはその前身となるモニュメントが中世まで遡るかは現状では明らかにできないが、この場所が古代・中世・近世を通じて、地域の中で、もしくはこの地を行き来する人々にとって意識されてきたことは指摘できるであろう。

おわりに

本稿では、中世陶磁器の分析を行い、富士市および周辺地域の遺跡の消長、分布を整理した。今回は根方街道沿いの遺跡の分析には至らなかったが、各街道に沿う遺跡の分布や文献史料から、根方街道にも同様に集落遺跡や寺社が存在することが想定できる。今後は、根方街道を含め、同様の分析視点で中世の様相を検討することが課題である。

#### 【註】

- 1 中野晴久氏のご教示による。
- 2 藤澤良祐氏のご教示による。
- 3 調査時の遺跡名称は伝法遺跡群B地区である(富士市教育委員会1981a)
- 4 調査時の遺跡名称は伝法遺跡群C・D地区である(富士市教育委員会1981a・b)

#### 【参考文献】

- 海老沼真治 2008「古代・中世甲斐国交通官憲文献史料の概要」『古代の交易と道』山梨県立博物館
- 菊川町教育委員会 2000『横地城跡 総合調査報告書 資料編』
- 菊川シンポジウム実行委員会 2005『陶磁器から見る 静岡県の中世社会』
- 佐藤祐樹 2010「富士市岩本出土の古瀬戸」『平成14・20年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』富士市教育委員会
- 佐藤祐樹 2015「清水岩の上遺跡出土の弥生土器」『富士市内遺跡発掘調査報告書—平成24・25年度』富士市教育委員会
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001『富士川 S A 関連遺跡 破魔射場遺跡 谷津原古墳群 北久保遺跡 遺構編・遺物編』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009『浅間大社遺跡 山宮浅間神社遺跡』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2011『西通北遺跡 平成20～22年度 J R 東海道線本線・J R 御殿場線緊急地方道路整備事業(街路B) 平成21年度 J R 東海道線本線・J R 御殿場線都市高速鉄道高架事業(新車両基地) 建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 静岡県 1992『静岡県史』資料編3 考古三

- 静岡県考古学会 1997『静岡県における中世墓』
- 鈴木富男 1981『鈴川の歴史』鈴川区管理委員会
- 駿河郷土史研究会 1989『富士市の仏教寺院』
- 中野晴久 2005「常滑・渥美窯」『陶磁器から見る静岡県の中世社会』菊川シンポジウム実行委員会
- 中野晴久 2012「第1章 総論 第3節 渥美窯」「編年表」『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』愛知県
- 沼津市教育委員会 2013『西通北遺跡』
- 沼津市教育委員会 2016『中原遺跡』
- 富士川町 1968『富士川町史』追補
- 富士川町教育委員会 1979『ふるさと富士川』第1集
- 富士川町教育委員会 1981『浅間林遺跡発掘調査概報 静岡県庵原郡富士川町 県道富士川・身延線道路改良工事地内での調査』
- 富士川町教育委員会 1986『半在家県道富士川・身延線改良工事に伴う発掘調査報告書』
- 富士川町教育委員会 1991『浅間林 県道富士川・身延線道路改良に伴う第4次発掘調査概報』
- 藤澤良祐 2005「瀬戸美濃と志戸呂・初山」『陶磁器から見る静岡県の中世社会』菊川シンポジウム実行委員会
- 藤澤良祐 2007「第1章 総論」「編年表」『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県
- 富士市教育委員会 1981a『西富士道路（富士地区）岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書 横沢古墳・中原1号墳・伝法遺跡群（伝法A～E地区）・天間地区』
- 富士市教育委員会 1981b『西富士道路（富士地区）岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書 東平遺跡』
- 富士市教育委員会 1983『三新田遺跡発掘調査報告書』
- 富士市教育委員会 2000『三新田遺跡（D地区）発掘調査報告書』
- 富士市教育委員会 2001『東平遺跡 第28地区発掘調査報告書』（東平28地区）
- 富士市教育委員会 2002『東平遺跡 第16地区（三日月市廃寺跡）、第27地区発掘調査報告書』
- 富士市教育委員会 2012「15. 柏原遺跡第3地区」『富士市内遺跡発掘調査報告書—平成11・12年度』
- 富士市教育委員会 2013「第4章 柏原遺跡の調査」『富士市内遺跡発掘調査報告書—平成22・23年度』
- 富士市教育委員会 2014『六所家総合調査報告書 埋蔵文化財』（善得寺城跡・東泉院跡）
- 富士市教育委員会 2015「28. 元吉原宿遺跡 第3地区」『富士市内遺跡発掘調査報告書—平成24・25年度』
- 富士市教育委員会 2016『六所家総合調査報告書 埋蔵文化財②』
- 富士宮市教育委員会 1996『浅間大社遺跡 —神田川ふれあい広場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』（1・2次調査）
- 富士宮市教育委員会 1996『浅間大社遺跡』
- 富士宮市教育委員会 2000『元富士大宮司館跡 —大宮城跡にかかわる埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- 富士宮市教育委員会 2003『浅間大社遺跡II』（3・4次調査）
- 富士宮市教育委員会 2005「浅間大社遺跡 第5次」『富士宮の遺跡III ワラビ平遺跡 塚本古墳第2次 浅間大社遺跡第5次 発掘調査報告書』（5次調査）
- 富士宮市教育委員会 2013『浅間大社遺跡III —国指定特別天然記念物『湧玉池』再生事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（湧玉池内）
- 富士宮市教育委員会 2014『元富士大宮司館跡II —大宮城跡にかかわる埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- 藤村 翔 2016「富士市域の中世墓～今井中世五輪塔群・沢上遺跡出土資料の紹介～」『富士山かぐや姫ミュージアム 館報 第31号（平成29年度）』
- 松井一明 木村弘之 溝口彰啓 篠ヶ谷路人 椿原靖弘 2007「駿河中・西部地域の中世石塔の出現と展開」『静岡県博物館協会研究紀要』第30号 静岡県博物館協会
- 溝口彰啓 2009「遠江・駿河の石塔」『東海地域における中世石塔の出現と展開』石造物研究会第10回研究会資料
- 溝口彰啓 2012「東海〈遠江・駿河・伊豆〉」『中世石塔の考古学』高志書院
- 安井俊則 2012「第1章 総論 第2節 渥美窯」「編年表」『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』愛知県
- 渡井英誉 佐野恵里 2003「信仰遺跡の変遷」『富士宮の遺跡II—富士宮市遺跡詳細分布調査報告書II』富士宮市教育委員会

第4表 貿易陶磁出土状況

遺跡名	I期	II期	III期	IV期	V期	VI期	出土数	特筆すべき遺物
	11C後 ～12C前	12C後 ～13C前	13C中 ～14C前	14C後 ～15C中	15C後 ～16C前	16C中 ～16C末		
元吉原宿遺跡							0	
三新田遺跡		○					1	
柏原遺跡(4地区)							0	
善得寺城跡・東泉院跡							0	
東平遺跡(3地区)		○	○		○		18	天目茶碗
東平遺跡(28地区)		○	○				11	
三日市廃寺跡 (東平16地区)							0	
出口遺跡							0	
中原遺跡							0	
浅間林遺跡		○	○				7	
半在家遺跡		○	○				2	
荻館			○				1	
破魔射場遺跡	○	○					7	
沢上遺跡		○	○				4	
今井五輪塔群							—	
鎌研4号墳 (念信園古墳)							—	
医王寺経塚		○					—	白磁合子 2合
浅間大社 (市・県)	○	○	○	○	○		169	白磁四耳壺 青白磁梅瓶 天目茶碗
元富士大宮司館跡 (大宮城)	○	○	○	○	○		373	青白磁梅瓶・合子 天目茶碗 黄釉盤 高麗青磁皿
中原遺跡	○	○	○		○		—	
西通北遺跡(市・県)	○	○	○	○	○		91	青白磁梅瓶

第5表 瀬戸美濃出土状況(志戸呂・初山含む)

遺跡名	I期	II期	III期	IV期	V期	VI期	出土数	特筆すべき遺物
	11C後 ～12C前	12C後 ～13C前	13C中 ～14C前	14C後 ～15C中	15C後 ～16C前	16C中 ～16C末		
元吉原宿遺跡						○	2	
三新田遺跡					○	○	6	
柏原遺跡(4地区)							0	
善得寺城跡・東泉院跡				○	○	○	5	
東平遺跡(3地区)			○	○	○	○	87	
東平遺跡(28地区)			○	○	○		23	
三日市廃寺跡 (東平16地区)							0	
出口遺跡			○			○	2	古瀬戸中期梅瓶
中原遺跡				○	○	○	4	
浅間林遺跡			○	○	○	○	65	古瀬戸中期瓶類
半在家遺跡					○		2	
荻館					○	○	12	
破魔射場遺跡				○			2	
沢上遺跡							0	
今井五輪塔群							—	
鎌研4号墳 (念信園古墳)		○					—	古瀬戸前期四耳壺・瓶子
医王寺経塚							—	
浅間大社(市・県)		○	○	○	○	○	116	古瀬戸前期卸皿
元富士大宮司館跡 (大宮城)		○	○	○	○	○	324	古瀬戸前期四耳壺・梅瓶・水注
中原遺跡		○	○	○	○	○	—	
西通北遺跡(市・県)				○	○	○	35	古瀬戸小瓶

第6表 東海系陶器出土状況（常滑・渥美他）

遺跡名	I期	II期	III期	IV期	V期	VI期	出土数	特筆すべき遺物
	11C後 ～12C前	12C後 ～13C前	13C中 ～14C前	14C後 ～15C中	15C後 ～16C前	16C中 ～16C末		
元吉原宿遺跡							0	
三新田遺跡		○	○	○			8	
柏原遺跡（4地区）		○					2	
善得寺城跡・東泉院跡		○	○	○	○		10	
東平遺跡（3地区）		○	○		○		29	
東平遺跡（28地区）		○	○	○	○		66	
三日市廃寺跡 （東平16地区）					○		1	
出口遺跡					○		1	
中原遺跡		○					1	
浅間林遺跡		○	○	○	○		34	常滑三筋壺
半在家遺跡							0	
荻館			○				2	
破魔射場遺跡		○					11	常滑三筋壺
沢上遺跡		○	○	○			3	渥美刻文小壺
今井五輪塔群		○					—	常滑三筋壺
鎌研4号墳 （念信園古墳）							—	
医王寺経塚							—	
浅間大社（市・県）	○	○	○	○	○	○	569	
元富士大宮司館跡 （大宮城）		○	○	○	○		1280	
中原遺跡		○	○	○			—	
西通北遺跡（市・県）		○	○	○	○		82	

第7表 まとめ

遺跡名	I期	II期	III期	IV期	V期	VI期	その他の遺物
	11C後 ～12C前	12C後 ～13C前	13C中 ～14C前	14C後 ～15C中	15C後 ～16C前	16C中 ～16C末	
元吉原宿遺跡						●	
三新田遺跡		●	●	●	●	●	
柏原遺跡（4地区）		●					
善得寺城跡・東泉院跡		●	●	●	●	●	
東平遺跡（3地区）		●	●	●	●	●	硯
東平遺跡（28地区）		●	●	●	●		
三日市廃寺跡 （東平16地区）					●		
出口遺跡			●			●	銭貨伴う中世墓
中原遺跡		●		●	●		
浅間林遺跡		●	●	●	●	●	東遠江系山茶碗 滑石製鍋 茶臼
半在家遺跡		●	●		●		
荻館			●	●	●	●	
破魔射場遺跡	●	●		●			
沢上遺跡		●	●	●			
今井五輪塔群		●					
鎌研4号墳 （念信園古墳）		●					
医王寺経塚		●					
浅間大社（市・県）	●	●	●	●	●	●	かわらけ大量出土
元富士大宮司館跡 （大宮城）	●	●	●	●	●	●	南伊勢系鍋 瓦質火鉢・風炉・ 鉢 かわらけ大量出土
中原遺跡	●	●	●	●	●	●	
西通北遺跡（市・県）	●	●	●	●	●	●	南伊勢系鍋 軒平瓦





士が発祥であるとはしていない。

岩科氏の著書では、こういった中世からあった富士塚について、「しかしこれは富士山の写しではない。山の上に浅間の祠を祀ったというだけの姿である。」と捉えるもので、高田富士を「老若男女が江戸にいて“富士詣で”の真似ごとのできるようにしてやろう。それには可能な限り現地の形をと、ジグザクの登山道、御中道の周回路、五合小御嶽社、御胎内の洞穴まで作り、山腹に烏帽子形の巨岩を置き、これを身祿の終焉の地烏帽子岩に見立て、亡き師の記念碑としたのである。」と評価しているのである。

また、19世紀後半に中山信名によって編纂が始まり、未完のまま色川三中や栗田寛に引き継がれて完成した地誌『新編常陸国誌』では、富士塚について「中世以後関東ノ風俗ニテ、塚ヲ築キ富士権現ヲ勧請スルモノ所々ニアリ」と記載される。さらに蜷川家所蔵の天正年間の年代記に「文明十三辛丑、諸郷ニ富士塚ヲ置」と引用されているとある（註1）。この説をもとにすれば、富士塚の形成は15世紀後半まで遡ることになるが、江戸時代後期の説であり、尚且つ根拠とした記録も原本を確認し得ない。

岩科氏が述べている高田富士以前の鎌倉時代からあったとする富士塚についても、具体的にどこのどういったものを指すのかは述べられていない。高田富士はあくまでも富士塚の完成された姿として評価できるものであって、塚に祀って祭祀をするという発想自体この時生まれたというものではないだろう。つまりは、富士塚そのものの形成史を考える上で、高田富士を始まりにすることは適当でない。

また、富士山に関する自然及び文化の様々な事柄から100のテーマを抜粋した2012年刊行の『富士山を知る事典』「富士塚」項では、高田富士に関わる富士塚の定説的な理解の説明に加えて、「富士講による築造以前から、塚上に浅間社を勧請するなどした「富士塚」も存在した。その起源は中世に遡るものと見られ、東京都文京区の駒込富士・静岡県富士市鈴川の富士塚は、近世初頭の記録がある。」として、中世に遡る角行系の富士講以外の集団による造作事例について触れられている。但し、「こうした古くからの富士塚の形態やこれらが当時の富士信仰に果たした役割などは、まだほとんど明らかにされていない。」と整理している。

この部分の項目をまとめた荻野裕子氏は、「富士講以

外の富士塚—静岡県を事例として—」と題した別稿をまとめられており、そこでは鈴川の富士塚、静岡市清水区興津の富士塚（消滅）、焼津市下江留の御山塚（消滅）、焼津市上小杉の富士塚（消滅）、浜松市中区浅田町の富士塚（消滅）、浜松市中区砂山町の富士塚（消滅）、浜松市東区有玉西町の富士塚（消滅）の事例を紹介されている（荻野2006）。

これらの富士塚も、各地域で富士山になぞらえて信仰されていたものである。荻野氏が「富士講以外の富士塚」として紹介する意図も、あくまでも角行系の富士講で築造されたものではないという意味として捉えられる。本来、講そのものは共通の信仰のもとに集まった集団であり、角行系の富士講以外の富士山信仰を持っていた集団も、富士講と称していた場合は多い。こうしたことから、駿河国より西側の西国方面で広まっていた富士山信仰の影響を受けて育まれた富士塚も、本来は富士講以外の富士塚として捉えるべきものではないのだろう。こういった富士塚には、高田富士の築造以前に遡ることが確認できるものも含まれているし、総じて関東地方で角行系の富士講が爆発的に流行する以前から、これとは違った富士山信仰の広まりによって育まれたものであったと考えられる。

但し、こういった角行系の富士講以外の富士塚を丹念に拾い上げた荻野氏の論においても、現状で確認することのできる富士塚は、鈴川の富士塚のみであった。鈴川の富士塚について述べた記録として、享保18年（1733）の年記をもつ『田子の古道』がある（註2）。同書には、「いずれの頃より富士参りの輩、浜下りして、石壺つつ荷い上げ、この山へ登りて、富士禅定の軽からん事を頼み、これにより富士塚とはいうなり」とある。高田富士が築造された明和2年（1765）よりも前の時期に、富士山への登山参詣を行う際の習俗として、田子の浦の海岸から石を拾い、道中の安全を祈願して、この富士塚に登っていたことになる。おそらく、浜で拾った石は富士塚に供えたのであろう。また江戸時代初期の慶安3年（1650）5月25日の年記をもつ「富士本宮年中祭礼之次第」、明治時代の「古来所伝祭式」によると、富士山本宮浅間大社の4月祭礼の際、大宮司以下の社家・社人衆がこの富士塚の前浜となる鈴川の浜に出向いて禊を行い、富士塚を指すと思われる「富士丘」に参詣することも記されている（註3）。

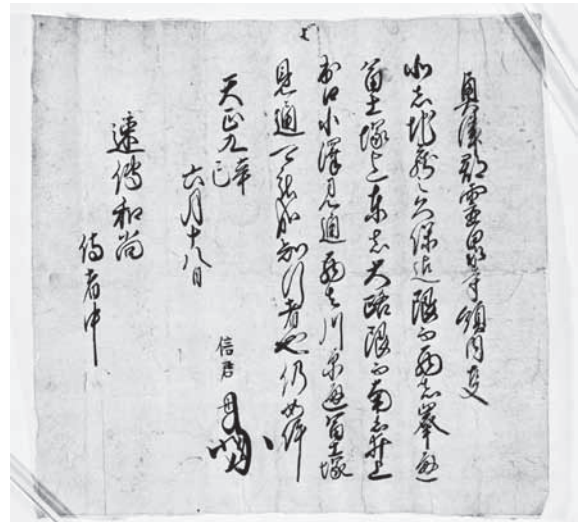
また、荻野氏が紹介した興津の富士塚については、静岡県清水区興津井上町の霊泉寺領の境にあったとされる富士塚である。霊泉寺は、永禄12年(1569)に江尻城主となった穴山信君が創建したとされる寺院であるが(註4)、天正9年(1581)の信君と同11年(1583)の武田信吉による文書が伝来している(註5)。その内容は、霊泉寺領の東西南北の境となる四至を確定するために出されたもので、基本的にはどちらの資料も同じ箇所を述べているものと思われる。このうち、天正9年の文書については、「西者峰通富士塚迄」「西者川原通富士塚見通」というように、本文に富士塚という文言が登場する(第43図)。この文書は、現在のところ富士塚という文言が確認できる最初の文書になるかも知れない。

霊泉寺には現在もこの文書が残っており、信君の花押も入っている。但し、『静岡県史』資料編では「穴山信君判物写」として文書原本とは評価せず、その内容についても「本文書は検討の余地がある。」としている。この文書については、霊泉寺の開創時期が永禄12年と比較的新しいこと、庇護者である穴山信君が天正10年(1582)に死没したことから、領地の確定に関しては常に苦心していたであろうことは想像できる。こういった背景の中で、伝来する文書が写なのか、あるいは偽文書なのかについては判断が難しい。ただ、確実に言えることは、写であっても偽文書であっても、領地確定のために利用するためには、四至に登場する地名は実際に通用する地名でなければ、効力を持ち得ないということである。

つまり興津において、富士塚という地名があったことは確実である。しかも、その時期はひとまずは16世紀末の中世後期にまで遡る可能性が高い。ちなみに、興津の富士塚は、現在消滅してしまっているようだが、具体的な場所については、江戸時代後期の地誌『駿河志料』の中で、「此寺の門前なる、庚申堂の上山にあり、形象の似たる故に然云、此塚の辺に古墳あり、里人云、永禄戦士の墓なりとぞ」とある(註6)。その場所は、霊泉寺に境内の西端で興津川左岸の断崖上の微高地という伝承がある(荻野2006)。

## 2. 富士塚形成の前史としての富士山信仰

山岳霊場への信仰は、原始時代に始まる自然崇拝にその淵源を求められ、容易に近づき得ない場所と捉えられていた。富士山においても、その火山活動が活発化した



第43図 穴山信君判物写

(霊泉寺所蔵 静岡県立中央図書館歴史文化情報センター写真提供)

時期は、荒々しい火の神として噴煙をあげる近づき難い神が鎮座している姿が意識されていたようである。奈良時代から平安時代にかけて、富士山へ鎮火の祈りを捧げるために祠堂を建て、浅間大神あさまのおおかみを迎えて、祭祀者を常設するようになっていった。富士山は自然神として、山腹の遙拝所ようはいで遙拝されていたものから、山麓の湖水や湧水池周辺において祭祀されるようになる。

一方で、山岳での修行を旨とする仏教や道教が伝来することにより、そこで修行した宗教者が神霊から得ることになった験力げんりきに対して、宗教的救済を期待する人々が増えていた。特に験力を修めた者は、修験者しゆげんじやまたは山伏やまぶし(山臥)と呼ばれて崇められたのである。平安時代には全国各地に山岳霊場が開かれていったが、富士山もその流れの中で山岳修行の場となっていったのである。

富士山を山岳修行の場と位置づけた人物として、史料的に確実な人物としてあげられる一人に、駿河国出身で伊豆走湯山そうとうざん(熱海市の伊豆山神社)や富士市岩本の実相寺などで修行したと伝えられる平安時代後期の末代人(有鑑)が知られている。末代は、『本朝世紀』久安5年(1149)4月16日条に、富士山へ登山し山頂に大日寺を構えた「富士上人」として登場しており、さらに同年5月13日条に、山頂に一切経を埋納したことが記されている(註7)。また、富士山表口登山道の拠点のひとつ富士山興法寺(富士宮市の村山浅間神社、以下興法寺とする)の開山となり、守護神として大棟梁権現と呼ばれ祀られている。末代による山岳修行は、村山において修験道の行法をとるものへと発展していった(村山修験)

(註 8)。

また、末代自体が伊豆走湯山で修行したと伝わるが、富士山における山岳修行は関東地方の修験者と深く関わって開かれていったものと考えられる(註 9)。その影響からか、室町時代に入っても、応永 5 年(1398)の伊豆走湯山密厳院領関東知行地注文案案の中で、「一、駿州 富士村山寺」とあげられている(註 10)。村山寺とは興法寺を指すものと考えられ、室町時代中頃までは伊豆走湯山密厳院の末寺に位置づけられていたことを確認する。

伊豆走湯山は、鎌倉幕府や室町時代の関東公方にも庇護を受けていた有力な宗教勢力であるが、こうした宮寺の末寺に位置づけられていたということだけに留まらず、実際に関東地方においても富士山信仰が既にかなり浸透していた様子がうかがえる。中世の鎌倉時代末、元亨 3 年(1323)の年記をもつ神奈川県立金沢文庫保管「称

名寺絵図」(第 44 図)の左上方に「富士山権」と注記された堂舎図像が描かれる(註 11)。この図像と注記は後筆された別筆であると思われるが、「富士山権」(=富士浅間)と読むべきか、あるいは「現」が脱となり本来は「富士山権現」と書かれるはずだったものと思われる。この後筆自体がいつ行われたのかにもよるのだが、関東地方における富士山信仰の浸透を垣間見ることができる。

さらに、享徳 3 年(1454)の奥書をもつ鎌倉公方足利成氏の年中行事を記した『鎌倉年中行事』では、「六月朔日、御祝如常富士御精進七日有之、御近辺飯盛山之富士参詣有之」とあり、富士山開きとなる六月朔日から七日間禊を行い、近辺の「飯盛山之富士」に参詣したとある(註 12)。飯盛山という名称は、御飯を盛ったような円錐台の形状をした山に付けられることが多く、あるいは山そのものを富士山になぞらえていた可能性もある



第 44 図 重文 称名寺絵図(称名寺所蔵 神奈川県立金沢文庫保管)

のではないだろうか。おそらくこの飯盛山には富士浅間社が勧請されていたものと思われるが、山そのものを富士山に見立てる行為は、富士塚の発想の原点として共通するものである。

『鎌倉年中行事』が作成される2年前の享徳元年(1452)10月4日には、足利成氏の護持僧月輪院の意を受けた大先達宗俊が、関東八ヶ国(相模国・武蔵国・上野国・下野国・安房国・上総国・下総国・常陸国)のその年の「年行事」の修験者に、10月28日に鶴岡八幡宮で衆会を開くことを各地域の修験者へと伝達するための廻状を回させている(註13)。この廻状は、富士、二所(伊豆走湯山、箱根権現)、熊野先達、山伏、聖道、神職などにも広く伝達するように指示がなされており、室町時代には関東八ヶ国に富士先達職をもっていた宗教者が多数存在したことがうかがえるのである。

関東地方からは天候次第で現在でもかなり広範囲から富士山を仰ぎ見ることができるが、前近代の時代にはさらに広い範囲で富士山を遠望することができたであろう。富士山に登山参詣するためには、駿河国側には表口(大宮口・村山口)、須山口、須走口が、甲斐国側には吉田口と河口(船津口)の各登山口が開かれていたが、この各口から富士山への登山参詣を果たした諸国の道者が奉納したと思われる富士山中への寄進物を確認する。

船津口における長久2年(1041)銘の鰐口、乾元2年(1303)年銘の地藏菩薩など、既に平安～鎌倉時代から檀那や願主名を記した奉納物の寄進が確認できるが、資料の残存状況や奉納物の後世における移動もあって、判断は難しい。しかし、須走口六合目の至徳元年(1384)相州糟屋郡の銘をもつ懸仏をはじめとして、主として室町時代中期以降の一般民衆による登山参詣の活発化に対応し、奉納物も増加する傾向にあるようである。

これら奉納物の寄進者は、駿河国内に留まらず尾張国、武蔵国、上野国など諸国に波及しているが、中世の段階から各登山口によって富士山への参詣者である道者を受け入れていた国々に既に差異があった可能性は高い。北口の吉田口については、文明14年(1482)銘の薬師如来・不動明王の懸仏が上総国、天文4年(1535)銘の大日如来の懸仏が武蔵国、永禄3年(1560)銘の大日如来の懸仏が上野国よりの奉納で、関東地方の諸国から登山参詣する際の地の利も影響していよう。一方で表口では明応2年(1493)銘の十一面観音像、同4年(1495)

の大日如来像など、いずれも尾張国よりの奉納で、それぞれ大宮口の富士山本宮浅間大社(以下、本宮とする)の大宮司や村山口の興法寺の辻之坊が関与しており、東海道の西国方面の国々と関係が深かったことを想定させる。

もっともこうした事例には例外も多くあり、当初奉納された場所から移動していたり、『勝山記』の明応9年(1500)6月条に「富士へ道者参事無限、関東乱ニヨリ須走へ皆々道者付ナリ」とあるように(註14)、その時々々の戦乱の状況にも影響され、登山口を変更せざるを得なかった場合もあったものと思われる。

### 3. 富士塚形成の背景としての富士山南麓地域

富士山が山岳霊場として発展していく過程において、各登山口それぞれに拠点となる集落(信仰登山集落)が形成されていた。こうした集落には浅間神社が祀られており、そこを中核として周辺に道者を受け入れる宿坊が営まれていった。この宿坊の経営者が、例えば大宮口の場合は本宮の社人衆であり、村山口の場合は興法寺の衆徒であり、吉田口の場合は北口本宮富士浅間神社の御師であったりと、職掌こそ違えども、実際はほぼ同様の活動を行っていた。

例えば、表口の拠点である大宮口は、駿河国の一宮として崇められていた本宮の門前町として発展していた地区である。本宮近辺における道者に対する宿坊の経営は、本宮の社人衆によって運営されていた。こうした宿坊を道者坊と呼んでいる。道者坊は、『大宮道者坊記聞』によると、15世紀末にはおよそ30余りあったとするが、江戸時代初めには7坊、中頃には5坊へと漸次統合されていった様子を伝えている(註15)。

また、表口もうひとつの拠点である村山口の富士山興法寺(以下、興法寺とする)では、構成員となる衆徒の中でも別当と呼ばれた村山三坊(大鏡坊・池西坊・辻之坊)が中心となり、その他同行の修験者をあわせて「山伏十三人衆」等と称して活動していた。具体的には、寛政12年(1800)12月に書写された元禄12年(1699)3月「境内分配帳写」で、大鏡坊の同行として蓮如坊・大武坊・吉原坊・清水坊の4人、池西坊の同行として三如坊・阿伽井坊・原田坊の3人、辻之坊の同行として長坊・峯坊・泉養坊・中尾坊の4人をあげており、この11人から原田坊を除いて、衆徒の村山三坊を加え

た13人が「山伏十三人衆」である(註16)。これらの集団は、村山三坊と三坊の支配を受ける下修験したしゆげんという関係性となり、富士山興法寺で「山伏十三人衆」を形成し、富士峯修行ふじみねしゆぎようと呼ばれた富士山みねいへの峰入り修行を实践していた修験者である。

さらに「山伏十三人衆」以外にも、中世後期の天正年間までは、富士郡の根方・加島地区から壱番衆とされる多門坊・東光坊・真光坊・金蔵坊・福泉坊・大泉坊の六人、貳番衆とされる小納言・延寿坊・玉蔵坊・形部坊・孫九郎坊の5人の計11人も富士峯修行に参加し、特に貳番衆の5人は先達役せんだつやくも兼ねていたとある。「境内分配帳写」には、「山伏十三人衆」の長坊が天文年間には今宮識真坊(富士市今宮か)を兼帯していること、泉養坊は天文年間には本宮近辺に住居していたこと、阿伽井坊は天文・天正年間まで鍛冶屋瀬古村(富士市今泉)の金蔵坊を兼帯していたこと、慶長年間に退転する原田坊も原田村(富士市原田)に住居していたことを記している。また阿伽井坊が兼帯していたとする金蔵坊は、根方地区の壱番衆・金蔵坊を指すと思われ、さらにこの阿伽井坊を天正年間に継承する修験者が、貳番衆に含まれる孫九郎坊なのである。あるいは「山伏十三人衆」に含まれている吉原坊も、吉原宿(富士市鈴川の元吉原宿周辺か)近辺に住居する修験者であった可能性は高いのではないかと(註17)。

以上のことから考えて、中世後期までは村山修験の影響力は富士市域に含まれる富士郡かみかた上方地域のみではなく、富士市域に含まれる下方地域しもかたまでも広がっており、ともに富士山の山中において、富士峯修行を行っていたことが想定される。「山伏十三人衆」としての定数が固定されるようになった時期は、天正年間以降の近世初期頃ではないかと考えられよう(大高2013a)。

近世江戸時代の地誌『駿河記』では、富士峯修行の行程を7月22日(旧暦)に村山から富士山に峰入りをし、霊場おさめふだに納札ふだうちを札打しながら、8月2日まで富士山の山内に籠る。そして3日に須山口集落のある須山村へと下り、愛鷹山において修行の後、富士山麓周辺の諸所の行場を経てから、村山へと帰山するものとある(註18)。富士峯修行は、近世の江戸時代後期に一時中絶する時期があるが、文政年間頃には再興され、その後昭和10年代までは継続して行われていた(大高2013b)。この修行は、旧暦6月中に一般の参詣者の登山参詣を開山していた富士山を閉山した後に行う修行であり、登山参詣とは一線

を画す村山修験の根本行事であった。しかし、現在はいもう継承者は絶えており、かつての次第を記す資料として村山浅間神社文書(富士宮市教育委員会寄託)や大宝院秋山家資料(富士山かぐや姫ミュージアム寄託)が残るのみである。

この村山修験の根本行事である富士峯修行を組織化させた人物は、鎌倉時代後期の頼尊という修験者である。しかし、この人物については「富士大宮司系図」(別本)に本宮の大宮司・富士直時のいとことして登場する他は(註19)、確かな事跡は不明である。しかし、修験者たちに実践されていた富士峯修行が、村山修験の勢力を広げる大きな画期となったことは間違いない。修験者は、この修行によって得たとする験力をもとに富士山南麓を始めとして、近隣諸国を廻国するようになり、各地の人々に教化をする機会を生んでいった。こうした関係性がもとなり、彼らの活動拠点である旦那場が形成されていく。旦那場で直接関係を結んだ人々を、今度は富士山の開山期間に自ら先達となり直接道中を導くことにより、村山地区は道者で賑わう信仰登山集落として発展していった。こうした背景から、村山修験においても富士山へと登山参詣する道者を多数勧誘すべく各地で先達を組織化し、さらに道者を受け入れるために興法寺の自坊を宿坊とした。また、入山料や各行場における祈禱料さんせんや散銭を徴収するなどして、登山道を整備し管轄するといった表口登山道における道者の受入体制が整えられていったものと思われる。その結果として、富士山は山岳霊場でありながらも、諸国から一般の人々が登山参詣に訪れるような状況となっていた。室町時代後期には、大宮口の本宮や村山口の興法寺の周囲には、道者を受け入れる宿坊の機能を果たしていた道者坊が、複数営まれている状況がうかがえるのである。

ちなみに、江戸時代の18世紀中頃において村山三坊が活動範囲としていた旦那場だんなば(霞とも)の地域区分を確認すると、遠江国は三坊の旦那場は入り組んでおり、伊勢国の神戸より庄野までと他少々・駿河国の安部在方は辻之坊、山城国・伊賀国・伊勢国の内川崎之町・駿河国の島田在方は池西坊、大和国・紀伊国・尾張国・美濃国・河内国・志摩国・伊勢国の桑名より追分までと亀山惣郷・鈴鹿郡二十四里と一志郡・安濃郡・安芸郡・多気郡・飯高郡・度会郡・山田町中ならびに御神領在方・駿河国の富士川より西藤枝までの地域は大鏡坊が旦那場としてい

る（註20）。こうした活動範囲からも、村山修験は西国方面に旦那場を展開していたことがうかがえる。この傾向は、本宮の道者坊の地域区分においても確認できるので（堀内1995）、表口は主として西国方面から登山参詣に訪れる道者を数多く受け入れていた登山道であったことが確認できる。

#### 4. 富士塚形成の背景としての吉原宿周辺

富士川東岸一帯を中世の時代、特に河東かとうと呼んでいた。河東に含まれる富士川の河口は、幾筋もの流路が別れて駿河湾へと注ぎ込む三角州を形成しており、東海道はその間を縫って東西に往来している。富士川が現在の流路にほぼ固定されるのは、17世紀初期から末期にかけて雁かりがねづつみ堤が段階的に整備された後になる。それまで富士川本流がどの流路をとっていたかについては不明な点が多いのであるが、東へと流路をとって、吉原湊へ直接注いでいた流路もあったと考えられている。

中世の東海道を経路として西国方面から登山参詣にやってきた道者は、基本的には幾筋もの流れに分かれていたと思われる富士川を渡り、近世の江戸時代に下街道と呼ばれて徒歩渡りを行っていた経路を進んだものと思われる。さらに東海道は、富士市の川成島、前田地区を通り抜けて、潤井川・和田川・沼川などといった河川が流れ込み、富士の御池あるいは三股の淵などと呼ばれていた現在の田子の浦港を渡船で渡り、吉原湊のある中世の吉原宿（元吉原）へと到着したものと思われる。

中世の東海道の経路上にあったこの吉原宿は、自然災害の影響で、寛永16年（1639）に内陸部の富士市依田原へと移転し（中吉原宿）、延宝8年（1680）にはさらに内陸部の富士市吉原の現在の吉原地区（新吉原宿）へと移転していった（註21）。富士川の渡船場の変更と流路の固定、その東側に位置する吉原宿の移転もあり、東海道の経路もその度に影響を受けたものと思われる。16世紀から17世紀にかけて5度変遷があったという指摘もあるが（荒川2013）、中世の東海道を経路に反対側の関東地方からやってきた道者についても、基本的には西国方面からの道者と同じく、中世の吉原宿へと到着したものと思われる。

ここで基本的にとしたのは、中世の東海道を西国方面から来た場合に、富士川右岸の静岡市清水区の蒲原宿から直接船で左岸の吉原湊へと到っていた可能性と（註

22）、近世の東海道の経路と同じく蒲原宿から徒歩で富士市の岩淵地区へと経路をとり、岩淵から渡船を利用し左岸へ渡河していた可能性もあるからである。

富士川右岸の岩淵から左岸の岩本地区の渡船は、これまでの研究では慶長7年6月、徳川家康によって川成島で行われていた渡河を岩淵一岩本間へ変更したとされている（註23）。しかし、岩淵には中世後期の天正8年（1580）には既に船頭衆もおり、渡船場が形成されていたようである（大高2017）。

岩淵から左岸へと渡河した場合、近世の江戸時代には東海道の上加島道と呼ばれた経路をとって東海道を東の吉原宿へと向かうことになるが、富士山へと登山参詣する道者については渡河してすぐに松岡地区の水神社付近から北へと経路をとって、富士本道を経路に大宮口へと向かうようになっている。仮に岩淵から渡河した道者が中世にもいた場合、吉原湊付近にある中世の吉原宿へと経路をとらずに大宮口へと向かうことができれば、近道であったことは間違いないはずである。

また、仮に中世に表口を利用して関東地方から登山参詣をしようと考えた場合にも、東海道を経路とせず、根方道を通って吉原宿を通過せずに直接大宮口へ向かってしまえば近道になる。しかし、それでも中世の段階では、基本的に吉原湊のある吉原宿を経由して、表口の経路を登山参詣へ向かっていたものと思われる。

例えば、中世後期の16世紀初め頃の作成と思われる本宮所蔵の富士曼荼羅図（国指定重要文化財本）において、富士川渡船の位置は下方の川成島より上方の岩淵一岩本付近を意識して描かれているように判断できる。しかし、左岸に渡河後東海道を往来する人々については、田子の浦海岸付近の中世の東海道と思われる経路をとり、潤井川河口で禊をする道者の図像群に加えて、傍らに神社と思われる堂舎図像が描かれている（大高2012・2016）。潤井川河口のこの図像は、吉原湊のある中世の吉原宿付近における浜垢はまごり離を意識して描かれた図像であったと考えられる。中世の富士登山信仰を図示するために作成されたこの作品においても、道者にとっての重要な習俗のひとつとして、この場面が描かれているのである。

中世の吉原宿については、前項で確認した興法寺の「山伏十三人衆」に含まれる吉原坊が吉原宿近辺に住居する修験者であった可能性があること、さらには吉原湊で船

を所有し、東海道の往来者に対して渡船を行っていた矢部氏が、「道者商人問屋」を営んでいることが注目される(註24)。矢部氏が関わっていた道者が、富士山へ登山参詣する道者であることはほぼ間違いなく、吉原宿では道者に対する商売を行っていた者と表口登山道在先達する修験者が住居していたことになる。鈴川地区の富士塚が、いったいつ頃形成されたものなのか、あるいは自然の砂山としての状態から富士塚という信仰的な要素を背負う存在に位置づけられたのはいつか、そこは重要な問題なのであるが、中世の吉原宿と富士山信仰との関わりを考慮に入れると、道者が道中の安全を祈って浜で石を拾い、砂山に供えていったとされる『田子の古道』に記される富士塚の習俗は、より注目されてくるのである。

中世の吉原宿を拠点とする富士山信仰をめぐる習俗は、吉原宿が移転した後も完全に廃れてしまう訳ではなくて、何らかの意味をもち続けたようである。吉原宿が現在の位置に移動する延宝8年(1680)以降の天明4年(1786)に尾張藩士の高力猿猴庵が記した『東街便覧図略』には、「元吉原」項として中世の吉原宿を紹介する場面も出ているが(註25)(第45図)、そこには

挿絵とともに「此所にて富士山禅定の図并富士山略縁起を売店あり、家名を富士見屋といふ」と注記がされている。吉原宿が移転した後も、表口からの登山参詣の経路を図示した登山案内図を販売する店が存在し続けていたのである。

道者は西から来た場合も、東から来た場合も、中世の吉原宿を経由しない方が近道であるように思うのであるが、しかし、それでも吉原宿へと向かってくる理由はいったい何なのだろうか。おそらく一番の理由は、現在の地形からは判断できない当時の富士川河口の複雑な地形と、駿河湾を船で通行する交通手段の方法とが大きく影響していたものと思われる。しかし、地形的な要因に理由を集約してしまっただけもいられないので、中世の吉原宿に関わる歴史資料から、交通及び流通における吉原宿の重要性と、富士山信仰との関わりについて確認したい。

### 5. 歴史資料にみる中世の吉原宿(富士塚周辺)

吉原という名称が登場する最初の文書は、長禄2年(1458)閏1月17日の「駿河国富士下方住人願文交名」である(註26)。この中で、道秀と藤左衛門という人物



第45図 「元吉原」『東街便覧図略巻五』(名古屋博物館蔵)

に「吉原」に在住しているという注記が記される。

中世の吉原宿周辺は、軍事的にも重要な拠点として考えられていたようである。特に戦国時代には今川氏、北条氏、武田氏による駿河国の河東地域の支配権争いの争奪地となり、複雑な状況を生んでいた。天文6年(1537)、今川氏はそれまでの親北条氏・反武田氏という関係を義元の家督相続を契機に、武田氏と同盟を締結した。その動きに対して北条氏が同年3月に駿河国の河東地域へ侵攻する「河東一乱」<sup>かとうのいちらん</sup>が起り、結局今川氏は駿河国の吉原以東の支配権を失うことになる。この状態は天文14年(1545)8月に義元が軍事行動を起こして奪還するまで継続した(大久保2008)。

北条氏は、河東地域を支配していた天文6年から14年の間、東海道の要衝であった吉原宿周辺に城を構えていた。ちょうどこの頃に駿府から熱海へ湯治に向かうため、東海道を通過した連歌師宗牧の紀行文『東国紀行』が伝来している(註27)。宗牧は、天文14年1月に吉原を通過するが、北条氏が構えた吉原城には狩野介某と松田弥次郎が陣を引いている。この吉原城は、本格的な城郭というよりも、簡易な砦のようなものだったと考えられるが、吉原湊を抱える要衝の吉原宿を抑えることで、交通と流通を掌握しようとしていたものと思われる。

宗牧の紀行文より行程を確認すると、まず「駿・豆さかひ不通」という状態であり、前年末に今川氏家臣の朝比奈三郎兵衛尉が飛脚を立て、内々に吉原城の北条方へ宗牧の通過の連絡をしたようである。宗牧は1月6日に駿府を出発し、蒲原に到着した頃に吉原から通過を許可する連絡が蒲原へ届いていた。そして蒲原の浜から船に乗り、吉原へと向かったが、敵地への送りということで、武装した兵を数多乗せた今川方の警固船が付いていった。吉原城を間近に見えたところで船を見つけた足軽が城から出てきたようで、合戦になることを避けるため「十四・五町此方の磯」に船を寄せ、荷物をおろし、吉原城の松田弥四郎の陣所へ使いを出した。その後、吉原城よりの案内で吉原湊の渡河を行う船に乗り、川を渡って陣所へと向かった。この際に、陣所において、窓を開けて富士山を見せられている。

吉原城の陣所は、南側の駿河湾を行き来する船が見渡せて、かつ北側の富士山を眺望できる位置にあったことがわかる。おそらく吉原宿南側の微高地上に設けられていたのだろう。また、東海道の東西の往来をつないでい

た吉原湊の渡船についても記されているが、この渡船業を行っていた矢部氏について確認したい。

矢部氏は前項において、吉原湊で船を所有し、「道者商人問屋」を営んでいることに触れたが、吉原宿に居住する有力者であったと思われる。その身分は、永禄5年(1562)2月14日の「今川氏真判物」で、「下方給人次」として陣番を勤めることになったとあり(註28)、地域の百姓層であったが、船を所有し、さらに陣番を勤めることになったことで、この時期今川氏被官に準ずる土豪的な身分となっていたことがわかる。

吉原宿周辺は、天文23年(1554)8月に大風による洪水被害に見舞われたようである。その際、矢部氏当主の矢部将監が死去しており、親類の孫三郎が跡を継いでいる(註29)。この継承の際に譲られた内容として確認できるものに、「駿河国吉原道者商人問屋」と「吉原渡船」と「立物」がある。道者商人問屋は、矢部氏が東海道を往来する道者及び商人の交通及び流通に関わる問屋業を担っていたことを示していよう。吉原渡船もそういった問屋業に関わって行っていたものと判断できる。立物については、「立つ」に回遊してくる魚群を追い込んで確保する意味があり、「立物」でその対象となる大型魚を指すという中村羊一郎氏の指摘がある(中村2012)。矢部氏はこの立物を西は蒲原、東は富士郡と駿東郡との境界付近と思われる「阿野堺」までの範囲において諸役等を免除されている。この範囲は矢部氏が活動範囲としていた部分とも重なってくるのであろう。

さて、吉原渡船が破損した際の修理について、矢部氏は河東地域における「一升勧進」で行うことが認められている。一升勧進とは、一升枡を用いて各戸ごとに勧進するものと思われ、一戸につき一升を集めたのであろう。この権利については、永禄10年(1567)に葛山城の葛山氏元より矢部将監と鈴木新右衛門が(註30)、天正11年(1583)に長久保城の牧野康成、沼津城の松平康次、興国寺城の松平清宗から、矢部清三郎が認められている(註31)。これらの一升勧進を認めた城主たちは、各時期において河東地域を管轄していた者と思われる。

天正11年の吉原渡船の修理については、その前年の天正10年8月に富士川が大洪水となったことが『当代記』に記されている(註32)。河東地域の領域を考える上でも、富士川河口付近で本流がいったいどこを流れていたのかは大変重要である。『当代記』によると、「駿州



富士河、カン原ノ町ノ東ヲ流レケルカ、俄ニ無水河原ト成、吉原江此河付タリ」とあり、大洪水の影響で富士川本流が蒲原宿の東側から吉原方面へと流れが変わったことを記している。富士川河口については、建治3年(1277)10月27日に渡河した阿仏尼の『十六夜日記』で「かそふれは十五瀬をそわたりぬる」とあるように(註33)、幾筋もの流れに分かれた三角州を形成していたことは想定できるが、本流については、その時々自然災害の影響を受けて、度々変わっていた可能性がある。

話は少し前に戻るが、永禄11年(1568)末に武田氏が今川氏の領国であった駿河国へと侵攻してきた際、北条氏は今川氏を救援するため吉原へと出陣してくる。この際に、北条軍は吉原に陣を引き砦を構えるために、12月矢部将監・渡辺兵庫助・鈴木善右衛門に諸道具を用意させ(註34)、さらに翌年1月に太田四郎兵衛・鈴木弾右衛門尉・矢部将監殿に渡船等に利用していたと思われる湊の船を陸へあげさせ、自らの兵糧船で兵糧を運び込んでいる(註35)。

この際に北条氏は、諸道具及び兵糧を置く場所を「吉原河東」と指定している。「吉原河東」と記すことで、富士川東側の河東の意よりもさらに限定的に吉原以東に地域を絞っていることや、あるいは「吉原・河東」というふたつの地域が含まれていることが考えられるが、北条氏が渡船を陸にあげてまで東海道の往来を制限したのに、荷は吉原より西側に置くとは考えにくいので、「吉原河東」とは河東地域の吉原以東を指して述べた件と思われる。

また、永禄12年(1569)4月には、矢部氏に対して吉原湊の十余艘の船を富士川の本瀬へ廻漕するよう指示している(註36)。この十余艘の船は普段から吉原湊に停泊しており、渡船にも利用されていた船の数と思われるが、富士川の本瀬とはいったいどこを指すのだろうか。仮に現在の富士川の流れと同じく考えるならば、吉原湊からいったん駿河湾に出て、再度河口から遡らなければならない。しかし、河口付近は徒歩渡りもできる浅瀬であったと考えられるので、船が海から溯上したとはあまり考えにくい。本瀬が直接、吉原湊へと流れ込んでいたのか、あるいは分かれた支川が流れ込んでいたのかは定かでないが、船は湊から河川を溯上していったものと思われる。

この武田氏の駿河侵攻の際、吉原に船橋が掛けられている。橋はまず永禄12年5月に北条氏によって掛けら

れたが(註37)、永禄13年4月には武田氏によっても掛けられている(註38)。但し、船橋が掛けられた方向は、中世の東海道が往来する渡船の経路ではないだろう。船橋を掛けるには、渡船の経路は距離的に長いということと、軍勢が行き来した方向は東海道ではなく、おそらく北西の大宮方面だったと考えられるからである。船橋は、江戸時代以降の東海道が沼川を渡っていた河合橋の近辺に掛けられたものと思われる。

さらに吉原は、天正18年(1590)の豊臣氏と北条氏との合戦、いわゆる小田原攻めの際にも陣が設けられ、船橋が掛けられている。徳川家康の家臣、松平家忠の日記『家忠日記』をみると、吉原の陣は小田原攻めの大軍を受け入れるために普請が続けられ、大軍を行軍させるための船橋、御茶屋についても複数設けられている(註39)。

豊臣秀吉は、同年3月26日に吉原に到着し、翌27日にはもう沼津へ行ってしまうが、小田原攻めの際に設けられた吉原の陣は、毛利家文書に伝来する「小田原陣ノ時海道筋諸城守衛図」(写真図版PL.5-14~16)で、近江国の大津から小田原までの宿泊地が絵図としてまとめられた中に登場している(註40)。この絵図をみると、富士川の流れは蒲原の東側に駿河湾へと流れ込む現在の富士川流路に近い流路と、少し上流でその流路から分かれて吉原湊へと流れ込む流路の2つが描かれている。その流路のどちらにも船橋という注記があり、富士川の渡河にとって問題となる2つの流路にはどちらにも船橋が掛けられていたものとわかる。また、吉原の「御陣」の場所には、半円状の小山を描き、「三本松」という注記もある。この「三本松」が、現在も元吉原中学校の東側に「三本松」という碑文が建てられている場所を指すのであれば、吉原の陣はこの辺りに造られていたことになろう。

おわりに

以上、「歴史資料にみる富士塚」と題して検討してきたが、鈴川の富士塚(あるいは周辺の砂山上の塚の存在を含め)を記録上最初に確認できるものは、やはり近世江戸時代の『田子の古道』を待たねばならない。そういった状況の中で、この節では富士塚が形成されることになる背景として、それ以前の中世から吉原宿(元吉原)周辺が富士山信仰とどう関わりあいをもっていたのかについて、整理を行った。

資料の信憑性に疑義はあるが、興津霊泉寺の天正9年

(1581)の文書に「富士塚」という文言が出てくる点は、塚そのものの形状はともかくとして、富士塚という概念自体は中世にさかのぼる可能性が高いと理解しておきたい。

#### 【註】

- 1 中山信名・栗田寛『新編常陸国誌』（宮崎報恩会編、常陸書房発行、1981年再版）452頁参照。
- 2 『田子の古道』（富士市立中央図書館、2007年）参照。
- 3 「富士本宮年中祭礼之次第」・「古来所伝祭式」（「本宮記録」、『浅間文書纂』12・49頁、官幣大社浅間神社社務所、1931年、名著刊行会より1973年再刊）参照。荻野2006論文参照。
- 4 興津地区誌編集委員会編『興津三十年誌』（興津地区町づくり推進委員会、1992年）。
- 5 穴山信君判物写（『静岡県史』資料編8中世4-1408号）、武田信吉判物写（『同』資料編8中世4-1649号）。
- 6 『駿河志料』2（歴史図書社、1969年）177頁「富士塚」項参照。
- 7 『浅間神社史料』（官幣大社浅間神社社務所、1934年、名著刊行会より1974年再刊）4頁。
- 8 村山修験については、宮地直一・広野三郎「村山浅間神社」（『浅間神社の歴史』第15章第3節、古今書院、1929年）、遠藤秀男「富士曼荼羅や村山修験」（『富士宮市史』上、1971年）・同「富士信仰の成立と村山修験」（『富士・御嶽と中部霊山』、名著出版、1978年）、宮家準「富士村山修験の成立と展開」（『修験道組織の研究』第5章第4節、春秋社、1999年）、『村山浅間神社調査報告書』（富士宮市教育委員会、2005年）、菊池邦彦「中世後期から近世前期における富士山村山口の登山者—『富士山檀記』を中心に」（甲州史料調査会編『富士山御師の歴史的研究』第12章、山川出版社、2009年）、大高康正『富士山信仰と修験道』（岩田書院、2013年）等を参照。
- 9 『寺社縁起と神仏霊験譚』（神奈川県立金沢文庫企画展図録、2003年）、西岡芳文「中世の富士山—「富士縁起」の古層をさぐる—」（『日本中世史の再発見』、吉川弘文館、2003年）、同「新出『浅間大菩薩縁起』にみる初期富士修験の信仰」（『史学』第73巻第1号、2005年）、『富士山縁起の世界—赫夜姫・愛鷹・犬飼—』（富士市立博物館、2010年）等を参照。
- 10 「醍醐寺文書」18函（『静岡県史』資料編6中世2

-1232号）。尚、鎌倉時代の文書と推定される年月日欠「密厳院寺領注文」（「醍醐寺文書」18函『静岡県史』中世2-1233号）にも「駿川村山」とある。

- 11 称名寺絵図（称名寺絵図並結界記）（『日本荘園絵図聚影』積文編2中世1、東京大学出版会、2016年）。
- 12 『殿中以下年中行事』（『群書類従』巻第408・武家部9）参照。
- 13 「小野寺文書」（『栃木県史』史料編中世1）。宮家準「教派修験の成立」（註8『修験道組織の研究』第6章第1節）参照。
- 14 流石奉編『勝山記と原本の考証』（国書刊行会、1985年）。
- 15 「大宮道者坊記聞」（「案主富士氏記録」、註3『浅間文書纂』316頁）参照。同史料は年月日を欠いているが、おそらく江戸時代初期の寛永4年（1627）をあまり隔たらない時期のものではないかと思われる。
- 16 境内分配帳写（註8『村山浅間神社調査報告書』「旧大鏡坊富士氏文書」K123号）。下修験の蓮如坊・大式坊・吉原坊・清水坊・三如坊・阿伽井坊・原田坊・長坊・峯坊・泉養坊・中尾坊の11人は「夏花摘番（げのはなつみばん）」を勤めるとされており、彼らは行人層（堂衆）として捉えられる。またこの11人に村山三坊を加えた14人の中から、原田坊・泉養坊を除く12人を「拾貳坊」、原田坊を加えて「山伏拾三人」と称すともある。
- 17 まだ吉原宿が元吉原地区にあった天正10年（1582）段階の酒井忠次黒印状（「村山浅間神社文書」、『静岡県史』資料編8中世4-1519号）に、村山修験の大鏡坊の抱える坊中として、「大鏡坊・清水坊・蓮如坊・吉原坊・弁鏡坊」と出ている。
- 18 『駿河記』下（臨川書店、1974年）「富士山興法寺別当三坊」項より抜粋。同書は桑原藤泰著で、文化6年（1809）より編纂を開始し、文化15年（1818）に完成した37巻の地誌である。
- 19 「別本大宮司富士氏系図」（注（3）『浅間文書纂』、官幣大社浅間神社社務所、1931年、名著刊行会より1973年再刊）33頁。
- 20 証抛物（江戸大久保ニテ写）（注（8）『村山浅間神社調査報告書』「旧池西坊富士氏文書」K2号）。
- 21 『ふるさとの歴史物語』第4話「吉原宿のうつりかわり」（富士市立中央図書館、2000年）、『富士川を渡る歴史』（富士市立博物館、2009年）等を参照。
- 22 例えば、永禄11年（1568）6月の今川氏真朱印

- 状(「大井文書」、『静岡県史』資料編7中世3-3464号)で、静岡浅間神社社人の榊大夫は、富士山への登山参詣の先達を勤めるために「江尻・清見寺・蒲原船 関、此外諸役所関銭」を七人分免除されているが、蒲原宿で船関を通過するという事は、蒲原宿から直接船で吉原宿へ向かっていた可能性がある。
- 23 『富士川町史』第5章「富士川の渡船」(富士川町、1962年)、注(21)『富士川を渡る歴史』等を参照。
- 24 今川義元判物(「矢部文書」、『静岡県史』資料編7中世3-2242号)。
- 25 『東街便覧図略』「元吉原」項(『東街便覧図略』「伊豆・駿河・遠江の部」、羽衣出版、1994年)参照。
- 26 「米良文書」(『静岡県史』資料編6中世2-2299号)。
- 27 『東国紀行』(『静岡県史』資料編7中世3-1716号)。
- 28 「矢部文書」(『静岡県史』資料編7中世3-3011号)。
- 29 今川義元朱印状(「矢部文書」、『静岡県史』資料編7中世3-2238号)。
- 30 葛山氏元朱印状(「矢部文書」、『静岡県史』資料編7中世3-3426号)。
- 31 牧野康成黒印状(「矢部文書」、『静岡県史』資料編8中世4-1685号)、松平康次黒印状(「矢部文書」、『静岡県史』資料編8中世4-1686号)、松平清宗判物(「矢部文書」、『静岡県史』資料編8中世4-1696号)。
- 32 『当代記』2(『静岡県史』資料編8中世4-1570号)参照。
- 33 『十六夜日記』(『静岡県史』資料編5中世1-1263号)参照。
- 34 北条家朱印状(「矢部文書」、『静岡県史』資料編7中世3-3536号)。
- 35 北条家朱印状(「矢部文書」、『静岡県史』資料編7中世3-3604号)。
- 36 北条家朱印状(「矢部文書」、『静岡県史』資料編7中世3-3721号)。
- 37 北条家朱印状写(「矢部文書」、『静岡県史』資料編7中世3-3728号)、北条家朱印状(「矢部文書」、『静岡県史』資料編7中世3-3742号)。

- 38 武田晴信書状写(「歴代古案」、『静岡県史』資料編8中世4-198号)。
- 39 『家忠日記』(『静岡県史』資料編8中世4-2342・2350・2356・2377・2383号)参照。
- 40 「小田原陣ノ時海道筋諸城守衛図」(『静岡県史』資料編8中世4-2384号)参照。尚、吉原の「御陣」の部分の注記について、『静岡県史』資料編では「千本松」としているが、原本資料の写真を確認したところ注記は「三本松」と確認できる。

#### 【参考文献】

- 荒川辰美 2013「『田子の古道』についての一考察」『駿河』67号
- 岩科小一郎 1983『富士講の歴史』名著出版
- 大久保俊昭 2008「河東一乱」をめぐって」『戦国期今川氏の領域と支配』岩田書院
- 大高康正 2012「富士参詣曼荼羅試論」『参詣曼荼羅の研究』岩田書院
- 大高康正 2013a「富士峯修行考」『富士山信仰と修験道』岩田書院
- 大高康正 2013b「富士山の「法印さん」」『富士山信仰と修験道』岩田書院
- 大高康正 2016「富士山の参詣曼荼羅を絵解く」『聚美』18号
- 大高康正 2017「富士参詣曼荼羅にみる富士登拝と参詣路」『国史学』221号
- 荻野裕子 2006「富士講以外の富士塚—静岡県を事例として—」『民具マンスリー』第38巻10号
- 中村羊一郎 2012「沼津市内浦及び西伊豆町田子におけるイルカ追込み漁について」『静岡産業大学情報学部研究紀要』14号
- 富士学会企画 2012『富士山を知る事典』日外アソシエーツ
- 堀内 眞 1995「富士に集う心—表口と北口の富士信仰」『中世の風景を読む』3 新人物往来社

## 第4節 地誌とビジュアルメディアから鈴川の富士塚の実像を探る

井上 卓哉

はじめに

「鈴川の富士塚は、富士登山の前に身のケガレを払う場所であったと考えられています。登拝者は海岸で水垢離と呼ばれる精進潔斎を行い、その際浜から玉石を持ってきて砂山に積み上げ、登山の安全を祈願したと考えられています。(後略)」

この文章は、鈴川の富士塚の近くに設置されている案内看板の一節である。ここに記されているように、鈴川の富士塚は、近世から近代にかけて記された地誌類の記載内容から、富士山信仰に関係した文化財として捉えられている。しかしながら、実際に富士山の登山者が、いつ頃まで上記のような行動をおこなっていたのかということについては不明な点が多いというものまた事実である。

そこで、本論では、近世から近代にかけての地誌類から鈴川の富士塚に関わる言説の変遷を明らかにするとともに、富士山の登山絵図、絵葉書、空中写真といった、幅広い層に見られることを意識して発行された媒体資料、いわゆるビジュアルメディアの分析から、近世から現代にかけての鈴川の富士塚の実像を探ることを大きな目的としたい。

### 1. 地誌類に見る鈴川の富士塚をめぐる言説

享保18年(1733)、吉原宿の住人植松蓮知(註1)は、吉原宿や周辺地域に関する伝承や見聞をまとめた『田子の古道』を著した。この著作の原本の所在は不明であるが、写本はいくつか知られており、写本類に見られる以下の記載により、鈴川の富士塚に関して初めて取り上げた地誌として知られている。

富士塚 此山ハ自然の砂山にあらず 此辺の砂にてわざとつき上たるはなれ山なれば いただきに宮居鳥居有て 古木のはいゆがみたるそぎ松四方へはびこる(中略) いずれの頃より富士参りの輩浜下りして石壺つつつ荷い上げ 此山に登りて富士禪定の軽からんことを頼み これにより富士塚というなり(富

士市立中央図書館 2007、27-28頁)

この記載では、富士塚は人造の砂山であり、その頂上に宮居(神が鎮座する場所)があるという。また、富士塚という名前の由来として、富士山に参詣する人々が登山の前に浜へ下り、浜の石を一つづつ担ぎ上げて道中の安全を祈願したことが記される。

ここで注意しなければならないのは、植松蓮知が『田子の古道』の巻末に、「此辺の古きいわれを伝え聞きてのみ、又、愚か(な)る舌、目、身見覚たる事を書添え」(富士市立中央図書館 2007、69頁)と記しており、その記載は、古くからの伝承を記したものと、自ら見聞したものの2種類から構成されているという点である。

そして、富士塚についても、その記載は伝承によるもので、すでに富士山の参詣者が石を積むという行事はおこなわれていなかったのか、それとも植松蓮知自身が、実際に富士山への参詣者が石を積んでいる様子を見たのかということを確認する記載については確認することができない。つまり、石を積んで安全を祈願するという信仰形態が享保18年(1733)まで確実におこなわれていたとは必ずしも断定できないということを指摘しておきたい。

いずれにせよ、鈴川の富士塚は、植松蓮知によって初めて地誌に取り上げられることとなった。そして、その後続く、この地域について記した近世の地誌類にも富士塚の記載を確認することができる。

まずは、文政元年(1820)に桑原藤泰がまとめた『駿河記』があげられる。この中で、鈴川の富士塚については、以下のように記されている。

砂にて築上たる塚にて、上に富士浅間の小祠あり。富士禪定する者濱に下りて垢離をとり、石一つづつつぎ上、此塚の上にて禪定の禳をするに依て其名あり(桑原 1974、156頁)

さらに、ほぼ同時期に、江戸時代後期の国学者である新庄道雄によってまとめられた『駿河国新風土記』にも、

鈴川の富士塚について以下の記述が確認できる。

砂にて築上たる塚にて、上に富士浅間の小祠あり、富士禪定する者、浜へ下りて垢離をとり石一つづつかつぎ上、此塚の上にて禪定の禳をするに依て富士塚の名あり、(新庄 1995、1277 頁)

ここで取り上げた2種の地誌における富士塚の記載は、異なる筆者にも関わらず、全くと言って良いほど同じ内容となっている。さらには、その内容は、『田子の古道』の記載を要約したものにすぎない。この状況から鑑みると、桑原藤泰と新庄道雄は、実際に自らの目で富士塚そのものや富士塚にまつわる習俗を見たというよりも、『田子の古道』を参照しただけではないのかという可能性が浮かびあがる。

一方、幕末の文久元年(1861)に駿府浅間神社(静岡浅間神社)の神職を勤めた新宮高平によって著された『駿河志料』には、以下のように、従来の富士塚の記載に加えて、興味深い一節が加えられている。

祓潔の場なり、上に云、大宮浅間神事祓潔のとき垢離の後、大宮司社人富士塚に参詣し、御祓正鑑取次第記にあり 又富士登山の者汐垢離をとり、石一ツ宛かつぎ上、此塚の上に置て祓をす、因て是を富士塚と稱す(中村 1969、300 頁)

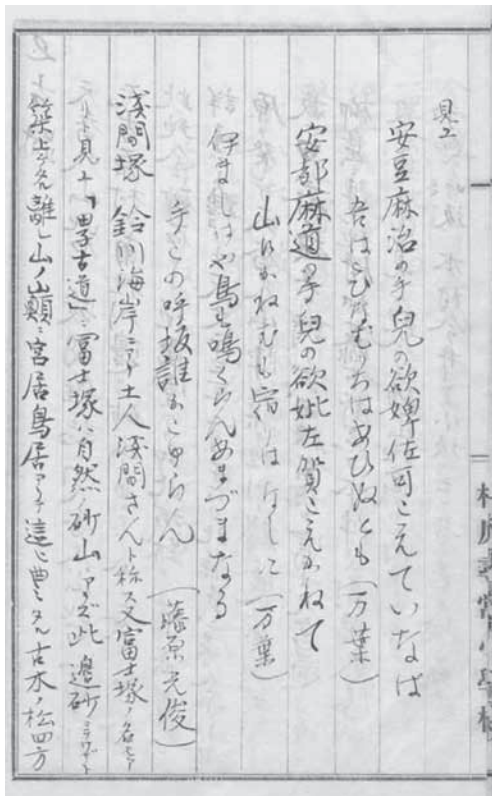
ここでは、大宮浅間(富士山本宮浅間大社)の神事の際に、大宮司の社人が富士塚に参詣していることが記されている。そして、この記載の根拠として、「御祓正鑑取次第記」という史料が挙げられている。荻野裕子は、新宮高平が取り上げたこの史料として、慶安3年(1650)の奥書を持つ富士山本宮浅間大社の「富士本宮年中祭礼次第」である可能性を指摘している(荻野 2006、5 頁)。ここには、卯月初申より七日以前之寅ノ日(旧暦の4月上旬・新暦では4月下旬から5月上旬か)に浜に下りて赤飯を食べ、大宮司と庶子衆、御祓役人正鑑取が垢離の後に富士丘(富士塚のことか)に参詣すると記されている(浅間神社社務所 1973、24 頁)。また、その奥書には、古来の次第を写したものであることが記されており、富士山本宮浅間大社による祭礼は江戸時代以前まで遡ることも可能であるかもしれない。

さらに荻野は、同様の記述が見られる史料として、同社の「古来所伝祭式」を挙げている(荻野 2006、4 頁)。この史料は明治年間に編纂されたもので、4月下旬の寅の日に社員一同が鈴川の海岸で禊をおこない、その後、大宮司・公文・案主の神職が富士丘(富士塚のことか)に参詣し、正鑑取が祓をおこなうと記されている(浅間神社社務所 1973、58 頁)。これらのことから、少なくとも江戸時代の初期から明治にかけて、富士塚は富士山本宮浅間大社による祭礼が執り行われていた場所であったことがわかる。

加えて、近代の地誌においても、富士塚を取り上げたものが散見できる。このうち、まずは明治40年(1907)から44年(1911)まで吉原に居住した山中共古が、滞在中に見聞したことをまとめた『吉居雑話』内の記載内容を取り上げたい。それによると、砂山海岸に石塚があり、その塚の頂上には、石造の小さな社があると記される。また、塚の側には享保2年(1717)3月の銘を持つ石灯籠があるという。さらに、この石灯籠には、「浅間廣前」という言葉と「丸に三の紋」が刻まれており、頂上の小さな社は浅間大神を祀っているものと指摘している(成城大学民俗学研究所 1984、12 頁)。

ここでは、富士塚という表記はされていないが、石の塚であるということ、さらに塚の頂上に小さな社があるということは、『田子の古道』の記述と矛盾していないことから、鈴川の富士塚について記したものであると言えるだろう。そして、これまで紹介した地誌類には見られなかったが、『吉居雑話』では上記の記述とともに、塚の様子を描いた挿絵が所収されており、当時の状況をより具体的に知ることができる。

『吉居雑話』に加えて、近代の鈴川の富士塚について記載した地誌に、富士郡誌を編纂するための資料として、大正元年(1912)に元吉原尋常小学校と柏原尋常小学校の連名で執筆された「郡誌編纂資料副本」というものがある。これには、浅間塚という項目が挙げられており、地域の人々は浅間さんと呼んでいると記されている。さらに、『田子の古道』を引用して、富士塚という名称もあるとする(第46図)。加えて、塚の周辺には倒れた石灯籠が数基あり、そのうちの一つに、今泉の佐々提玄なる人物が元禄年間に撰文した文章が刻まれているという(第47図)。この文章については、佐々家に遺稿が残されているとし、以下のように全文を掲載している。



第 46 図 「郡誌編纂資料副本」 浅間塚項目 1  
(静岡県立中央図書館蔵)

富士之海畔鈴川之神祠村民相傳言木花開耶姫漁人祈  
是福山神寄斯移只恐此小社香火後有口點剗青石書字  
植水崖 佐々統提玄撰

この『郡誌編纂資料副本』の記述と撰文に記された文言によると、鈴川の富士塚の付近にある石灯籠の一つは、元禄年間に鈴川の村民が奉納したものであり、漁師たちが小社に祀られている木花開耶姫に祈りを捧げていたことがわかる。

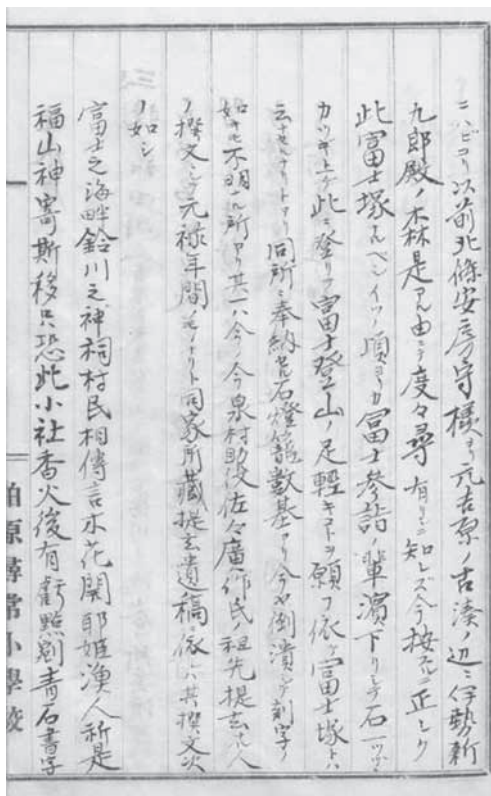
ここまで、近世から近代にかけての地誌類において、鈴川の富士塚がどのように記述されてきたのかについて見てきた。そこからは、大正初期までは石を積んだ塚そのものは存在し続けていたということが明らかであろう。そして、鈴川の富士塚に対する信仰形態として、以下の3つのパターンが存在していたということを指摘できる。一つ目に、富士山の登山者が自らの登山の安全を祈願するという。二つ目に、地元の漁師たちが木花開耶姫に祈りを捧げる場所であったということ。三つ目に、富士山本宮浅間大社の祭礼がおこなわれる場所であったということである。

このうち、一つ目のパターンである登山者による安全祈願については、基本的には『田子の古道』を踏襲した記載にとどまっており、各種の地誌類が『田子の古道』以降に記されたものであっても、それらが当時の状況を実際に見聞して記述したとは考えにくく、地誌類の記載だけで近世から近代にかけて登山者が石を積み続けたと主張することは無理があるのではないだろうか。

また、二つ目のパターンについては、その根拠となるものが、江戸時代初期に石灯籠に刻まれた撰文のみであり、それだけで近世から近代にかけて存在し続けたと断定することは困難である。

最後に、三つ目のパターンである富士山本宮浅間大社の神事の場合であったということであるが、史料の上では江戸時代以前から明治まで神事が執り行われていた可能性を指摘することができる。ただし、明治・大正期の地誌類には神事の記載が見られない。このことは、これらの地誌類が記された時期には、神事そのものはすでに実施されていなかったことを示すのではないだろうか。

このように、近世から近代にかけての地誌類の分析からは、鈴川の富士塚には、いくつかの種類の信仰形態が



第 47 図 「郡誌編纂資料副本」 浅間塚項目 2  
(静岡県立中央図書館蔵)

存在していたことを指摘することができたものの、現在において鈴川の富士塚の解説として採用されている、富士山の登山者が安全祈願のために石を積み上げたという信仰形態がいつ頃まで存在していたのかということについて明らかにすることはできなかった。そこで、次節以降では、富士山の登山絵図、絵葉書、航空写真といったビジュアルメディアから鈴川の富士塚の実像を明らかにすることを試みたい。

## 2. 富士山の登山絵図から見る鈴川の富士塚

富士山の登山絵図とは、庶民による各地への参詣が盛んになった江戸時代以降に、富士山への参詣のために訪れる道者の利便に供する案内図のことである。基本的には富士山の山頂へと至る周辺の道筋が描かれるが、それだけではなく、道中の様々な信仰施設や行場なども記される。さらには、富士山周辺の名所旧跡などを記したものも見られる。これらの登山絵図は、基本的には登山道の起点となる宗教施設やそれに関わる人物が版元となり、木版刷の形で大量に発行され、道者の誘客のためにも用いられた。

登山絵図とはこうした特徴を持つビジュアルメディアであるがゆえに、発行された当時の人々の認識を知るための一つの手がかりとなる。そこで、ここでは江戸時代から明治にかけて発行された富士山表口の登山絵図のうち、富士山かぐや姫ミュージアムの所蔵資料を中心に、当時の人々が富士塚をどのように捉えていたのかについて探ってみたい。

### ①富士名所盡 延宝8年(1680)

個人蔵

年代が記された富士山南麓の登山案内図の中では最も古いもの。東は愛鷹山、西は富士川、南は駿河湾、北は富士山の山頂までを収める。山頂の左右には富士山の略縁起及び発行年、タイトルが記される。また、村山興法寺を中心に、道、川、宗教施設、家屋が描かれ、それぞれに対応した注記や地名が見られる。

この絵図は延宝8年(1680)に発行されたものであるが、同年閏8月にこの地域を襲った暴風雨に伴う高潮により、吉原宿は壊滅的な被害を受け、翌年に内陸の新吉原宿へと移動した。この絵図には、移転前の吉原宿(中吉原宿)が描かれており、希少性が非常に高いものとされている(菊池2012、2頁)。また、

延宝8年は60年に一度くる庚申のご縁年であり、女人禁制の一部が解除されるなど、数多くの道者が見込める年であった。そのため、この絵図はそうした道者に向けて発行されたものだと考えられている(菊池2012、2頁)。

さて、絵図の右下隅には「浮島がワラ」とあり、この西あたりが鈴川付近だと思われるが、富士塚の記載や塚のような表現は全くみられない。前述したように、この絵図は富士山の道者の誘客を意図して作成されたにも関わらず、富士塚が記載されていないということは、すでにこの時期においては、登山の前に石を積んで安全を祈願するということが、それほど重視されていなかったのではないと思われる。

### ②富士山禅定図 天明年間(1781~1789)

富士山かぐや姫ミュージアム蔵(第48図)

東は原宿、西は三保の松原、南は駿河湾、北は富士山の山頂までを収める。余白部分には、タイトル、富士山の略縁起、異名、仏尊名、版元が記される。また、村山興法寺を中心に、道、山、川、宗教施設、家屋が描かれ、それぞれに対応した注記や地名が見られる。

この絵図の版元として、「駿州富士郡元吉原」の記載が確認できることから、元吉原にて頒布されていた可能性が高い。また、本図とほぼ同じ内容を描いている金沢文庫本には「富士山村山 米津将監」という版元が確認できることから、本図は富士山を舞台に活動した村山修験の影響の元で発行されたものだと考えられる。

さて、本図においては、絵図の下部やや右寄りに鈴川付近の様子が描かれる。ただし、そこで確認できる



第48図 富士山禅定図 部分

のは、「田子ノ浦」という表記のみで、富士塚の記載や塚の表現は見られない。本図の中には、富士登山を終えた道者が用いる下山専用のルート（下向道）や精進明けの垢離場が描かれている一方で、富士塚が描かれていないということは、当時としては、鈴川付近での水垢離や安全祈願のために富士塚に石を積むということが、登山の前に必要なこととして認識されていなかったのではないだろうか。それを裏付けるように、東海道を西から進んで富士川を渡った先に「富士山道」と刻まれた石碑が表現されており、登山のスタート地点が別の場所に設定されているのである。

### ③駿州吉原宿絵図 文政10年(1827)

富士山かぐや姫ミュージアム蔵(第49図)

東は愛鷹山、西は富士川、南は駿河湾、北は富士山の山頂までを取める。絵図右肩にタイトル、左側の余白に「文政十丁亥年初夏開板之 吉野保五郎板」とあり、発行年と版元を知ることができる。版元の吉野保五郎という人物の詳細は不明であるが、吉原宿が表現されている部分に「本家山神丸製所」とあり、また、そのやや右下には山神丸という薬を求めた人物にはこの絵図を差し上げるとの記載があることから、吉原宿の薬屋から依頼を受けて製作した、あるいは薬屋に関わる人物と想像できる。

なお、絵図には、富士山の山頂へと至るルートとともに、数多くの宗教施設が記される。また、名物や名所旧跡も記載されており、道者のみならず、より広い層へと頒布することを目的に製作されたことがうかがえる。

さて、本図の右端には浮島原から流れる沼川とそれ



第49図 駿州吉原宿絵図 部分

を渡る川合橋(河合橋)が描かれる。川合橋の右手が鈴川付近であるが、ここで表現されているのは「砂山地蔵」の文言と堂舎と思われる建物の姿のみであり、富士塚の記載や塚の表現は見られない。

### ④駿河国富士山絵図 江戸時代

富士山かぐや姫ミュージアム蔵(第50図)

東は愛鷹山、西は岩淵村、南は駿河湾、北は富士山の山頂までを取める。絵図右肩にタイトル、左下隅に「富士山別当表 村山興法寺三坊蔵板」とあり、村山修験の中心的な役割を果たした池西坊、大鏡坊、辻之坊の三坊が発行主体となったことがわかる。その内容は、先に取り上げた駿州吉原宿と酷似しているが、上部余白に富士山の略縁起、異名、仏尊名を記すという点で、より仏教的側面が濃いものとなっている。さらに、前掲の駿州吉原宿絵図においては、吉原宿から大宮へ向かう道を「大宮道」と強調しているのに対して、本図では吉原宿から大宮へ向かう道は強調されておらず、逆に吉原宿から村山へ向かう道を「登山道」として強調している。また、駿州吉原宿絵図において「本家山神丸製所」と記されていた部分には、「エツ弘所」(絵図広め所)とあり、吉原宿において頒布されていた絵図であることがわかる。こうした点からも、文政10年(1827)に開板された駿州吉原宿絵図とそれほど変わらない時期に発行された可能性があるのではないだろうか。

本図における鈴川付近の描き方であるが、前掲の駿州吉原宿絵図にも表現されていた砂山地蔵及びその堂舎と思しき建物に加え、阿字神社とその社殿、そして「字生贄」という地名が表記されている。ただし、本



第50図 駿河国富士山絵図 部分



図は村山興法寺が主体となって製作したものであるのにも関わらず、富士塚の記載や塚の表現は見られない。

#### ⑤富士山表口真面之図 江戸時代

富士山かぐや姫ミュージアム蔵 (第51図)

東は沼津の千本松、西は三保の松原、南は駿河湾、北は富士山の山頂までを収める。絵図の右肩にはタイトル、左肩には村山興法寺の縁起と村山興法寺の三坊が版元であることが記される。さらに、本図の左下には「麗山白石図」とあり、本図は江戸時代後期に活動し、山梨鶴山、柴田泰山と並んで庵原三山の一人として称された神戸麗山の手によるものであることがわかる。富士山図を得意にした麗山であるからか、富士山南麓の様子を写実的に描き、各場所に注記が入る。

さて、本図の下部やや右寄りが鈴川付近であるが、富士塚の記載や塚の表現は見られないが、その一方で「天ノカク山」(天香具山)の表記と、小さな丘の表現を見ることができる。このことから、本図が発行された江戸時代後期においては、鈴川付近の砂丘部は、天香具山と呼ばれることもあったことがわかる。



第51図 富士山表口真面之図(江戸時代)部分



第52図 富士山表口真面之図(明治10年)部分

#### ⑥富士山表口真面之図 明治10年(1877)

富士山かぐや姫ミュージアム蔵(第52図)

先に取り上げた神戸麗山が描き、村山興法寺が版元となった富士山表口真面図の明治期の改版。江戸期のものと異なる点として、村山興法寺の縁起を記した部分に村山から各地へ向かう際の距離を記しているほか、「麗山白石図」と記されていた場所には、画工・彫工として江戸時代後期から明治にかけて活躍した彫師、太田駒吉の名が記されている。また、神仏分離令の影響もあってか、江戸期の富士山表口真面之図に記載されていた山中の仏教施設の多くは名称が変更されているほか、注記が削除されている。

さて、江戸期の富士山表口真面之図と同様に、鈴川付近においては、「香久山」の表記と小さな丘の表現を見ることができる。また、富士塚の記載や塚の表現は見られない。

#### ⑦駿河国富士山表口全図 明治11年(1878)

富士山かぐや姫ミュージアム蔵(第53図)

東は愛鷹山、西は三保松原、南は駿河湾、北は富士山の山頂までを俯瞰的に描いたもの。絵図の右肩にはタイトルと「直立一千四百十七丈」とあり、富士山の高さを示している。山頂左の余白には、富士山の縁起が記され、左下隅には「明治十一年六月御届 静岡県平民 著者 出版人 藤田與一郎」とある。

これまでの絵図と同様に、宗教施設や名所旧跡、街道沿いの村々の地名などが記載されている。本図右下には鈴川及び砂山の地名が記されているが、富士塚あるいは天香具山の表記、塚の表現などは見られない。ここで取り上げた7点の富士山の登山絵図以外にも、



第53図 駿河国富士山表口全図(明治11年)部分

富士山かぐや姫ミュージアムにはいくつかの富士山表口の登山絵図が所蔵されているが、いずれの絵図にも富士塚の記載や塚の表現を確認することができなかった。

ここまで述べてきたように、登山絵図というビジュアルメディアの中において、富士塚について記載したり、塚を表現したものは全く見られなかった。登山絵図の発行の目的の一つに、富士山へと登る道者の利便に供するとともに、誘客を意図しているという点があるが、この点から鑑みれば、富士登山にとって必要な場所や施設、魅力的な場所や施設は必然的に書き込まれるはずである。しかし、富士塚の記載や塚が書き込まれていないということは、最も古い絵図である「富士名所盡」が発行された延宝8年(1680)の段階ではすでに、富士山へと登る道者が鈴川の海岸で水垢離をおこない、登山の安全を祈願して富士塚に石を積むという行為は重要視されていなかった可能性が高い。

この仮説に基づけば、享保18年(1733)に記された『田子の古道』における富士塚の信仰形態は、筆者が自ら見聞したことを掲載したというよりも、古くから言い伝えられてきたものを掲載したのではないだろうか。

一方で、鈴川の付近には、「砂山地蔵」という表記や堂舎の表現、「天香具山」という表記や小さな砂丘の表現が見られる。これらの記載が確認できるということは、登山絵図が発行された当時の人々が、鈴川付近において特筆すべきものとして認識していたことの証左であるといえよう。特に、鈴川付近の砂丘を「天香具山」と呼称することは近代以降も引き継がれていたことが、次節で取り上げる絵葉書というビジュアルメディアからも知ることができる。

### 3. 絵葉書から見る鈴川の富士塚

明治33年(1900)、郵便法の改定により、それまで認められていなかった私製葉書の発行が許可された。それから4年後の日露戦争中に、当時の通信省が戦争に関わる画像を掲載した絵葉書を発行したことが、国内の熱狂的な絵葉書ブームに火をつけることとなった。以降、昭和初期にいたるまで、人々の間で絵葉書を送り、送られるといった文化が大いに流行し、数多くの絵葉書が発行されてきた。

こうした流行を背景に、人々の間で流通することを前提として、当時の人々の関心を引く様々な事象が題材と

された。特に、戦争を題材にしたものや災害を題材にした絵葉書は、速報性があり、かつ画像情報も持つことから、新聞などに匹敵するマスメディアとしての機能も有していた。さらには、当時の旅行ブームに乗り、各地の名所の写真や絵画を掲載した名所絵葉書が大量に発行されることとなる。

また、絵葉書には画像だけではなく、掲載された画像に対応したタイトルがつけられている場合や、その絵葉書の製作者や印刷者についての情報が記載されている場合もある。加えて、宛名面の体裁や消印からある程度の発行年代や使用年代が判明する場合もある。これらの特徴を有するが故に、絵葉書の持つ情報を分析することにより、その絵葉書が発行された時代における人々の認識や状況を、より具体的に知ることができる。

そこで、本節では、鈴川付近の情報を掲載した絵葉書を取り上げ、当時の人々がこの地域のことをどのように捉えていたのか、そしてその中で鈴川の富士塚はどのような状況であったのかということを検討してみたい。

#### ①鈴川の富士 Fuji Mountain of Suzukawa

筆者蔵(第54図)

宛名面の体裁から発行年代は明治40年(1907)4月1日から大正7年(1918)3月31日の間に分類される。画面右下にトンボの形のロゴが入っていることから、横浜の絵葉書問屋、トンボ屋(明治40年開業)発行のものとなる。

画面奥中央には富士山が配され、右手には石が積まれた砂の塚が写る。この塚が鈴川の富士塚である可能性が高いが、タイトルには富士塚の名称は採用されていない。塚の周辺に下草は見え、ある程度手入れはされているようである。

#### ②(富士勝景)天の香具山の富士 Mt Fuji seeing from Amanokakuyama

筆者蔵(第55図)

宛名面の体裁から発行年代は大正7年(1918)4月1日～昭和8年(1933)2月14日の間に分類される。発行は東京神田橋筒井盛華堂。

①の絵葉書とほぼ同じカットであるが、①よりも塚の近くから撮影されている。塚には、拳よりもかなり大きい石が積まれている様子が見て取れる。赤色に彩色されている石が散見されるが、その意図は不明である。なお、タイトルには富士塚の名称は採用されず、「天



第 54 図 鈴川の富士

の香具山」が採用されている。

### ③東海名所 天之香具山の富士

筆者蔵 (第 56 図)

宛名面の体裁から発行年代は大正 7 年 (1918) 4 月 1 日～昭和 8 年 (1933) 2 月 14 日の間に分類される。発行は伏見寫真堂。

①及び②の絵葉書とほぼ同じカットであるが、①よりも塚の遠くから撮影されている。そのため、塚の麓には石灯籠、塚の頂上部には石の祠が写る。前述した山中共古の『吉居雑話』に所収された挿絵に似た風景写真が掲載された絵葉書である。なお、タイトルには富士塚の名称は採用されず、「天之香具山」が採用されている。

### ④ (富士勝景) 鈴川附近ヨリ見タル富士

富士山かぐや姫ミュージアム蔵 (第 57 図)

宛名面の体裁から発行年代は大正 7 年 (1918) 4 月 1 日～昭和 8 年 (1933) 2 月 14 日の間に分類される。発行元の情報は掲載されていない。また、表口六合目馬返の記念印が捺されている。

画面奥中央に富士山を配し、手前の小さな高まりの上に三本の松、小さな祠、鳥居が写る。①から③までの絵葉書とは明らかに異なる場所を撮影したものであ

るが、鈴川の漁師による魚群の監視場でもあり、海からの目印としたとされる三本松 (物見の松) か (鈴木 1981、466 頁)。

### ⑤ (富士新八景) 天之香具山の富士 View of Mt fuji from Amanokaguyama

富士山かぐや姫ミュージアム蔵 (第 58 図)

宛名面の体裁から発行年代は大正 7 年 (1918) 4 月 1 日～昭和 8 年 (1933) 2 月 14 日の間に分類される。発行元は東京今川橋青雲堂。

④の絵葉書と同じカットであるが、より海岸に近いところから撮影されており、手前には大きく漁船が写る。タイトルには「天之香具山」が採用されている。

### ⑥東海道香具山富士

富士山かぐや姫ミュージアム蔵 (第 59 図)

宛名面の体裁から発行年代は大正 7 年 (1918) 4 月 1 日～昭和 8 年 (1933) 2 月 14 日の間に分類される。発行元の情報は掲載されていない。

④及び⑤の絵葉書と同様に三本の松が写るが、より近い距離から撮影したものか。そのため、一番右側の松は見切れている。タイトルには「香具山」が採用されている。

### ⑦静岡 鈴川付近之富士 Mt.Fuji



第55図 (富士勝景) 天之香久山の富士 (部分)



第58図 (富士新八景) 天之香久山の富士 (部分)



第56図 東海名所 天之香久山の富士



第59図 東海道香具山富士 (部分)



第57図 (富士勝景) 鈴川附近ヨリ見タル富士 (部分)



第60図 静岡 鈴川付近之富士

筆者蔵 (第60図)

発行元は掲載されていない。④、⑤、⑥の絵葉書と同じ松と富士山が写る。ただし、前述の絵葉書に写っていた三本の松のうち、一番左側の松が失われている。宛名面の体裁から、発行年代は明治33年10月1日から明治40年3月31日の間に分類されるが、実際は④、⑤、⑥の絵葉書よりもやや後の時代に発行されたものか。ただし、宛名面に「郵便はかき」と右から左に記されていることから、大正7年(1918)4月1日～昭和8年(1933)2月14日の間の発行と考え

ることに矛盾はない。また、④、⑤、⑥の絵葉書よりも松周辺の下草が目立つ。

⑧砂丘を越えて 国立公園富士・香具山より Wonderful Fuji-yama from Kaguyama, Fuji National Park

筆者蔵 (第61図)

発行元として、「TRADE MARK TAISHO WAKAYAMA」の記載を確認することができる。宛名面の体裁から発行年代は大正7年(1918)4月1日～昭和8年(1933)2月14日の間に分類されるが、富士山が国立公園に指定されたのは昭和11年(1936)2月1

日であることから、昭和11年から昭和21年（1946）12月26日の間に発行されたものと考えられる。

写真には、⑦の絵葉書と同じ松が写る。ただし、松の周辺にはかなり下草が繁茂しており、人の手が入らなくなってしまう様子がうかがえる。なお、タイトルには「香具山」が採用されており、解説文として「海岸ではないが如何にもその感深い砂丘が連なつて美しい風景を展開してゐる。富士を見るに實に絶好地と稱され、附近勝地の壓巻とさえ言晴れてゐる。」と記され、この地からの景色を絶賛している。

ここで取り上げた絵葉書からは、明治から昭和初期にかけては、鈴川の砂丘から見る富士山の風景が名所の一つとしてある程度知られていたことがわかる。その背景には、明治22年（1889）に東海道本線の鈴川駅（現在の吉原駅）の開業を受けて、鈴川周辺地域が富士山を眺めることができる風光明媚な場所としてリゾート開発されたことが挙げられる。また、明治天皇の皇后である昭憲皇太后がこの地域をたびたび行啓（註2）したことも、当時の名所化の大きな要因であった。

そして、富士山とともに所収されたものとして、山中共古が『吉居雑話』内に描いた塚（鈴川の富士塚）、地元で「三本松」（大正期に1本倒れ、2本となる）と呼ばれた松が選択されている。

それぞれの絵葉書のタイトルからは、鈴川周辺地域に対する認識について知ることができる。その表記のパ

ターンとしては、単にこの地域の名称である鈴川とする場合と、「天香具山」という名称を用いる場合の二つに分けることができる。やはりここでも富士塚という名称は一切用いられておらず、明治から昭和初期にかけても富士塚をめぐる言説は意識されていなかった様子がうかがえる。一方で、いくつかの表記があるが、塚や三本の松を含めた砂丘一帯を「天香具山」と表現しており、鈴川周辺の名所旧跡が「天香具山」という名所に内包されてしまった状況が指摘できる。

ただし、鈴川の富士塚自体は、失われるということではなく、山中共古が『吉居雑話』内に描いた様子を留めており、周辺の植生からも、ある程度人の手が入り、景観として維持はされていたようである。その背景に、塚を守ろうとする積極的な意思があったのか、それとも松葉を焚付として利用するために採取するなどによって結果的に景観が維持されていたのかについては、今後の聞き取り調査に委ねたい。

いずれにせよ、この当時まで維持されてきた鈴川の富士塚の景観は、戦後大きく変化することとなる。次節ではその様子を、空中写真というビジュアルメディアから辿ってみたい。

#### 4. 空中写真から見る鈴川の富士塚

空中写真とは、航空機から地上を撮影した写真で、昭和26年・27年の米軍による国土全域の撮影以降、国



第61図 砂丘を越えて 国立公園富士・香久山より

土地理院や自治体により定期的に撮影されてきた。そのため、戦後から現在に至るまで、特定の場所の定点観察が可能で、場合によっては土地利用の変遷などをたどることができる。ここでは、昭和27（1952）年の空中写真を皮切りに、現在の鈴川の富士塚周辺の様子を概観してみたい。

#### ①昭和27年（M-198）

現在の鈴川の富士塚周辺は、松林に覆われており、塚状のものを確認することはできない。一方で、現在の鈴川の富士塚からやや南方（現在、文化財の案内看板が設置されている場所付近）には、円錐形の盛り上がり確認できる（註3）。

この盛り上がりが山中共古の『吉居雑話』中に所収されている塚の挿絵、あるいは先に紹介した絵葉書に掲載された塚である確証はないものの、ここに塚があったことを想定すると、絵葉書に見られる景観とそれほど矛盾しないことを指摘しておきたい。



第62図 鈴川の富士塚付近の空中写真①  
「米軍撮影の空中写真（昭和27年撮影）」  
（△の交点が円錐状の盛り上がり）

#### ②昭和36年（C28-10）

昭和27年の空中写真で確認することができた現在の鈴川の富士塚からやや南方に位置する盛り上がりは、昭和36年の段階でも残っているようである。一方で、昭和27年には松林に覆われていた現在の鈴川の富士塚が位置している場所は、昭和36年の段階で松林の範囲がやや狭くなっており、林床の一部を確認

することができる。ただし、そこに人工的に積み上げた盛り上がりを確認することはできない。



第63図 鈴川の富士塚付近の空中写真②  
「国土地理院撮影の空中写真（昭和36年撮影）」

#### ③昭和46年（CB-71-3 C8-11）

昭和36年と比べると、現在の鈴川の富士塚周辺はかなり松林に覆われる状況となり、林床は全く確認することができなくなっている。また、昭和36年の空中写真まで確認することができた現在の鈴川の富士塚からやや南方に位置した盛り上がりは、この段階では失われてしまっているようである。



第64図 鈴川の富士塚付近の空中写真③  
「国土地理院撮影の空中写真（昭和46年撮影）」

④昭和51年 (C CB-75-31 C5B-11)

昭和51年は、現在の鈴川の富士塚の形態へと造成工事された年である。この写真は、工事直前の様子を撮影したものか。塚周辺は松林に覆われ、塚の盛り上がりは確認できない。また、塚の南西部まで宅地開発が進んでおり、現在へと繋がる街並みが形成された時期である。



第65図 鈴川の富士塚付近の空中写真④  
「国土地理院撮影の空中写真（昭和51年撮影）」

⑤昭和52年 (CB-77-5 C8-12)

現在の鈴川の富士塚造成直後の空中写真。新しく造成された塚周辺の松林が伐採され、かなり開けた状況となっている。また、参道も整備されたようで、塚の



第66図 鈴川の富士塚付近の空中写真⑤  
「国土地理院撮影の空中写真（昭和52年撮影）」  
(△の交点が新たに造成された鈴川の富士塚)

南北に伸びる道が確認できる。ただし、塚周辺及び参道以外の場所は松林に覆われている。

⑥昭和63年 (C10-24)

現在の鈴川の富士塚が造成されてから12年後の空中写真。造成直後は塚及び参道の上は松林が開けていたが、12年後の昭和63年にはほとんど確認できない状況となっている。塚周辺の松林が旺盛に成長した様子がうかがえる。



第67図 鈴川の富士塚付近の空中写真⑥  
「国土地理院撮影の空中写真（昭和63年撮影）」

⑦平成2年

昭和63年よりもさらに松が成長し、わずかに確認できた塚と参道が全く確認できない状況となっている。



第68図 鈴川の富士塚付近の空中写真⑦  
「国土地理院撮影の空中写真（平成2年撮影）」

この状況では、林床はかなり暗い環境となっていた様子がうかがえる。その後、平成5年、平成12年の空中写真においても、状況はそれほど変化していない。

#### ⑧平成17年

塚周辺の松が皆伐され、周囲が開けた状況となる。平成12年から平成17年の間のどこかで、現在の鈴川の富士塚周辺の景観が形成されたことがわかる。



第69図 鈴川の富士塚付近の空中写真⑧  
「国土地理院撮影の空中写真（平成17年撮影）」

ここでは、昭和27年以降に撮影された空中写真から現在の鈴川の富士塚周辺の状況を概観した。昭和27年及び昭和36年の空中写真には、現在の鈴川の富士塚からほど近い場所に、円錐形の盛り上がりか確認できたものの、それが山中共古によって描かれた鈴川の富士塚、あるいは絵葉書に掲載された鈴川の富士塚であるとの確証を得ることはできなかった。同時に、現在の鈴川の富士塚の場所については、松林に覆われており、そこに塚状のものがあったのかどうかについても、空中写真からは判断することはできなかった。

いずれにせよ、現在の鈴川の富士塚の周辺は長期間にわたって松林に覆われ、明治から昭和初期の絵葉書に見られた塚と富士山という景観は長らく失われていたということが空中写真の分析から明らかとなった。そこからは、明治から昭和初期にかけて存在していた、富士山の風景が素晴らしい名所の一つとしての認識も失われてしまっていたということが指摘できる。その後、昭和51年に、鈴川の富士塚をめぐる言説の一つである富士山信

仰に関わる史跡ということに基づき、新たな富士塚が造成されたものの、その状況は大きく変化することはなかったようである。そして、現在の鈴川の富士塚周辺の景観が形成されたのは、わずか10数年前のことであった。

おわりに

本論では、鈴川の富士塚の実像を探ることを目的に、地誌類に記された言説及び、登山絵図・絵葉書・空中写真というビジュアルメディアから分析をおこなった。その結果として、富士山へ登る道者が安全祈願のために石を積んだという習俗は、江戸時代の初期にはすでに失われていた可能性が明らかとなった。その後、塚自体は失われることはなかったものの、人々の中で、富士山信仰に関わる塚という認識は徐々に失われていき、明治から昭和初期にかけては、「天香具山」という大きな名所の中へと内包されていくこととなった。さらに、戦後には、名所としての認識も失われてしまっていた。

ところが、昭和51年にはそれまでの塚があったとされた場所に、新たな富士塚が造成される。その造成の抛り所となったのは、富士山信仰に関する史跡であるという言説であった。この言説が採用された背景には、昭和30年代後半に写本が発見され、研究が進められた『田子の古道』に記された記述の影響がかなり大きかったのではないかと推測される。さらに、平成15年前後には、新たな塚周辺の松が皆伐され、塚と富士山という景観が復活することとなる。

このように、現在の鈴川の富士塚は新たに造成されたもので、史跡としての評価は今後慎重に検討しなければならないが、その造成により、富士山信仰にまつわる場所であったということや、富士山を美しく眺めることのできる名所であったことに対する再認識がおこなわれ、それが現在に至っているという点では、ある種の記憶装置として重要な価値を有しているともいえるだろう。



## 【註】

- 1 『田子の古道』の著者については、昭和30年代後半に『田子のふるみち』（森家本）が発見されて以降、吉原宿の住人姉川一夢とする説や植松蓮知とする説、植松蓮知とその息子源七郎の合作説などの諸説が検討されてきた。本稿では、森家本の発見以降確認された10冊を超える写本や関係資料の比較検討から、植松蓮知を作者とする福沢清氏の説を採用する（富士市立中央図書館2007）。
- 2 昭憲皇太后は、沼津御用邸に滞在中、6回（明治39年、明治40年、明治43年（3回）、明治44年）にわたって鈴川を行啓している（打越2014、174-175頁）。また、昭憲皇太后が沼川と潤井川の合流点付近に船で渡ったということから、その地は皇后の敬称である「きさいのみや」に因んで「喜歳島」と名付けられ、数多くの絵葉書や石版画の題材となっている。
- 3 この盛り上がりについては、空中写真による地形判読の第一人者である長谷川裕彦氏（明星大学）に判読を依頼し、ご指摘いただいた。ここに記して厚く御礼申し上げたい。

## 【参考文献】

- 打越孝明 2014『御歌とみあとでたどる明治天皇の皇后昭憲皇太后のご生涯』角川書店
- 荻野裕子 2006「富士講以外の富士塚―静岡県を事例として―」『民具マンスリー』第38巻10号
- 菊池邦彦 2012「富士山東泉院を訪れた人々」『六所家総合調査だより』第11号
- 桑原藤泰 1974『駿河記』下巻 臨川書店
- 新庄道雄 1975『駿河国新風土記』下巻 図書刊行会
- 鈴木富男 1981『鈴川の歴史』鈴川区管理委員会  
成城大学民俗学研究所 1984『諸国叢書』
- 浅間神社社務所 1973『浅間文書纂』名著刊行会
- 中村高平 1969『駿河志料』二 歴史図書社
- 富士市立中央図書館編 2007『田子の古道』

## 第5節 富士塚と民俗

松田 香代子

はじめに

鈴川の富士塚は、文献資料や口頭伝承によって富士山信仰を前提とし、富士登拝に関わる塚であるとされてきた。しかし、そもそもなぜこの吉原湊に富士塚を築き、そこを出発点として富士登拝をめざしたのか。そして、なぜ鈴川の浜で垢離を取って石を拾い、塚に積んで富士禪定の無事を祈ったのか。明確な根拠が示されているわけではない。本稿では、その民俗的背景を明らかにし、鈴川における富士塚の発生と富士山信仰の変遷、富士塚の民俗的意義について考察してみたい。

### 1. 静岡県における富士浅間信仰

富士市域の浅間神社 静岡県内には、富士宮市にある富士山本宮浅間大社をはじめ、浅間神社と名の付く神社が多い。創建や祭神にかかわらずその数だけを挙げるとすれば、『静岡県神社志』（1941）の統計では県内全域で172社、そのうち伊豆国に5社、駿河国に140社、遠江国に27社となっている（註1）。当然のことなが

ら駿河国に圧倒的な数を誇るが、『富士の研究Ⅱ 浅間神社の歴史』では駿河で123社としている（註2）。さらに、『静岡県史』資料編24に掲載されている富士市域の浅間神社は、1990年代の『静岡県宗教法人名簿』に登録されている神社も加えて21社としている（第8表）。

しかし、これらの資料中に鈴川の富士塚に祀られている浅間社の記載はない。近世から近代にかけての地誌類には、すべて浅間神社ではなく「富士塚」として挙げられているからである。また逆に、富士市内で浅間社が塚の上に祀られているという事例は、鈴川の富士塚以外にはない。

これらの浅間神社の中には、旧富士郡の下方五社と呼ばれる浅間神社（現在の富知六所浅間神社・滝川神社・今宮浅間神社・入山瀬浅間神社・日吉浅間神社）も含まれている。また、かつて旧富士郡下の浅間神社では5月初旬に流鏝馬が行われ、富士郡上方（現富士宮市）、同郡下方（現富士市のほぼ潤井川以東）、同郡加島（現

第8表 富士市域の浅間神社

所在地	『駿河志料』	『富士の研究Ⅱ』	『静岡県駿東郡誌』	宗教法人名簿
本市場	米宮浅間社	米之宮浅間神社		米之宮浅間神社
前田	浅間社			浅間神社
柳島	富士浅間社			浅間神社
宮島・加島	浅間社			浅間神社
五貫島	浅間社			
伝法	六所浅間社	富知六所浅間神社		富知六所浅間神社
				浅間神社
今宮	浅間社			今宮浅間神社
入山瀬	新福地浅間社			浅間神社
森下	浅間社			
原田	富士浅間社			
	飯森浅間社			飯森浅間神社
増川	富士浅間神社			浅間神社
桑崎	浅間社			浅間神社
今泉	十王子社		浅間神社	十王子神社
	日吉浅間社			日吉浅間神社
川成島				浅間神社
富士岡				浅間神社
間門	富士浅間神社			浅間神社
一色		浅間神社		
東船津	富士浅間神社		浅間神社	浅間神社
西船津	富士浅間神社		浅間神社	浅間・山神社
北松野	浅間社			

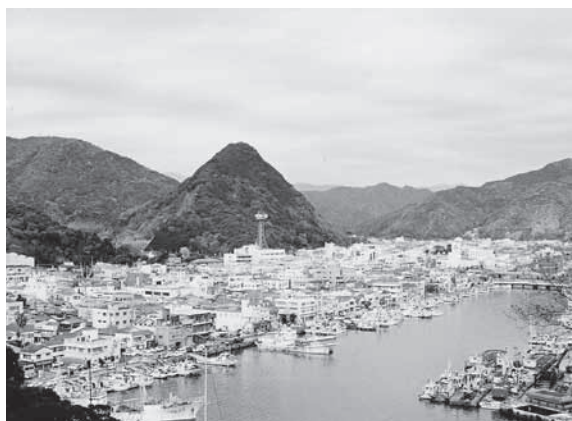
富士市のほぼ潤井川以西) というように、地域ごとに奉仕する馬が出された。近世には、流籠馬に先立って上方五騎は4月末日に鈴川の海浜で禊ぎを行い、富士山本宮浅間大社(以下、本宮浅間神社と表記)の社人とともにこの日から籠屋に入って潔斎することになっていた。同様に、下方五騎と加島五騎もそれぞれの地域で禊ぎをしたとされる(註3)。

富士塚のある鈴川の浜が、下方五騎ではなく上方五騎の禊ぎ場として認識されていたことは注目に値する。

伊豆の富士浅間信仰 先に、『静岡県神社志』(1941)には伊豆に5社の浅間神社が掲載されていると述べた。これらの内訳は、松崎町雲見の浅間神社・下田市本郷の浅間神社・伊豆市小下田の浅間神社・伊豆市葦山寺家の八幡神社相殿・熱海市網代の阿治古神社境内社(すべて現行地名)などに比定できるが、郷社の雲見浅間神社以外は無格社とされ、詳細は不明である。

伊豆半島雲見崎の烏帽子山山頂に祀られている雲見浅間には、山頂に上の宮、中腹に中の宮、麓に下の宮の社殿があり、上の宮が浅間神社本殿、下の宮が雲見神社(拝殿)と認識されている。中の宮は女宮おんなみやと呼ばれ、かつて女性はここまでしか登れなかったといい、女人禁制が守られてきた山であった(註4)。また、下田市の一岩山山頂に祀られている浅間神社も下田富士と呼ばれ、同様に中の宮があり女人禁制の山であった(註5)。

一方、『静岡県神社志』に記載はないが、伊東市大室山山頂にも浅間神社が祀られている。7月7日(古くは旧暦6月7日)にお籠もりをし、翌8日に祭礼が行われる。お籠もりにあたって、神職や氏子総代、漁師などの信者が、籠る前に自宅で風呂に入り、海で潮花を汲んで禊ぎをしてから山に登ったという(註6)。



第70図 下田富士(下田市本郷)

これら伊豆半島の浅間神社は周辺からも際だって目立つ山の上に祀られ、地元では〇〇富士、あるいは単にセンゲンサンと呼ばれている。そしてこれらの山は、海で生活する漁師や廻船の船頭達にとって、漁場や航行の目印の山当てに使う重要な指標でもあった。さらに、本宮浅間神社の祭神である木花之佐久夜毘売命このはなのさくやひめのみこと(木花開耶姫命)ではなく、磐長姫命いわながひめのみこと(雲見浅間・大室浅間)や「いはよ姫の明神」(下田富士)を祭神としていることも共通している。「記紀」では磐長姫命は木花開耶姫命の姉神だとし、下田富士の「いはよ姫の明神」も磐長姫命と同一神とする説もある(第70図)。いずれにしても、容姿端麗な駿河の富士に対して、岩山で形成された伊豆の富士は不器量な山容であるために、それを恥じて低くなった、山頂で駿河の富士を褒めると崖下に投げられる(海中へ投げられる)、などという言い伝えを持っている。明らかに駿河の富士とは異なる、ということを主張しているのである。ただし、これらの浅間神社は、鈴川の富士塚のような人工的構築物ではなく、あくまでも自然地形の山に祀られており、富士塚と同一視することはできない。これについては荻野裕子氏の先行研究があり、氏は「小型富士」という仮称を用いている(註7)。

遠江の富士浅間講 『静岡県神社志』(1941)には、遠江で祀られている浅間神社は27社あり、当時の郡市別の統計によれば榛原郡1・小笠原郡3・周智郡2・磐田郡9・浜松市3・浜名郡5・引佐郡4社という内訳になっている。このことから、統計の上では磐田郡内に集中して浅間神社が祀られていることがわかる。この磐田郡のうち旧豊田町・旧福田町・旧竜洋町(以上現磐田市)と旧浅羽町(現袋井市)では、オノツト(御祝詞)と呼ばれる行事が盛んであった。

オノツトとは、祭壇の前で先達じんみょうに続いて真言ちようや神ちよう帳ちようを唱和する講行事である。何を祀るかによって、その行事の目的が異なるが、行事の内容は大同小異変わらない。旧豊田町富里では、サナブリ(田植終い)のあとにオネガイゴリ(お願い垢離)、収穫後にオレイゴリ(お礼垢離)と称し、氏神の拝殿でサンジョウサマ(山上様)のオノツトを唱える(註8)。同町勾坂西下組でもオフツツアマ(お富士様)と称し、5月8日に富士講を行う。会所の公会堂祭壇には「富士本宮浅間大神」の掛軸、その左右に山上様と金比羅様の掛軸を掛け、先達(氏子総代)にならって全員でオフツツアマのオノツトを唱える。



第71図 大原のオノット（磐田市）

信心の対象は、全国100尊の神仏に及ぶという（註9）。

旧福田町大原の氏神は浅間神社である。言い伝えでは、大永年中の開発時、富士山が大噴火し、それを鎮めるために木花開耶姫命を祀ったのだという。祭日は7月1日の富士山のお山開きの日で、サナブリ後の行事であった。また、「正五九祭<sup>しょうごくさい</sup>」といい、正月・五月・九月の各9日に浅間神社で「浅間神社」「豊受太神宮」「日本国神代略図」の3幅の掛軸を掛け、先達に従って当番組の人達が神名帳を読み上げていく（第71図）。これをオノットといい、参加者は行事前に海岸で浜垢離をして身を清め、浜砂を拾ってきて、本殿や拜殿の周囲、境内社の<sup>はるな</sup>春笠社の祠の周囲に撒いて清める。オノットの帳面表紙には、「大峰山 富士山 御祝詞帳」とあり、大峰山と富士山をともに祀る講であることがわかる。この帳面は明治30年に写したものを平成9年に再び写したと記されているため、少なくとも明治30年以前から行われていたことがわかる（註10）。

旧浅羽町松下には、天保8年（1837）酉3月の祝詞帳が伝わる（浅間・天白神社所蔵）。表紙には「大峰山 富士山 御山渡り」とあり、大峰山の神名に続いて「富士浅間御山渡り」として、「南無 上ハほん天たい志やく」に始まる神仏の名を連ねている。その地名を挙げていくと、伊勢・津島・尾張・秋葉・勝坂・市野・天竜川・原川・日坂・駿府・蒲原・大宮・村山と続き、最後に村山口から山内、頂上の八獄に祀られている神仏の名などが記されている（註11）。

大峰講・富士講の垢離取り行事 旧竜洋町においても、オノットは盛んに行われている。当町の場合、オノットはもっぱら大峰講で唱えられるものである（註12）。旧豊田町でも祀られている山上様とは、大峯山寺（大峰山



第72図 富里の日参での浜垢離（磐田市）

上権現を祀る根本道場）がある山上ヶ岳（旧金峯山）のことである。当町小島（旧長野村小島）には、永田暁海という大先達（1851—1929）がおり、明治29年（1896）に45歳で大峰山の奥駈けを行い、天台宗修験道静岡県事務支局長になったという。この大先達の元、旧磐田市・旧竜洋町・旧福田町・旧豊田町・旧浜松市域に至るまで先達や信者がいたことが、その頌徳碑によって判明している（註13）。

このような磐田市周辺のオノットは、期日が決まっている講とは別に、村に疫病が流行った時や、村から出征兵士を送り出す時、けが人が出た時など臨時祭的に行われることもあった。言わば村の共同祈願であり、大峰山で何度も修行した験力のある先達に従って神名帳を唱えることで、村に降りかかった災厄を払おうとした。旧福田町中野ではオコリ（御垢離）といい、臨終の病人のために隣家の人達が太田川の垢離場で禊ぎをし、氏神を始め周辺の神々に病氣平癒祈願をして回り、最後に大峰山の祝詞を唱えた（註14）。この村の北側に位置する旧浅羽町富里でも同様に行われ、ここではニッサン（日参）という集落ごとの年中行事として毎年続けられている。ニッサンでは遠州灘海岸で浜垢離をしてから、輪番制で周辺地域の各神社を参拝する（第72図）。この行事も流行病の平癒祈願をきっかけとして始められた（註15）。

旧菊川町段平尾（現菊川市）は、東遠と呼ばれる駿河に最も近い遠州東部地域に位置する。ここには「富士垢離」と記された帳面が伝わり、旧暦6月15日（現在は7月14、15日に近い土日曜日）に、サンゲサンゲという行事を行っている。現在は虫送り行事と習合した形をとっており、200本ほどの松明（本来は108本）が点

火されると、公民館前に敷かれた筵の上で富士山の方向に向かって「サンゲサンゲ ロッコンショウジョウ」などの唱え言を、前後二組に分かれて唱和する。かつては、松明行事をゴリ（垢離）といい、灌漑用の溜池に入ってゴリを唱えたという（註16）。

以上のように、大峰講及び富士講の垢離取り行事は、村の共同祈願として行われていた。とくに富士講の垢離取りは「富士垢離」あるいは「富士（垢離）行」ともいい、水辺に行屋（垢離行のための籠り屋）を設け、川や池、海などに入って禊ぎをすると、富士参詣と同等の利益が得られるとしていた。かつては、三重県の伊勢・志摩・伊賀地方や滋賀県の琵琶湖周辺、京都・大阪などの関西一円に行屋があり、近世末まで盛んに行われていたという（註17）。このような垢離行そのものを活動の中核としていたのは、村山を本拠地としていた大鏡坊などの本山派修験であり、その管轄をしていたのが本山派修験総本山の聖護院門跡であった。本山派修験では、大峰山を根本行場として奥駈修行を行っており、各地で大峰講を組織していた。このため静岡県内の本山派修験の活動拠点で組織された大峰講の先達は、富士講の先達を兼ねることもあったと推察される。

## 2. 鈴川の富士塚の伝承と祭り

鈴川の人々と浅間社 鈴川の富士塚は、近世の資料に、鈴川の砂山の南に独立した人造の塚が存在し、それを人々は「富士塚」と呼んでいた、という記述があることから（註18）、近年になって一般に「富士塚」と呼ばれるようになった塚である。通常、鈴川の地元ではこれをセンゲンサン（浅間さん）、オセンゲンサン、センゲンヤマ（浅間山）と呼ぶ。とくに祭礼は行わず、昭和20年代には松林で鬱蒼としていて山頂に参ることはしなかったという。子ども達は危ないから行ってはいけない、と親から注意されていた。

このセンゲンサンが「浅間」と記載されるのは、近代以降の資料に見られる。日本メソジスト教会の牧師であった山中共古（笑）は、吉原の教会に赴任した明治40年から44年（1907—11）の間に、当地の民俗や石造物を見聞し「吉居雑話」に残した（註19）。これには次のように記されている（傍線筆者）。

砂山海岸ニ石塚ノ高キ処アリ、目立テ高シ、登リ見ル

ニ石造ノ小社アリ、波除土手ノ上ニ石灯笼一基アリ、文字塩風ノ為ニ滅シテ不見、唯ダ〇保二丁西三月下旬ト浅間廣前ノ文字カスカニ読レ得ルナリ、二丁西ハ享保二年ナリ、其年以来風波怒濤ノ為ニ崩サレヌト見ユ、松樹一二本此辺ニテノ古木見ユ、石灯笼ハ火袋ナク一枚石ナリ、丸ニ三ノ紋附タリ、浅間大神ヲ祀リシ石造ノ小社ナルヲ知ル、

つまり、山中共古が実見した折には、砂山海岸に高い石塚があり、その頂上には石造の小社があった。そして波除け土手の上に石燈籠があり、おそらく享保2年（1717）3月下旬「浅間廣前」に奉納されたが、風波のために崩され火袋がなく、一枚石で丸に「三」の紋が付いていた。松の古木が1、2本あり、その様子を挿絵に描いている。これにより、共古は「浅間大神」を祀る小社であると理解した。

同様に、県単位で行われた郡誌編纂事業によって各村の尋常小学校教師に編ませた村誌（「郡誌編纂資料」）にも記載がある（註20）。

浅間塚 鈴川海岸ニアリ土人浅間さんト称ス 又富士塚ノ名モアリト見ユ

とあり、このあと『田子の古道』の富士塚についての引用が続く（註21）。ここでは「浅間塚」という名称を用いているが、地元ではあくまでもセンゲンサンと呼んでいることが、この資料からも読み取れる。また、同書は次のような文面が続く。

同所ニ奉納セル石灯笼数基アリ 今ヤ倒潰シテ刻字ノ如キ不明ナル所アリ 其一ハ今ノ今泉村助役佐々廣作氏ノ祖先提玄ナル人ノ撰文ニシテ元禄年間ノモノナリト 同家所蔵提玄遺稿ニ依レバ其撰文次ノ如シ

富士之海畔鈴川之神祠村民相伝言木花開耶姫漁人祈是福山神寄斯移只恐此小社香火後有虧點剝青石書字植水崖

佐々統提玄 撰

鈴川周辺の浜地域は、漁業と農業を生業とする半農半漁の村が多い。浅間塚には数基の石燈籠があり、その一つには「富士の海畔にある鈴川の祠は、村民が伝えるとこ



第 73 図 鈴川の富士塚例大祭

ろによると木花開耶姫を祀って漁人が山の神の福（豊漁か）を祈るところである。ただ恐れ入り小社に香火（焼香の火）を焚いた。このことを後世に残すため青石を削って文字を刻んだ」というような意味が記されている。これは元禄の頃の人が撰文したとあるが、山中共古が見たものと同一の石灯籠だとすれば、享保2年の建立ということになる。

昭和51年（1976）、鈴川区管理委員会によって整備工事が行われたことにより、鬱蒼としていた松林が伐採され、高く盛り上げた砂山の上に川原石を敷き詰めた堅強な塚が築かれた。鈴川の人達はこれ以降、センゲンサンを「富士塚」と呼ぶようになったという。

平成29年現在、富士塚では毎年5月5日に例大祭が執行されている（第73図）。この祭りは昭和40年代後半から行っているというが、幟旗には「奉納 香久山明神 昭和五十二年五月吉日 鈴川区管理委員会」とあり、整備工事が終了した翌昭和52年に祭りを行ったと考えられる。ただし、なぜ「香久山明神」なのか、すでに伝承はなく、本来は浅間宮の幟旗であるべきだという話も聞かれた。

この祭りは新たに始められたとはいえ、鈴川区管理委員会と鈴川町青年会の主催で、富知六所浅間神社の神職

を祭主として迎え、本格的な神事を行っている。参加者は鈴川区の役員を始め、鈴川共同墓地管理委員会会長や地藏堂会長など鈴川区内の主要な施設を管理している役員も出席する。このほか、富士塚に関わる行政側の職員や小学校PTA代表なども参加する。

明治末期から昭和前期の富士参詣 鈴川に生まれ育った昭和6年生まれの女性は、明治27年生まれの母親が、結婚して間もなくの二十歳の頃、自分の兄弟達4人で富士山に登った話を聞いていた。女性によると、母親達は富士山に登る前に浜で石を拾い、富士塚に積んだ。皆で白い着物を着て、山頂で撮った記念写真を見たことがあるという。

また、昭和9年生まれの男性は、昭和初期に沼津市戸田など伊豆西海岸の人達が船で鈴川にやって来て、鈴川から富士登拝をした、と大人達から聞いたことがあるという。浜ならどこでもかまわず船を揚げ、無事を願って浜石を拾い、富士塚のどこかに石を積んで富士山をめざしたという。帰りは再び鈴川にやって来て、船で帰路についたのである。

これらの話は昭和一桁生まれの人達が、自分の両親や祖父母から聞かされた「オオムカシ」の話として伝えてくるものである。残念ながら垢離を取ったという聞き取

りは得られなかったが、間違いなくこの時期に、白装束を着て、登拝の無事を願って鈴川の浜で石を拾い、富士塚に石を積んでから富士山に向かった人々がいたことが確認できる。

昭和7年生まれは今も現役の漁師をしている男性は、子どもの頃、センゲンサンの頂上には石を削りぬいたような祠があったといい、祖父から「南無妙法蓮華経」と書かれた着物を着た人が、富士山に登る前に浜で石を拾って富士塚に積んでいったと聞かされた。

近世半ばの地誌類には、すでに過去の習俗として伝承のみが残っていた富士塚への石積みが、なぜこの明治末期から昭和前期にかけて、再び行われるようになったのであろうか。しかも、昭和6年生まれの女性の母親のように、20歳代の若い女性が兄弟と富士山をめざした目的は何であったのだろうか。

確証はないが、一つには日清・日露戦争から第二次大戦までの戦役が関わっているのではないか、ということである。明治37年(1904)の日露戦争中には弾除け祈願として、日露戦争後には徴兵除け祈願として、富士登拝が行われ、その祈願の出発点として富士塚への石積みがあった可能性がある。たとえば、近世の渡船場として



第74図 日向の七草祭舞台の結界石(静岡市)

栄えた旧富士川町岩淵(現富士市)では、12年に一度の申年に大宮口山頂奥宮前に鳥居を奉納する行事が継承されている。この岩淵鳥居講の記録は、近世は村山の旧大鏡坊富士氏文書(村山浅間神社所蔵)に、明治以降は富士山本宮浅間大社文書(同社所蔵)に見られる。幕末の嘉永元年(1848)には合計42人が登っているが、明治41年(1908)になると200名余、大正9年(1920)には500余名、昭和7年(1932)には370余名、同19年(1944)には241名もの登山者が頂上をめざした。そして、その大半の構成員は青年達であった(註22)。

大正9年は60年に一度の庚申縁年ではあるものの、近代に入ると交通手段の発達もあり爆発的に登拝人口が増加する。このように登拝を加速させたのは、明治22年(1889)の新徴兵令によって、日清・日露戦争への大兵力の動員が徴兵除け祈願へと人々を駆り立てたことも一因ではないだろうか。第二次大戦末期の昭和19年には、徴兵除けではなく武運長久という名目で、実は弾除け祈願で富士登拝を行ったと推測される(註23)。富士山ばかりでなく、各地の霊山や神社仏閣に徴兵除けや弾除け祈願のため、村中で、また兵役につく男性の母親や妻などの女性達も盛んに参拝し、お籠もりをした(註24)。富士垢離は災厄を除けるための共同祈願の意味もあり、富士塚への石積みと富士登拝は徴兵という災厄を除けることを願い、また徴兵されても戦場で弾丸を除ける(当たらない)ことを願って行ったのではないだろうか。富士塚への信仰が再燃する契機に、近代国家日本が戦争へと若者を駆り立てた時代背景があったのかもしれない。

### 3. 浜降りと浜垢離の民俗

静岡県内の祭りにおける浜降り 静岡市葵区日向<sup>ひなた</sup>には、「日向の七草祭<sup>ななくさまつり</sup>」という静岡県指定無形民俗文化財の民俗芸能がある。日向は、静岡市内を流れる安倍川の支流、藁科川上流部に位置する集落であり、静岡市街地から約20km北上した山間地域にある。「日向の七草祭」とは、毎年旧暦正月七日に福田寺観音堂で行われる<sup>しゅしやうえ</sup>修正会にともなう田遊び祭のことである。「日向の七草祭」は中世芸能の面影を残すとされ、詞章本の写しとして寛永21年(1644)の「寛永本」と万延2年(1861)の「万延本」が伝わっている(註25)。

この祭りの前日に大日待という宵祭があり、その前日に当番<sup>もちむね</sup>が用宗か大浜(いずれも静岡市駿河区)の浜に行

き、シオバナ（潮花）とハマイシ（浜石）を採ってくる。現在は、自家用車で行ってしまいが、かつては徒歩で当番二人が一日かけて往復した道のりであった。潮花は海水3升分、浜石は小石を両手に2杯ほどの量である。潮花で舞台と境内を清め、浜石は観音堂や舞台、境内、氏神社などの隅々に置いて結界とする（第74図）。また、村中の各家にも潮花と浜石が配られ、人々はそれらで身を清めてから観音堂へ向かう。

磐田市見付の矢奈比賣神社には、「見付天神裸祭」という国指定重要無形民俗文化財の祭礼がある。毎年旧暦8月10日前の土曜日の夜、晒しの腹巻に足袋、草鞋、白鉢巻をし、腰褌を着けた裸の男達が町中を練り巡る祭りである。この時ばかりは自動販売機の電気も消すという徹底した闇夜を創出し、女人禁制の厳粛な空間となる。この潔斎の厳しい祭りでは、旧暦8月7日にハマゴリ（浜垢離）という禊祓が行われている。かつては、屋形船で今之浦川から仿僧川へと下って福田の浜に出ていたが、現在はバスで海岸に向かっている（註26）。

見付天神の宮司らによる浜の神事後、神職・先供・輿番らは白衣を脱いで禪姿となり、海に入って禊ぎをする。先供は波打ち際で小石を12個拾い、海水で洗われた砂を採り、清浄な海水を汲んで持ち帰る。この後、各町の人も海に入り、練り、垢離を取る。この時、波打ち際の海水と砂を採り、持ち帰る町内もある。浜垢離が終わると、各町内は松林の中で、御馳走を広げて歓談をする浜遊びとなる。町内によっては「浜垢離の御馳走」として、里芋と蒟蒻、ちくわの煮物を串刺しにしたものを用意する。

伊東市新井には、隔年で行われる新井神社の祭礼がある。「新井の大祭り諸行事」として静岡県指定無形民俗文化財に指定されており、正月7日の寒風吹きすさぶ中、裸の男達に担がれた神輿が海上渡御する勇壮な祭りである。祭りには鹿島踊という民俗芸能がとまない、神輿の出御から還御まで、御旅所などの要所で踊る。若い衆が神輿を担いで東の浜で7回練った後、合図があると神輿と道具類を御召船に乗せ、西の浜まで航行してから上陸する。この御召船の中で御船歌が歌われ、それを合図に担ぎ手が神輿を迎えに行くときされている（第75図）。この祭りには多くの儀礼がとまない、漂着神を祀った由来をたどる神輿巡行が中心となっている。その最大の山場は、神輿の浜降りである（註27）。ちなみに、鹿島踊

を踊る若い衆は、お籠りの最中に何度も浜垢離をするのが通例である。

伊東市新井のような村落の祭礼における神輿の浜降りは、東日本の太平洋沿岸地域の広い範囲で確認されている。また、年中行事や個人の浜降りは九州西海岸から南西諸島にかけて顕著であるという（註28）。

富士市吉原には、市民からオテンノサン（お天王さん）と呼び親しまれている祇園祭がある。この祇園祭では御輿巡行の朝、各町で鈴川の浜へと浜降りに行く。このとき、青年が海に入って潮水（海水）を汲み、自町へ持ち帰る（第76図）。持ち帰った潮水は、町内の各戸に配るほか、神輿出御に際して青年長が笹で覆われた天王神輿にかけた後、自身も頭からかぶって身を清める。また、浜降りは禊祓のためだけではなく、磐田市の見付天神祭と同様、浜で共同飲食をする浜遊びも兼ねている。浜遊びとは、海の神との交歓を意味しており、一年の豊漁祈願をする古い習俗だと考えられている（註29）。その浜降りの様子を、明治33年生まれの男性が挿絵入りで追想している（註30）。



第75図 伊東市新井の神輿の浜降り



第76図 吉原祇園祭の浜降り（富士市）



浜おりの時の屋台には底がありません。中のおはやし連は綱に引かれるのでどうしても歩かなければなりません。鈴川の浜につくと、大人は呑めよ唄えですが、子供は砂山をすべったり波うちぎわで足をつかって遊びました。

この当時、現在のような屋台ではなく底抜け（床板のない）屋台で、芸者など遊芸に長けた人達の三味線や唄で賑やかに囃しながら浜に出かけ、老若男女が浜で遊んだ様子がうかがえる。鈴川の浜は広いこともあるが、子ども達が遊んでいた砂山に富士塚の描写は見えない。

垢離場としての鈴川の浜 鈴川の浜は、本宮浅間神社の社人にとっても重要な垢離場であった。『駿河志料』の「富士塚」の項には、次のような記載がある。

【富士塚】（石仏地藏より南へ二町許）祓禊の場なり、上に云、大宮浅間神社祓禊のとき垢離の後、大宮司社人富士塚に参詣し、御祓正鑑取（次第記にあり）又富士登山の者汐垢離をとり、石一ツ宛かつぎ上、此塚の上に置いて祓をする、因て是を富士塚と称す

ここでは、本宮浅間神社の大宮司と社人が神事の祓禊として垢離を取った後、富士塚に参詣すること、富士登山の者も潮垢離をして石を一つずつ担ぎ上げ、この塚の上に置いて祓いをする、そのためこれを「富士塚」と称するのだと記されている。すなわち、富士塚は禊ぎの場、あるいは禊ぎの場近くに築かれたものであり、浜石を拾って塚に積む行為が祓いであると解釈できる。この鈴川の浜が、大宮浅間神社の大宮司や社人、富士参詣の導者にとって禊ぎをする重要な垢離場であり、そこに築かれたのが富士塚であったと考えられる（註31）。

ところで、鈴川の地元にも祭りはあるが、吉原祇園祭のような浜降りには行わない。鈴川でハマオリという時には、土葬時代の葬儀の際、野辺送りをして墓地に土葬したあとに行う習俗をいう。墓から喪家に戻ってくると、ハマオリといって組合の人達がモロバコに握飯を詰め、酒を持って鈴川の浜へ祓いに行く。後には海岸ではなく、ハセガノヤマ（鈴川で最も高い山）に行つてハマオリをしたという。いわゆる精進落としの共同飲食のことであり、このハマオリがどこかの家であると聞けば、子ども達が握飯をもらいに来たという。

このようなハマオリは、静岡県中・東部地域でごく一般的に行われていた。葬儀後に行うハマオリでは、穴掘りの精進落としをしたり、門位牌（喪家の入口付近に立てる忌中を表わす位牌）を川に流したりするが、本来は忌中明けに行う精進落としを意味している。静岡市域では三十五日か四十九日の忌中明けに、浜へ行って白木の位牌や草鞋、杖などの死に装束の一部、故人の所持品の一部などを海に流し、線香を手向けてから後ろ（海）を振り返らずに帰ってくる。また、駿東地方の裾野市では野辺送り後に河原に下りて白木の位牌を置き、それに石をぶつけて川に流してしまう。これをハマオリというが、三十五日の忌中明けに家人だけで沼津の千本浜まで行き、そこで門位牌を流すこともハマオリと呼ぶ。このハマオリの際に浜で浜石を拾い、それを墓に手向けするという習慣がある（註32）。また、沼津市内浦ではキチュウベヤ（忌中部屋）といい、忌中期間に玄関脇の戸袋に忌中棚を設け、位牌を置いて毎日水を手向ける。この忌中棚を流すのがハマオリである（註33）。

このように、死穢が強く降りかかっている親族は、忌み籠り期間が明ける忌中明けに、死者の遺物を海浜や河原で水に流し、自らも禊ぎをして身を清め、通常の生活に戻っていくのである。こうした習慣が強く残っているのが、駿河湾沿岸地域とその後背の山間地域である。裾野市のように内陸にあっても、潮花で身を清めることを意識してハマオリと称し、浜垢離をして浜の清浄な石を拾ってくることで完結させている。鈴川の葬式後のハマオリは、まさしく鈴川の浜が浜垢離の場として認識されていたことを如実に表わしているのである。そしてその場所は、本宮浅間神社の神職達も禊ぎを行う場所であり、潤井川や和田川の淡水の流れではなく、海に面した潮花（海水）が打ち寄せる鈴川の浜なのである。これは、海水には生命を浄化させたり、再生させたりする力があるという信仰に基づいているからである（註34）。

静岡県内には、このように祭礼時の浜降りと葬儀後の浜垢離が混在する地域があるが、いずれにしても浜で行う禊禊であり、ハマオリという呼称は東部地域に、ハマゴリという呼称は西部地域に片寄る傾向がある。これは、東日本の太平洋沿岸地域の神輿の浜降りと、西日本の年中行事や個人の浜垢離との境界が、静岡県という地域で重なっていることを表わしているためかもしれない。

#### 4. 石と塚の民俗

石を積む信仰 富士山頂には噴火口があり、登拝者によってその火口縁にある峰々を廻るお鉢巡りが行われる。お鉢巡りとは、山頂の峰々を蓮の花の八葉に見立て、そこに座す仏を拝しながら他界を経験するものである。この途中に、東の賽の河原と西の賽の河原と呼ばれる場所があり、富士導者はそこで溶岩を積んでいく。このような賽の河原での石積みは、山岳信仰の山に多くあり、たとえば山形県の月山や青森県の恐山、神奈川県箱根山、鳥取県の大山などにある。五来重氏は、このように死者供養として石積みを行う賽の河原は、あの世とこの世を隔てる三途の川の河原にあり、死者をこの世に戻さない「塞の河原」でもあるとする（註35）。

また、石を積むという行為は、祈願をとまなうことも多い。遠州灘海岸の大須賀町大淵（現掛川市）には、清明塚という石塚がある。『遠江古蹟圖繪』には、安倍清明が藤塚村という所にやってきたとき、三日以内にこの村に津波が押し寄せてくる。人家が流れ、溺れ死ぬ人が数千人になると占った。村人が驚いて、どうしたらその死を免れることができるのかと聞いたところ、清明が石を並べ砂を山のように築いて塚を作るようにと教えたので、赤石を並べておいた。何か祈願をする時に、その赤石の中に普通の石を入れておくと、たちまち赤石になるという。今も、津波はこの塚より内に入ることはない、と記されている（註36）。挿絵には、旅人が珍しい赤石の塚を眺めている様子が描かれているが、現在よりもかなり高い小山（塚）である。この塚は、地元では赤石塚と呼んでおり、遠州七不思議の一つとなっている（第77図）。

この清明塚には、塚から石を借りてくると瘡瘡に罹ら

ないという俗信が加わり、願がかなえば借りた石を二倍にして納めるようになった。小豆色（赤石）でない石でも、一夜にして小豆色に変わってしまうといい、魔除けの赤に通じた俗信となっている。陰陽師の安倍晴明という宗教者が関与した塚であり、この塚より津波が入らないという伝承も、津波到達点を意味していると考えられる（註37）。藤塚村の地名の由来は淵砂が転訛したもので、かつてこの村の西は入り海であったという（註38）。スカとは砂丘のことであり、砂丘の淵にある村であったことから、高潮や津波の常習地帯であったことが想像される。砂丘地帯に築いた塚という意味では、鈴川の富士塚と同じような形状であった可能性がある。

沼津市江梨の大瀬崎には、大瀬神社（大瀬大明神）が祀られている。伊豆半島の北西部の端が、駿河湾に向けて突出した形をしており、その先端部に神池と呼ばれる淡水池がある。大瀬神社では、4月4日に大瀬祭という漁民信仰で有名な祭りが行われる。その日は大漁旗などで飾られた漁船に、化粧をして派手な長襦袢を着た女装の若者が乗り組む。かつては船が大瀬港に到着すると小若い衆が海に飛び込み、小石を詰めた福俵を担いで社殿まで石段を一気に駆け上がった。上陸した若い衆は、「六根清浄」と唱和しながら本殿や神池の祠に参拝する。この俵のほかにも、アゲイシと称して各浜の小石を社殿に奉納する（第78図）。さらに、各漁船は神社の浜の石を拾って船に取り付け、大漁の守石とする。参拝の帰りには、船の上で若い衆が馬鹿踊りを賑やかに囃しながら踊っていく（註39）。また、大瀬参りでは網の錘とする石を浜で拾い、翌年借りた分を倍返しして奉納したともいう（註40）。この祭りには、鈴川や田子の漁師達も船



第77図 大淵の清明塚（掛川市）



第78図 大瀬神社のアゲイシ（沼津市）



第 79 図 砂丘にある石造物群（富士市大野町）

で行き、この一年大漁だった船の赤い奉納幟をもらい受け、大漁にあやかるよう船の守りとする。

大瀬大明神は七浦の総鎮守であるといわれ、奥駿河湾の漁民の信仰を集めているが、日蓮が暴れる大瀬大明神を鎮めた日蓮伝説も伝わっている。大瀬大明神が八大龍王という海神であり、日蓮上人の参籠に法力を敬って夜ごと竜燈を献じたという。現在、沼津市下河原の妙海寺では、1月1日から8日までヨウカドウ（八日堂）という法要を行っている。この祈祷文はまるで波浪のリズムのように唱え、これによって沿岸の人々を暴風雨や津波から守るのだと信じられている。

砂丘に築く塚 鈴川の富士塚は、資料や伝承にある通り、砂と石でできた小丘である。天香久山（香具山）と呼ばれる砂丘より離れた位置にあり、人工的に築いたものである。このような信仰対象としての塚は全国各地に見られ、とくに富士塚と呼ばれるものは、江戸を中心に発達した富士講が築いたものがよく知られている。しかし、鈴川の富士塚はそのような系統にない塚であり、その発祥や信仰の実態について不明な点も多い。

塚とは人工的な構築物であり、祭場や祭壇の性格を主としながら、死者供養・境界指標・辟邪（<sup>へまじや</sup> 邪悪を避ける

想像上の動物）・厄除け・修法壇を示しているという（註 41）。鈴川の富士塚の場合は、富士山を遙拝し、登拝の安全を祈願する祭壇としての要素が強いと考えられる。すなわち、富士塚に富士浅間の神を勧請し、鈴川の浜で垢離を取って浜石を拾い、富士浅間に捧げることが、富士塚での祭祀なのである。山中共古が挿絵に描いた松の古木は神の依代であり、塚は磐境である（註 42）。

富士市域の海岸部には、海岸線に沿って幾筋かの砂堤列が見られ、防潮・防風林の松が植えられている。その松林の中や砂丘上に共同墓地や個人の屋敷墓、寺墓地、石造物などがいくつも見られる（第 79 図）。住宅地よりもかなり海に近い砂丘にある場合も少なくない。このような傾向は、市域だけではなく県内の駿河湾海岸から遠州灘海岸によく見られ、中には墓石が海に向かって建てられていることもある。

砂丘上に墓を築く理由の一つには、かつての土葬時代の名残で、海岸部に埋葬する習慣があったことにある。死者の霊魂が海の彼方にあるあの世へといき、盆や正月に子孫の元に帰ってくるという古い信仰に基づいたものだと考えられる。静岡市清水区の送り盆行事に灯籠流しがある。その灯籠には現在でも「大瀬大明神」と書く習

慣があり、盆に里帰りした先祖は盆が終わると皆そこに帰っていくのだと信じられている。大瀬崎の方角が海上他界であり、潮の流れに乗って灯籠は海神のいるあの世にたどり着くのだという（註43）。

遠州灘海岸沿いには、高塚、塚山と呼ばれる小丘がある。浜松市南区高塚町には、頂上に熊野神社を祀る高塚がある。高塚は、一つは津波犠牲者の供養のため、また一つは津波除けのため、さらに一つは熊野明神を祀るため、という三つの目的のために築かれたものである（第80図）。塚を築くため、浜の砂を持ち帰る浜降りという習慣が残っているという（註44）。このような塚が遠州灘には点在しており、それらは津波・高潮除けの塚であると同時に、津波・高潮犠牲者の供養塚であることもある。そして、それらの塚には隣接して神仏が祀られていることが多い。これは、神仏を勧請した塚が津波や高潮時の一時避難所となり、さらにその災害の犠牲者を供養する塚となったのではないかと推測される。

海岸部や砂丘に築く塚は、そこが神仏や死者を祀るための祭場・祭壇であり、この世とあの世の境界的な場所を意味している。その塚に浜石や浜砂を積むという行為は、海からの神迎えであり、塚の神への手向けでもある。

## 5. 富士山信仰と鈴川の富士塚

三俣淵の生贄伝説 鈴川の浜は、吉原湊の東側に形成された浜である。現在は田子の浦港として整備されているが、『駿河記』によれば、吉原湊は沼川の河口にできた津を湊としたとある。さらに、大船は入港できないが、駿河湾を往来する船や廻船が入港した。浪が高いと砂が湊口に溜まり、海潮が川を遡ってあふれ、近郷の田地が潮入になったり水損になったりした。そこで、その流れの通りに随って所々に湊口を開いた、と記されている（註45）。また、かつて富士川の流れは支流が乱流し、東からも瀬古川・滝川・姫名川・沼川が合流し、三股に集まってきた数尋の淵を形成していたとある。

現在の三俣は、港口の奥、沼川に和田川が合流した付近で、大きな淵になっているわけではない。数尋もあつた三股淵の頃、ここに大蛇が棲んでいるという言い伝えがあり、毎年6月28日に伝法村の保寿寺から衆僧が来て施餓鬼を行っていた。

この施餓鬼会は、三俣淵（または生贄淵<sup>いげにえ</sup>）の大蛇（後に龍）に生贄を供えていたという伝説がもとで始まった



第80図 高塚の熊野神社（浜松市）

行事である。江戸時代から様々な地誌類に記されてきた。次に挙げてみよう（傍線筆者）。

### ①大曾根佐兵衛『駅路の鈴』（宝永4年〈1707〉）

下総国下河辺庄古河の6人の神女があじという下女を連れて官位を得るため京に上る途中、元吉原宿に泊まった。この宿には旅の女性を三俣の大蛇の生贄にするという習わしがあり、その内の一人が生贄にされるという。そこで下女のあじ一人が急いで京に上り、雛形に強飯を添えて淵に沈めよという宣旨をもらう。急いであじが帰り、宣旨の通りに行き、6人の神女が神楽を奏した。このことによって生贄はやんだ。これは、当時知られていた話の「生贄」の話とは別の話である。

### ②『田子の古道』（享保18年〈1733〉・写本は野口本〈1844〉）

三俣は水が巻き、深さも知れない。広い淵で悪霊が住み、古くは大蛇（悪霊）がこの辺りの氏神となって、毎年祭りに生贄を供えていた。祭りは蛇と生贄の祝言として、「大日本国駿州富士郡下方鱗蛇の御池」に生贄の少女を供えて行く。また一説には、関東からやってきた7

人の神子のうち、最も若いおあじという神子が御籤にあたり、人身御供となった。6人の神子は柏原まで引返したが、生きて帰るのを恥じて浮島の池に身を投げたので、土地の者が一つの場所に埋葬した。生贄となったおあじは富士浅間の神力で救われ毒蛇は鎮まった。しかし、連れの後を追ったおあじは6人の死を知って身投げをする。それを知った見付の老人が、おあじを見付の氏神として祭った。また、柏原新田でも6人の神子を祭った。この時から富士浅間の御神力によって毒蛇が鎮まったので、高8石3斗の生贄の祭り免がある。毎年6月28日に人々が三俣に来て、川施餓鬼を行っている。この生贄の話は寛永11年(1634)頃のことか。

### ③桑原藤泰『駿河記』(文政3年〈1820〉)

大蛇が棲む三俣淵では、伝法村保寿寺の衆僧が毎年6月28日に施餓鬼を行っている。これは、この寺の之源禪師という僧がこの淵の蛇を降伏させた遺法である。その方法は、まず三俣で読経し、次に松岡の水神社で誦経して寺に帰る。その本来の意味は水祭である。

富士山保寿寺は、現在曹洞宗だがかつては真言宗で、仏原村(現前田村)にあった。之源禪師は徳川家康の命

によって三俣の蛇を調伏した。そのため、今も毎年三俣で水神の祭りを修行している。生贄免として5石あり、これは祭祀料である。

以上のことから、三俣淵の生贄伝説を次のように整理できる。

まず、生贄伝説は謡曲「生贄」のモチーフになっているが、地元の伝承とは異なること。

次に、おあじ、もしくは6人の神子は富士浅間の神力で救われたこと。そして、おあじは見付の氏神として祀られ、6人の神子は柏原新田で祀られたこと(第81図)。

最後に、この三俣の祭祀はもと真言宗寺院であった保寿寺(現在は曹洞宗)が関わり、施餓鬼という形で周辺の民衆が参列する盛大なものであった。この祭りは、三股淵で行った後に、松岡の水神社でも行い、水神祭りとして認識されていたこと。

生贄伝説として三俣淵が長く語り継がれてきた理由は、各書が指摘するように、その淵が人々の生活を脅かす場所であり、大蛇・毒竜と称された水神の祭りを怠らないことが必要不可欠だったからである。三俣淵は和田川と沼川の合流点にあった淵だが、その下流には乱流す



第81図 阿字神社里宮(富士市鈴川)

る富士川の流れと吉原湊の河口がある。台風や豪雨による洪水と高潮・高波は、陸と海の双方から押し迫り、湊口ばかりか浜一帯の家屋と田畑、さらに内陸の新田にまで潮入の被害を及ぼす大災害を繰り返してきた。そのため、東海道の吉原宿を2度も移転させ、街道の道筋も変更せざるを得なかった。それでも、この地は長く水陸交通の交差点として、人も船も行き交う要所であった。

吉原湊の宗教者 ところで、この生贄伝説にはこれをモチーフにした謡曲があった。『能楽源流考』によれば、室町時代には成立していたとされる能楽の謡本があり、「生贄」は天文14年(1545)には上演された記録が残るという(註46)。この謡の「生贄」は、次のような物語となっている。京都から東へと下る親子3人のうち、娘が御園に当たり、「大日本国駿州富士の郡下方下の郷」の御池の大蛇に娘を贄として供えることになった。しかし、嘆き悲しむ父母の大願により、「富士権現の御使、日の御子の神」が出現して、「これより生贄を止め国土安全をなすべし」と告げて、白雲に乗って富士の内院(頂上の火口)に上っていった。

つまり、中世にはすでにこの富士の御池(三股淵)が危険な池(淵)であったことが認識され、そこを通過する旅人達には有名な難所であった。そのため、毎年大蛇の祭りが行われ、生贄として少女が供えられていた。しかし、その生贄を止めさせた(大蛇を鎮めた)のが、富士権現(の使いの日御子)の神力であったのである。このような説話の背景には、富士権現の信仰を広める神子がこの三股淵付近にいて、旅人の安全を祈願する役割を担っていたのではないだろうか。

阿字神社は、現在、鈴川集落の西端、田子の浦港に面した場所に祀られている。この阿字神社は先のおあじを祀ったものとされ、元は三股にあったが、現在地に移したという(註47)。『駿河志料』には、大宮浅間(本宮浅間神社)の4月と11月の申の日の祭祀前には、社人が浜で禊祓をしたときに、この社を参拝するのが例であると記されている(註48)。また『駿河記』には、寛文の頃まで見付の渡場跡に、阿字神の巫女の「於川」という老女がいて、船手(船乗り)の初穂にて渡世をしていた。湊の波が高いときには、船手の者が巫女に湯立をしてもらい阿字神の神託を聞いたとある(註49)。おあじ(阿字)とは、おそらく富士浅間に関わりのある神子であり、この吉原湊と三股淵の祭祀を司り、富士浅間の託宣をす

る宗教者であったと考えられる。

現在、三股淵の祭祀を続けているのは伝法の曹洞宗富士山保寿寺である。元真言宗であったが、文亀3年(1503)に明天隣察大和尚が開基となって曹洞宗に改宗、永正元年(1504)に越前竜沢寺から喜雲龍怡大和尚を迎えて開山とした。2世の芝源凜乎大和尚の代に徳川家康の命を受けて、天正15年(1587)6月28日、三股淵の毒蛇の降伏を行ったと伝えられている。毒蛇調伏の修法を行ったときの法衣には、「源大納言公水神納経授戒時 拝領保寿寺之什物置ク 天正十九年辛卯年 林鐘念八日」と墨書されている(註50)。

平成29年6月27日、保寿寺住職と氏子総代、世話人とで三股淵で施食会が行われた。日本食品化工株式会社工場敷地内にある、三股淵供養塔前で日食の総務課からも3名が参列して法要が営まれた(第82図)。供養塔は計4基あり、「池蓮浄清位」と刻まれた天正15年から237年目の文政6年(1823)に建立した石塔が最も古い。そのほか、「誠妙龍王・地神水神」と彫られた大正12年の題目塔、昭和32年の「水神」塔、昭和33年の「三俣門明水神」と彫られた題目塔がある。住職によれば、降伏したのは夫婦の龍だという。そのため、雄の龍の戒名を「休念道罷禅定門」、雌の龍の戒名を「池蓮浄清禅定門」と塔婆に記して読経する。供物は赤飯で、かつては三股淵に献じると、翌日に空の器が淵から上がった(召し上がった)と伝えている。

これらのことから、この三俣淵での水神祭が地域の住民にとって重要な祭りであり、龍の降伏とはつまり三俣淵の洪水除けを意味していることがわかる。保寿寺の住職が関わるようになるのは徳川の領地になってからであり、渡邊繁治氏は二世芝源凜乎が河川改修工事に何らかの関わりが



第82図 保寿寺の施食会(三俣淵)

あったからではないかと推測している（註51）。

富士塚への信仰の変遷 本稿では、静岡県内の富士山信仰と民俗によって、鈴川の富士塚の信仰的背景を探ってきた。しかし、確実に富士山禪定に結びつく根拠は得られなかった。ここで改めて、吉原湊と鈴川周辺における富士山信仰について民俗学的見地にたって整理してみたい。

- a. 三俣淵に祀られた阿字神社は、富士浅間の託宣をした神子を祀ったものである。
- b. 阿字神社の巫女は、吉原湊に停泊した船乗りの航海安全を祈願していた。
- c. 三俣淵での保寿寺による施餓鬼は水神祭りであり、引き続き松岡水神社の水神祭りをを行うものであった。
- d. 三俣淵と松岡水神は、本宮浅間神社祭祀と関わりがある（現在も流鏝馬前に水神社で神事を行う）。
- e. 鈴川の浜は浜降り、浜垢離をする場として、近世初頭にはすでに知られていた。
- f. 鈴川の浜に築かれた富士塚は、富士浅間の神を勧請し、富士禪定の無事を祈る場であった。浜石を積んで富士禪定の無事を祈願した。
- g. 本宮浅間神社の祭祀に先立って、宮司や社人、鑑取などが鈴川の浜で禊ぎをし、富士塚で祓いをしていた。
- h. 富士塚には、近隣の漁師が木花開耶姫に点す石灯籠を奉納し、大漁を祈願した。
- i. 鈴川では浜垢離の習慣はないが、明治末期から第二次大戦前までは、富士登拝をする人々が浜石を拾って富士塚に供えてから富士山を目指していたと伝えている。

これらの中で、富士山信仰に直接関係がないのはcくらいであろうか。時系列で並べるには、根拠がほとんどないため困難であるが、これまでの経緯から富士塚の意義を述べてみたい。

鈴川の富士塚は、浜の禊場に築かれた塚であり、本宮浅間神社の祭祀を行う宮司や社人、鑑取、富士登拝をする導者の禊祓をする重要な拠点であった。鈴川の浜は、海と陸との境であり、この世とあの世の境でもある。その磐境に勧請されたのが富士浅間の神である。塚の富士浅間に清浄な浜石を手向けるということは、ここから富士禪定が始まる、すなわち聖域に入っていくことを意味する。富士山信仰における禪定とは、神仏の世界に入って生まれ清まる擬死再生のことである。死の世界に赴く

ための禊ぎをする場として、浜垢離をする鈴川の浜と祓いをする富士塚は重要であった。そして、富士禪定では繰り返し垢離を取りながら山頂を目指す。その途中の垢離場とは、本宮浅間神社の湧玉池であり、村山大日堂の龍頭滝であり、それらは淡水の垢離場である。出発点が潮水の垢離場であることが重要なのである。このような精進潔斎は中世から行われ、「富士参詣曼荼羅」にも垢離を取る導者の姿が描かれている（註52）。

このように富士山信仰における富士塚を見ていくと、その発生や信仰の変遷が垣間見える。水神信仰が強く残っている三俣淵と阿字のような神子は、富士山の水神祭祀と結びつく古い信仰の系譜にあった。一方で、富士山が山岳修行の場となり、修験者が山籠りのための垢離取りを盛んに行うようになる。また、本宮浅間神社の宗教者達も国家祭祀のための禊祓をする。この双方が潮垢離をして禊祓をしたのが、鈴川の浜と富士塚であった。富士塚は富士浅間を遙拝し、聖域に入っていく結果であった。おそらく、これが近世初め頃までの富士塚をめぐる信仰のありようだったのであろう。

やがて近世に入ると、庶民が富士山頂をめざす富士禪定が盛んになっていく。富士山信仰の布教活動をしたのは、富士山麓に住む御師や法印達であった。五街道も整備され、庶民が旅をする条件はかなり整ってきた。しかし、吉原湊に直結していた吉原宿は度重なる災害で2度も移転を繰り返し、そのため東海道の道筋も変更せざるを得なかった。その結果、鈴川の浜での浜垢離は東海道筋から遠く離れてしまい、立ち寄る富士導者はほとんどいなくなった。かろうじて、本宮浅間神社の神職達が禊祓にやってくるのみであった。しかし、その一方で田子や鈴川など周辺の漁民、吉原湊を利用する廻船の船乗り達は、富士浅間の神徳を信じ、託宣をする巫女に湯立をしてもらい、大漁満足・航海安全の祈願として石灯籠を奉納した。

この富士塚が再び脚光を浴びるのは、近代に入って日露戦争後のことである。富士浅間への祈願は、徴兵除け・弾除けへと変わり、浜垢離をして浜石を拾い、富士塚に積んで富士山頂を目指した。この頃は見事な松と石塚が露出していた。これも、第二次大戦が終了すると収束していく。昭和生まれの人達には、富士登拝の導者を直接見た経験がある人はいない。潮除け堤の際にあった富士塚は、防潮林の松林の中に埋もれてしまい、その形もかな

り崩れてしまった。この富士塚を復活させ新たに塚を築き直したのが、昭和51年のことであった。

おわりに

本稿では、富士塚の民俗的意義を鈴川の浜での浜垢離と不即不離の関係としてとらえ、浜に築いた塚の宗教性を探ってみた。現在の富士塚もまた、富士山を遙拝する場所として重要な信仰対象であるといえよう。

#### 【註】

- 1 静岡県郷土研究会協会編『静岡県神社志』1941年、日本仏書センター復刻、1980年
- 2 『静岡県史』資料編24 民俗二、1993年、935頁
- 3 「古来所伝祭式」（富士宮市教育委員会『富士宮市指定無形民俗文化財 富士山本宮浅間大社流鏑馬調査報告書』2007年、39頁）
- 4 松田香代子「漁民信仰の烏帽子山」（静岡県環境民俗研究会編『山と森のフォークロア』羽衣出版、1996年）
- 5 松田香代子「浅間神社を祭る一岩山」（出典は（註4）に同じ。）
- 6 松田香代子「山焼きの残る大室山」（出典は（註4）に同じ。）、伊東市史民俗部会「大室山をめぐる民俗」（『伊東の今・昔—伊東市史研究』5号、2005年）
- 7 荻野裕子「伊豆半島最南端の富士山—小型富士の信仰形態 その1—」（『静岡県民俗学会誌』第24号、2003年）、荻野裕子「西伊豆、もう一つの富士の姉山—小型富士の信仰形態 小下田浅間山の場合—」（静岡県民俗学会編『創立30周年記念論文集 中日本民俗論』岩田書院、2006年）。渡井正二氏によれば、伊豆の富士山・浅間山・浅間神社は、三島市芝本町・旧大仁町宗行寺（現伊豆の国市）・旧修善寺町牧之郷（現伊豆市）・旧土肥町小下田（現伊豆市）・旧中伊豆町下白岩（同市）・松崎町雲見・同町峰輪・同町門野・南伊豆町下小野・同町石廊崎・同町三坂富士（地名不詳）・下田市本郷・東伊豆町白田・伊東市池の14か所が確認できるという（「伊豆の浅間神社」富士宮市教育委員会編『村山浅間神社調査報告書』2005年、90-92頁）。
- 8 『静岡県史』資料編25 民俗三 1991年、991頁
- 9 『豊田町誌』別編Ⅱ 民俗文化史 2001年、533-537頁
- 10 『福田町史』資料編 民俗 1999年、290-291頁
- 11 『浅羽町史』民俗編、1998年、350-354頁
- 12 『竜洋町史』民俗編、2005年、622-625頁
- 13 （註9）に同じ。603-606頁
- 14 （註10）に同じ。291頁
- 15 （註11）に同じ。262頁
- 16 志村 博「菊川町の富士垢離」（富士市立博物館『博物館だより』39号、2002年）、堀内眞「段平尾のサンゲサンゲ行事」（西郊民俗談話会『西郊民俗』180号、2002年）、堀内眞「村山口を中心とする富士信仰関係資料」（国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告』第142集〔共同研究〕宗教者の身体と社会、2008年）
- 17 （註7）渡井論文に同じ。93-101頁
- 18 『田子の古道』（享保18年〈1733〉、写本は天保15年〈1844〉ほか）、『駿河記』（文政3年〈1820〉）、『駿河国新風土記』（天保5年〈1834〉）、『駿河志料』（文久元年〈1861〉）
- 19 山中共古「吉居雑話」（『諸国叢書』成城大学民俗学研究所、1984年、12-13頁）
- 20 元吉原尋常小学校・柏原尋常小学校『富士郡元吉原村誌』（大正元年〈1912〉）
- 21 『田子の古道』（享保18年〈1733〉、野口本は天保15年〈1844〉写）の引用か所は次のとおりである。「富士塚ハ自然ノ砂山ニアラズ此辺砂ニテワザト築上ケタル離レ山ノ山巔ニ宮居鳥居アリテ這ヒ曲ミタル古木ノ松四方ニハビコリ以前北條安房守様ヨリ元吉原ノ古湊ノ辺ニ伊勢新九郎殿ノ森是アル由ニテ度々尋有リシニ知レズ 今按スルニ正シク此富士塚ナルベシ イツノ頃ヨリカ富士参詣ノ輩浜下リシテ石一ツヅカツギ上ゲ此ニ登リテ富士登山ノ足軽キコトヲ願フ 依テ富士塚トハ云ナセルナリ」
- 22 富士市市民部文化振興課編『富士市文化財調査報告書第五集 岩淵鳥居講』富士市教育委員会、2017年、28-29頁、32-34頁
- 23 大江志乃夫『徴兵制』（岩波新書、1981年、118-130頁）。大江は「徴兵よけ・弾丸よけ信仰」の対象となる神仏に共通するのは、多くが山の神であるという指摘をしている。富士山もそういう意味では山の神



- であることに違いないが、大江が挙げている山の神は静岡市の竜爪大権現や浜松市の奥山半僧坊など、ほとんどが修験道に関わりの深い飯綱権現のような像容を持つものである。
- 24 喜多村理子『徴兵・戦争と民衆』（吉川弘文館、1999年、68-74頁）。喜多村は、鳥取県の大山（伯耆富士）でも、仲間の徴兵逃れの祈願のため、ムラの青年達がお籠もりをしたことを記している。
- 25 静岡市市民局文化スポーツ部文化財課編『静岡県指定無形民俗文化財調査報告書 日向の七草祭』静岡市教育委員会、2006年、40頁
- 26 見付天神裸祭保存会編『国指定重要無形民俗文化財 見付天神裸祭の記録―「以前の裸祭」の調査報告書―』見付天神裸祭保存会、2010年、48-49頁
- 27 伊東市史編さん委員会編『伊東市史調査報告 第三集 伊東市の民俗 聞き取り資料集』伊東市教育委員会、2008年、71-87頁
- 28 「浜降り」（『日本民俗大辞典』下、吉川弘文館、2000年、387頁）
- 29 富士市教育委員会編『富士市文化財調査報告書第四集 吉原祇園祭』2014年、1頁
- 30 矢部新作『吉原っ子』私家版、1969年、7頁
- 31 大高康正『参詣曼荼羅の研究』（岩田書院、2012年、232頁）、荻野裕子「富士講以外の富士塚―静岡県を事例として―」『民具マンスリー』第38巻10号、2006年ほか。大高氏は東国からの導者誘致ルートに、浜垢離が重要なイベントであったことを指摘している。また、荻野氏は、この富士塚が本宮浅間神社の社人が築造者ではないかと推定している。
- 32 『裾野市史』第7巻 資料編 民俗、1997年、593-594頁、598-600頁
- 33 『沼津市史』資料編 民俗、2002年、153-155頁
- 34 （註28）に同じ。
- 35 五来重『石の宗教』講談社学術文庫、2007年、102頁
- 36 神谷昌志修訂・著『遠江古蹟圖繪』全、明文出版社、1991年、100-104頁
- 37 松田香代子「防災・減災の知恵を伝える」（『千年に一度の大地震・大津波に備える～古文書・伝承に読む先人の教え～』しずおかの文化新書10、財団法人静岡県文化財団、174-176頁）
- 38 「藤塚村源左衛門方」（『角川地名大辞典』22 静岡県、角川書店、1982年）
- 39 松田香代子「漁民信仰の大瀬崎」（出典は（註4）に同じ）
- 40 沼津市歴史民俗資料館編『沼津静浦の民俗 沼津市文化財調査報告書』沼津市教育委員会、1997年、63-64頁、151頁
- 41 「塚」（『日本民俗大辞典』下、吉川弘文館、2000年、122頁）
- 42 （註19）に同じ
- 43 燈籠流しは、市街を流れる巴川中流で行われる行事だが、現在は環境に考慮して川の下流で燈籠を回収している。
- 44 松田香代子「防災・減災の知恵を伝える」（前掲（註37）、163-164頁）
- 45 桑原藤泰『駿河記』文政3年（1820）（臨川書店復刻、1974年）
- 46 大高康正「富士山縁起〔解説編〕」（『富士山縁起の世界―赫夜姫・愛鷹・犬飼―』富士市立博物館、2010年、55頁）
- 47 「阿字神」（註20）に同じ。
- 48 新宮高平『駿河志料』文久元年（1861）（歴史図書社復刻、1969年）
- 49 桑原藤泰『駿河記』文政3年（1820）（臨川書店復刻、1974年）
- 50 『保寿寺～開創五百年記念誌～』保寿寺、2005年
- 51 （註50）に同じ。21頁
- 52 （註31）のうち大高氏著書、232頁

## 第5章 総括

はじめに

本書では、「鈴川の富士塚」の実像を明らかにするため、地質学、考古学、文献史学、民俗学といった各分野から様々な視点でのアプローチを試みた。その結果、本調査で富士塚の成立とその変遷について一定の成果を得ることができた。

本章では3章、4章の調査成果を元に、構造や成立年代、信仰の変遷について整理し、「鈴川の富士塚」の実像を探ってみたい。なお、最後に本調査にて明らかとなった今後の研究課題を提示して結びとしたい。

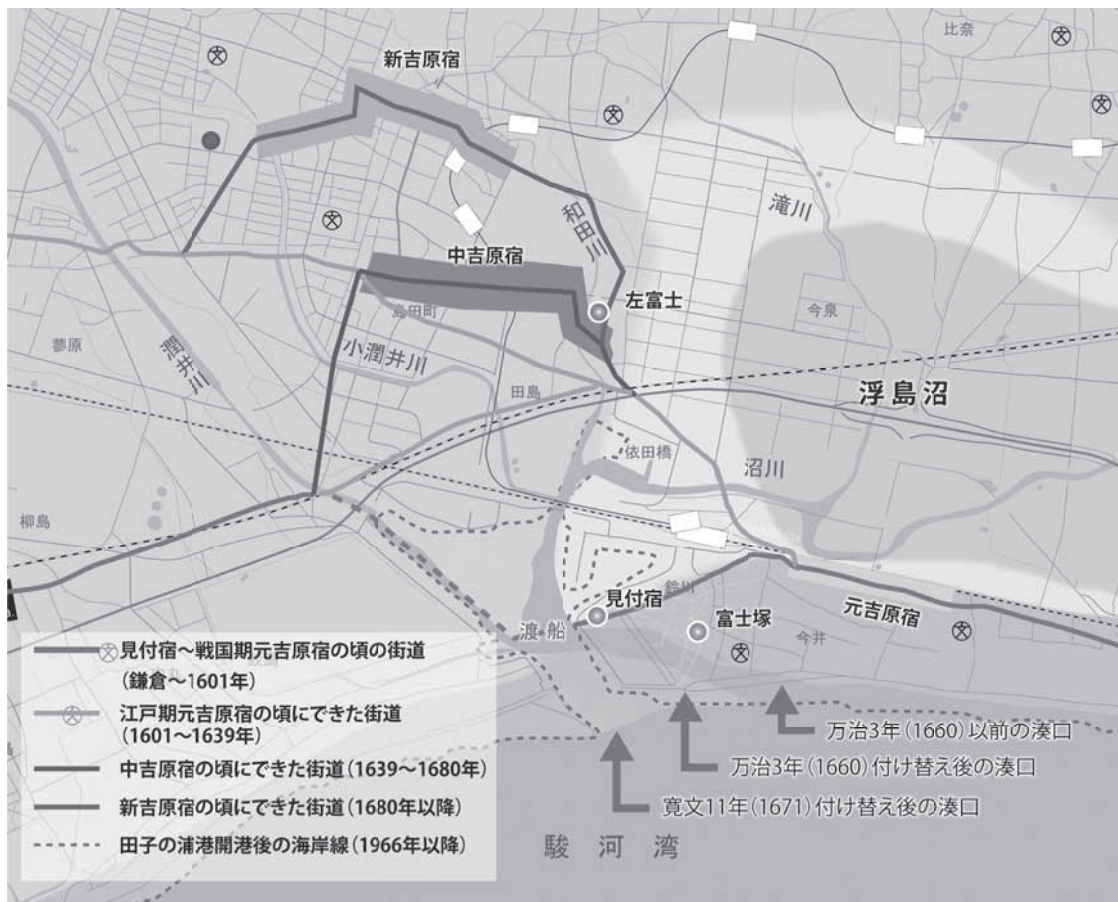
### 1. 富士塚周辺の地形変化

「鈴川の富士塚」周辺は中世～現代へと大きく地形が変化している。このことは富士塚の実像を検討する上で、重要な要素となる。ここでは富士塚の実像について探る前に、塚周辺の地形変化の変遷について触れてみたい。

富士塚南に位置する吉原湊は、古代から陸海上交通の重要な拠点として機能してきた。これに伴い、宿（見附宿）が湊に隣接して設けられ、隆盛した。「鈴川の富士塚」もこの時期に成立したと推測される。

しかし、同地は駿河湾に面していることから多くの自然災害に襲われた地域でもあった。風砂によって移転を余儀なくされた元吉原宿、中吉原宿を壊滅させた延宝8年（1680）等の高潮被害は代表的な事例といえよう。延宝8年の高潮の被害は『田子の古道』に詳細に描かれている。『田子の古道』には「…元より湊塞がざれば、潮引き返し、（中略）そ波によって富士塚、地蔵の間の大平、一つの池となりて、広深し。底は富士川のごみにて、潮たたえる事三年…」と、高潮以後、三年間に渡って、富士塚周辺に汐水が溜まっていたと記されている。

また、高潮の被害は湊口を閉塞してしまうことも多かった。『田子の古道』には万治3年（1660）の高浪被



第 83 図 吉原湊口と街道・宿場の変遷 (藤村 2017 より転載)

害後湊口が閉塞し、それまでの湊口から西へ5丁湊口を移動したと記されている。寛文11年(1671)にも同様な被害があった。これにより、湊口は現在の港口の位置に付け替えられたとされる。また、湊口の閉塞は周辺田畑に甚大な汐被害を及ぼした。このため、富士塚が所在する富士郡鈴川村、依田橋村、田島村、中川原村、今泉村などを含む32ヶ村(註1)が湊付けとされ、組合を造り、湊口の移動や湊口堀明け(註2)、防潮堤の建設など、湊とその周辺管理を行ってきた。江戸時代後期にまとめられた『富士郡今泉村往古高抜差邑寶鑑』によれば、文化13年(1816)に吉原湊を中心とした浪除堤防を計画し、工事をしたところ、高浪によって一瞬にして流れさってしまったと記されている。現在、富士塚周辺に残る防潮堤は慶応2年(1866)、富士郡西比奈村名主野村一郎発起により、湊付34ヵ村(註3)によって作られたものと推測される。これについても明治2年(1869)の暴風雨によって大破した。湊口が安定するのは、明治17年に湊口に建設された石水門(註4)完成後のことである。

以上のように富士塚周辺は度重なる災害や、それに対

する大規模工事によって、近世以降、様々な地形の改変が行われた。この地形改変の影響から、現在の地形は、「鈴川の富士塚」が造営される近世以前の地形とは大きく異なっていたことが明らかである。

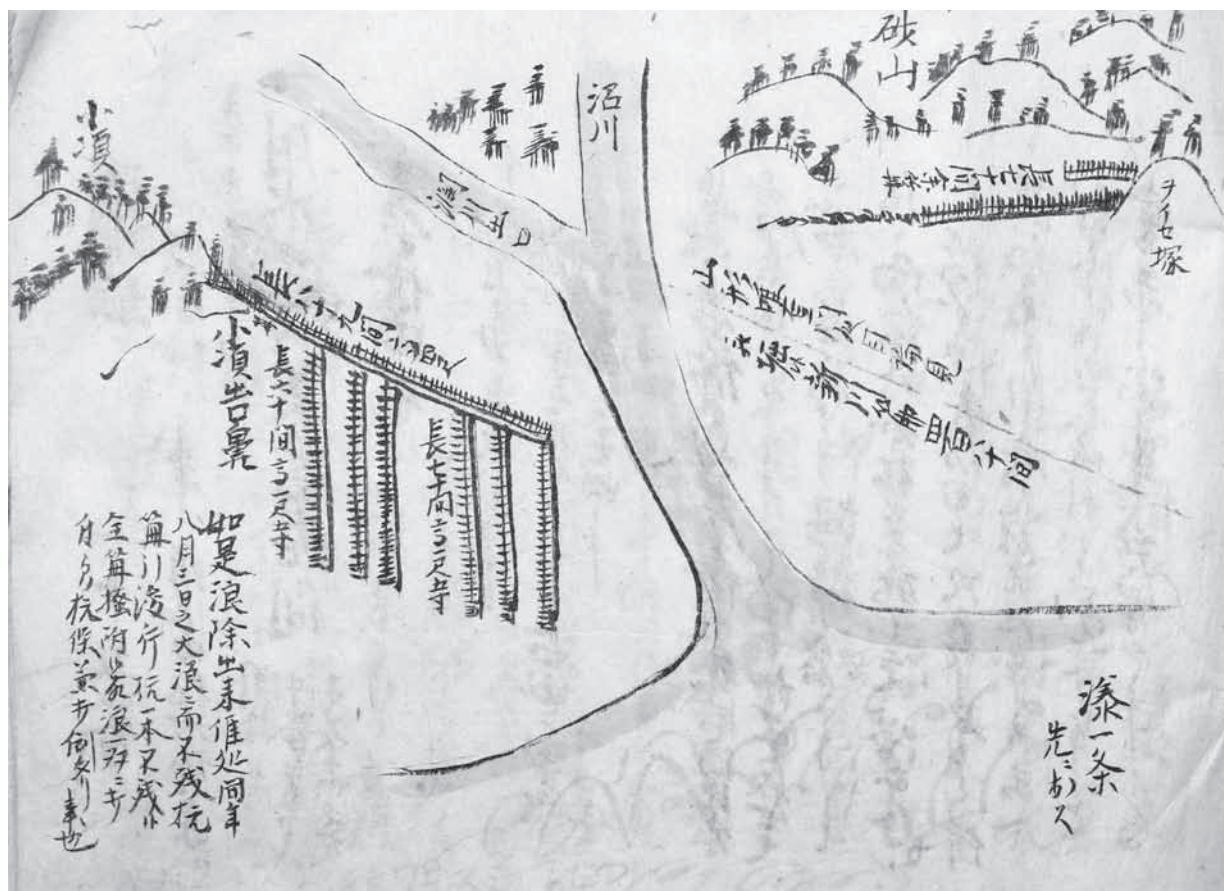
## 2. 富士塚の実像

### (I) 富士塚の成立

「鈴川の富士塚」がいつ成立したものか、文献、絵図等の資料で今のところ確認されていない(井上第4章第4節)。ただし、近世初頭に塚上に浅間社を祀り、それを「富士塚」と呼称していた事例が関東を中心に認められ、また、静岡県内においても静岡市清水区興津にある霊山寺の文書に「富士塚」の文言が記されている(大高第4章第3節)。

「鈴川の富士塚」は近世中・後期の地誌で、富士山登拝前に浜垢離した後、塚に石を積み上げたと紹介されているものの、地誌が書かれた近世後期に現存した習俗ではなく、伝聞、伝承していたものと考えられる(井上第4章第4節)。

また、近世以前の塚周辺は田子の浦砂丘上に通って



第84図 今泉邑寶鑑(富士市立中央図書館蔵)

いた古代東海道が中世においても継続し、中世の吉原宿（見附宿）と吉原湊が周辺の交通の結節点の役割を担っていた。同地は古代～近世を通じてこの地域を行き来する人々にとって意識されていた（池谷第4章第2節）。

以上のことから、明確な根拠資料はないものの、「鈴川の富士塚」が近世以前に成立した可能性が高いものと考えられる。

## (2) 塚の構造

「鈴川の富士塚」はこれまで確認調査を4回実施している。平成27年の調査は塚本体を初めて調査した事例である。

確認調査の結果、富士塚は地表から2.60mほどの自然低丘であることが明らかとなった。このため、塚本体は『田子の古道』、『駿河志料』等の江戸時代後期の地誌の記述にみられる人工的な造作ではないと判明した。ただし、塚周辺に散在する礫は分析によって、富士川河口の石で、駿河湾海岸の浜礫と同質であることから、富士塚の積石として使用された可能性が高いと指摘された（山本第4章第1節）ことから、自然低丘に石を積み上げた構造であったものと考えられる。ただし、石積の年代は明らかでない。

## (3) 富士塚と吉原湊と宿

前記したとおり、万治3年の高潮によって湊口は従来の場所から移動したとされる。それ以前は第83図で示すように湊口は、現在の田子の浦港口よりも東寄り、見附宿の推定地や富士塚の南を通り、河口が開いていたと推測される（藤村2017）。

吉原湊と宿（見附宿）は中世から近世初頭、東海道、海路、渡船など、多くの交通の結節点に位置する流通の要であった（池谷第4章第2節）。このため、湊口や「見附宿」から近く、浜垢離をしやすい地を選択したのであろう。

ところが、近世以降、塚の周辺の地形は湊口の移動、高潮等の災害、それに対する備えを繰り返すことによって、大きく変化した。宿場も中吉原宿、新吉原宿と内陸に移動し、それに伴い東海道も内陸に付け替えられた。このことが原因で、吉原湊は、交通拠点としての重要性が失われ、衰退していったものと考えられる。この時期から湊や周辺の管理は、湊を利用し、また、災害によって潮の被害を受ける村々の共同事業として管理され、いわゆる地域の湊となったのであろう。

このことが富士塚の信仰に対する変化の大きな要因



第85図 富士塚に至る鳥居



第86図 富士塚の浅間宮社

になったと考えられる。

## (4) 塚への信仰の変遷

『田子の古道』や『駿河志料』といった地誌には富士山の登山者が自らの登山安全を祈願するための場と記されている。しかし、本調査の結果、「鈴川の富士塚」は他に2種類の信仰パターンがあったと推測される（井上第4章第4節）。ひとつは現存する石燈籠の刻文と文献資料から、地元の漁師たちが木花開耶姫に祈りをささげる場所としたこと、もうひとつは富士山本宮浅間大社の祭礼が行われる場所とされていたことである。

中世から近世初頭において鈴川の浜は富士山本宮浅間大社の社家・社人や富士登山の導者の禊場として重要な拠点であった（松田第4章第5節）。その禊場である塚に浅間宮を勧請したのは、ごく自然な考えであったろう。このため、富士山に登る際に、禪定という境界を超える神事として自然低丘に石を供えたものが「鈴川の富士塚」の始まりだと推測される。ところが災害によって見附（吉原宿）が移転され、それに伴い吉原湊の交通拠点としての機能が衰退していくと、浜での垢離や塚に石を積む行為も廃れていった。

吉原湊は江戸時代中頃に地域湊となり、その管理は湊に関わる周辺各村の役割となった。このころになると富士塚は地域の漁民が漁の無事を願う祈りの場へその役割を変化させていった。塚周りに現存する石燈籠の記年銘と平成27年度確認調査で出土した肥前焼塚の年代観が同時期であったことは(石川第3章第2節)、この表れといえよう。ただし、富士山信仰の視場としての役割が完全に失われたわけではない。富士山浅本宮浅間大社の社家・社人が禊祓の場として引き続き、利用していたのであろう。このため、当初の信仰形態は完全に忘れ去られること無く、地誌に記載され、伝承として受け継がれていったものと考えられる。

明治～昭和初期になると鈴川の地域は景勝地として絵葉書等の題材にとり上げられた。そのなかで「鈴川の富士塚」は「天香具山」という名所の中へと内包されていった(井上第4章第4節)。

他方、塚周辺の住民に聞き取り調査を行ったところ、この時期に富士塚に石を積み、富士登山を目指したとする証言を得た。明治から昭和初期は戦争が頻発した時代でもある。富士山への祈願が、徴兵除け・弾除けへと変化し、「鈴川の富士塚」で行われた行事が再び、脚光を浴びることとなった(松田第4章第5節)。しかし、第2次世界大戦以後は再び名所としての機能や塚への信仰が失われ、地元でも忘れ去られていった。

昭和50年以降、富士塚は再び注目を浴びる。地元有志によって昭和51年にもとの位置といわれる場所に造形されたからである。その後、園路や参道が整備され、富士山眺望も踏まえ、現代で脚光を浴びることとなった。

現在、毎年5月5日に祭礼が行われ、富士塚への信仰は現代へと引き継がれている。

#### おわりに

本章では各分野の調査成果を踏まえ、現状で判明したことを整理し、塚の構造、時代による信仰の変遷、吉原湊と宿との関係について検討した。

ただし、「鈴川の富士塚」の成立時期の確定、昭和51年の造形以前の塚の位置といった課題も改めて確認された。ここで課題をあげてみたい。

塚の成立時期を明らかにするためには、塚に石を積

んだであろう導者(参詣者)の証言が不可欠である。導者に関連する文献資料の発見やそれに関連する調査が今後、必要であろう。また、第4章第4節で井上氏が指摘したとおり、昭和34年以前の航空写真には塚の現在位置よりも南に低丘が確認できる。地元への聞き取り調査で、この低丘についての証言を得ることができなかった。今後、この低丘の正体を確認するため、更に詳細な調査が必要であろう。

現在の富士塚は昭和51年以降に新たに造成されたものである。基盤となる自然低丘はのこされていたものの、明治～昭和初期の絵葉書の姿とは掛け離れたものとなっている。

しかし、この復元によって注目を集め、富士山信仰の拠点として、また、地域のシンボルとして果たしている役割は非常に大きい。今後ともこの歴史的事象を継承し、現状のまま地域で「鈴川の富士塚」を保護していただくことが重要であろう。このことを祈念して、本書の結びとしたい。

#### 【註】

- 1 『鈴川の歴史』『須津文書』中の「乍恐以書附奉願上候」に32ヵ村の村主の連名がみられる。
- 2 湊口が閉塞することによって、海水があふれ、周辺に流入することから、埋まった湊口を掘削すること。
- 3 水野精一編『浮島ヶ原開拓史』によると野村一郎による慶応年間の湊口防潮偵邸堤建設の際には34ヵ村で組合を形成していた。湊口付けについては前述の「須津文書」でも16ヵ村としている。
- 4 明治18年(1885)湊付34ヵ村によって築造された。六つ眼鏡と愛称され、昭和41年の田子の浦港築港まで機能していた。

#### 【参考文献】

- 鈴木富男 1975 『目でみる富士市の歴史』 緑星社  
鈴木富男 1980 『鈴川の歴史』 鈴川区管理委員会  
藤村 翔 2017 平成28年度テーマ展「富士へとつながる海の道—吉原ミナトの交通史」 解説パネル 富士山かぐや姫ミュージアム  
水野精一編 1951 『浮島ヶ原開拓史』 沼川水害予防組合

写真図版





1. 駿河湾から望む富士市（富士市シティプロモーション課提供）



2. 富士塚から望む富士山（平成 27 年度調査前）



1. 平成 27 年度調査 浅間宮社撤去後（南東から）



2. 平成 27 年度調査 表面コンクリート撤去作業（南東から）



3. 平成 27 年度調査 表面コンクリート撤去後（南東から）



5. 平成 27 年度調査 1 トレンチ完掘（南東から）



4. 平成 27 年度調査 頂上部半裁（南から）



6. 平成 27 年度調査 1 トレンチ北壁土層断面（東から）





1. 平成 27 年度調査 2・3 トレンチ完掘（北東から）



2. 平成 27 年度調査 2 トレンチ西壁土層断面（北東から）



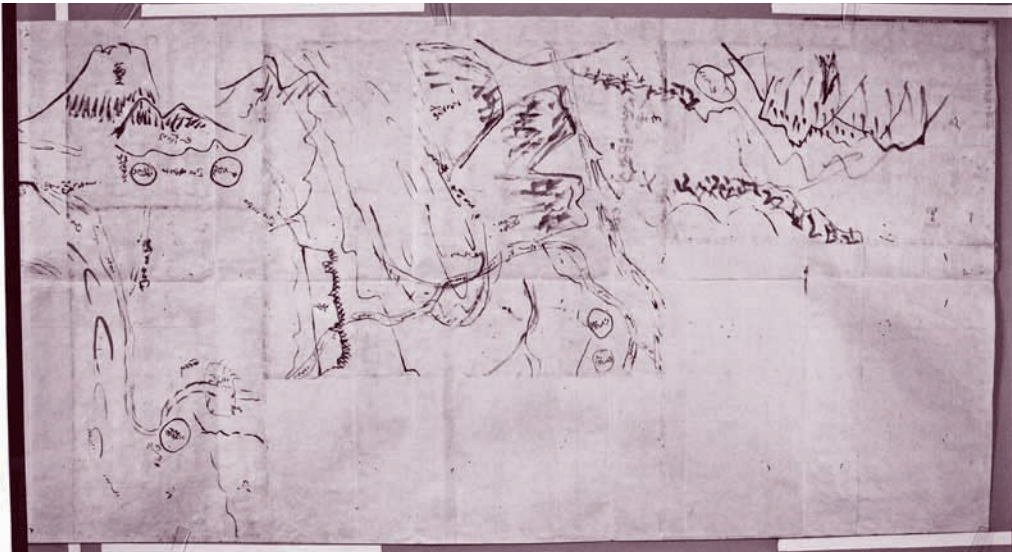
3. 平成 27 年度調査 近世遺物出土状況（北から）



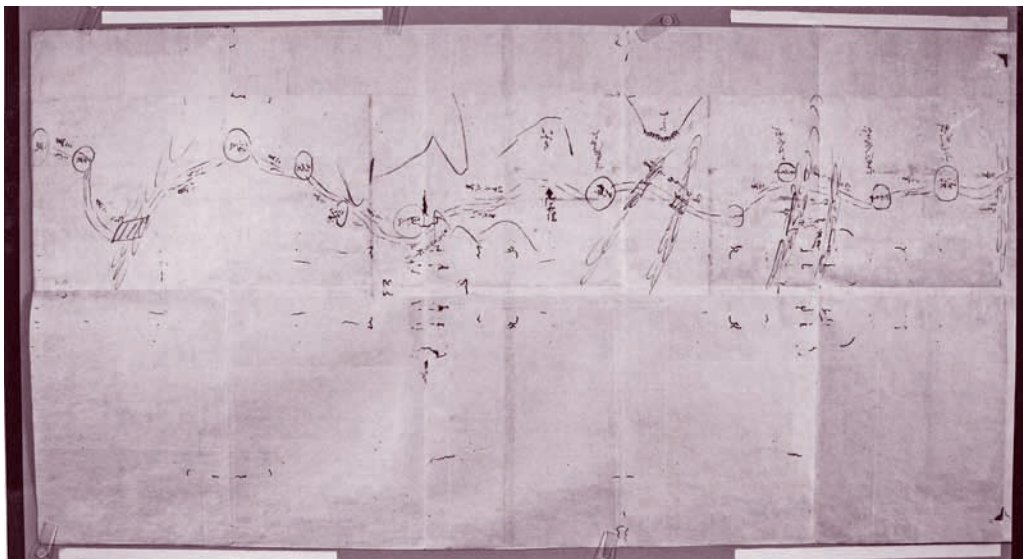
1. 平成 27 年度調査 裾部礫検出 (南東から)



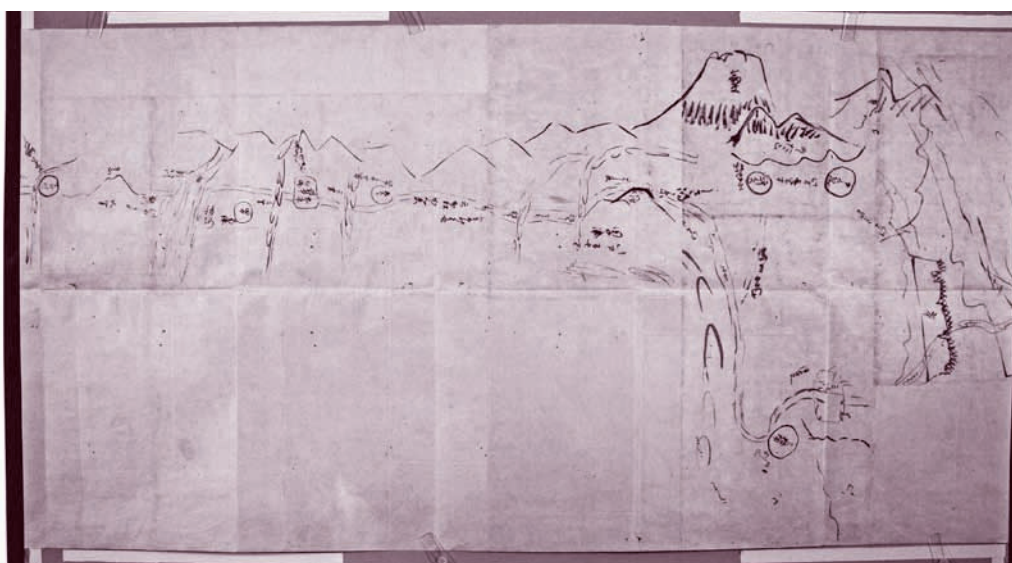
2. 平成 27 年度調査 3 トレンチ完掘 (南東から)



1. 小田原ノ陣之時海道筋諸城守衛図① (山口県文書館所蔵)



2. 小田原ノ陣之時海道筋諸城守衛図② (山口県文書館所蔵)



3. 小田原ノ陣之時海道筋諸城守衛図③ (山口県文書館所蔵)

# 報告書抄録

ふりがな	すずかわのふじづか						
書名	鈴川の富士塚						
副書名							
巻次							
シリーズ名	富士市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第六集						
編著者名	石川 武男（編著）池谷 初恵・井上 卓哉・大高 康正・松田 香代子・山本 玄珠（著）伊藤 愛（編）						
編集機関	富士市教育委員会（担当課：市民部 文化振興課）						
所在地	〒417-8601 静岡県富士市永田町1丁目100番地 TEL 0545-55-2875 E-mail:si-bunka@div.city.fuji.shizuoka.jp						
発行年月日	平成30年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード		所在地			
所収遺跡	所在地	市町	遺跡	北緯	東経		
ふじづかいせき	しずおかけんふじし すずかわにしちよう	22210	118	35° 08'22.85296"	138° 42'07.91147"		
富士塚遺跡	静岡県富士市 鈴川西町						
調査年次	調査期間	調査面積	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	発掘原因
第1地区1次調査	20080805 ～ 20080806	29㎡	信仰関連遺跡	近世	なし	なし	周辺整備
第1地区2次調査	20090623 ～ 20090630	8㎡	信仰関連遺跡	近世	なし	なし	周辺整備
第1地区3次調査	20151208 ～ 20160121	23㎡	信仰関連遺跡	近世	自然低丘	陶磁器・鉄製品	周辺整備
第1地区4次調査 (測量)	20170703 ～ 20170727	—	信仰関連遺跡	近世	なし	なし	範囲確認
要 約	<p>本書では、富士市鈴川に所在する富士塚遺跡の発掘調査及び文化財調査の成果を報告する。</p> <p>富士塚遺跡は北に富士山を望み、駿河湾に隣接する田子の浦砂丘上に位置する富士山信仰に関連する遺跡である。富士塚は江戸時代の地誌には、富士山登拝前に石を積み上げ、安全を祈願したと記載されている。</p> <p>確認調査の結果、昭和51年に復元された埋土下に、地上高2.60mほどの自然低丘が確認された。周辺に散在する礫は分析の結果、周辺の海岸から持ち込まれた可能性が高いことから、塚は本来、自然低丘に石を積み上げたものと確認された。</p> <p>出土遺物資料は少ないものの、18世紀中頃の肥前焼の碗が出土した。</p> <p>「鈴川の富士塚」は富士講成立以前、中世に成立したものと考えられ、江戸時代初めに本来の信仰形態は断絶したと考えられるが、江戸時代中期に浅間宮を勧請し、吉原湊を管理する各村で信仰されていた。</p> <p>また、富士山本宮浅間大社の儀礼場とされていた。明治～昭和初期に、再び本来の信仰形態が復活したが、塚が復元される昭和51年までは再び断絶していた。復元以後は、地域の広場として整備され、数多くの人々が訪れている。</p>						

富士市文化財調査報告書 第六集

## 鈴川の富士塚

発行年月日 平成 30 年 3 月 31 日

編集・発行 富士市教育委員会

〒 417-8601 静岡県富士市永田町一丁目 100 番地

TEL 0545-55-2875 FAX 0545-53-0789

E-mail:si-bunka@div.city.fuji.shizuoka.jp

印刷・製本 文光堂印刷株式会社

〒 410-0871 静岡県沼津市西間門 68 番地の 1

(富士市行政資料登録番号 29-58)

この山は

自然の砂山にあらず

この辺りの砂にて

わざとつき上げたる

はなれ山なれば

いただきに宮居

鳥居ありて

古木のはいゆがみたる

そぎ

松四方へはびこる

いづれの頃より

富士参りの輩

浜下りして

石売つずつ荷い上げ

この山へ登りて

富士禪定の

軽からん事を頼み

これにより

富士塚とはいうなり

